

9.13

H.12

新編海草子

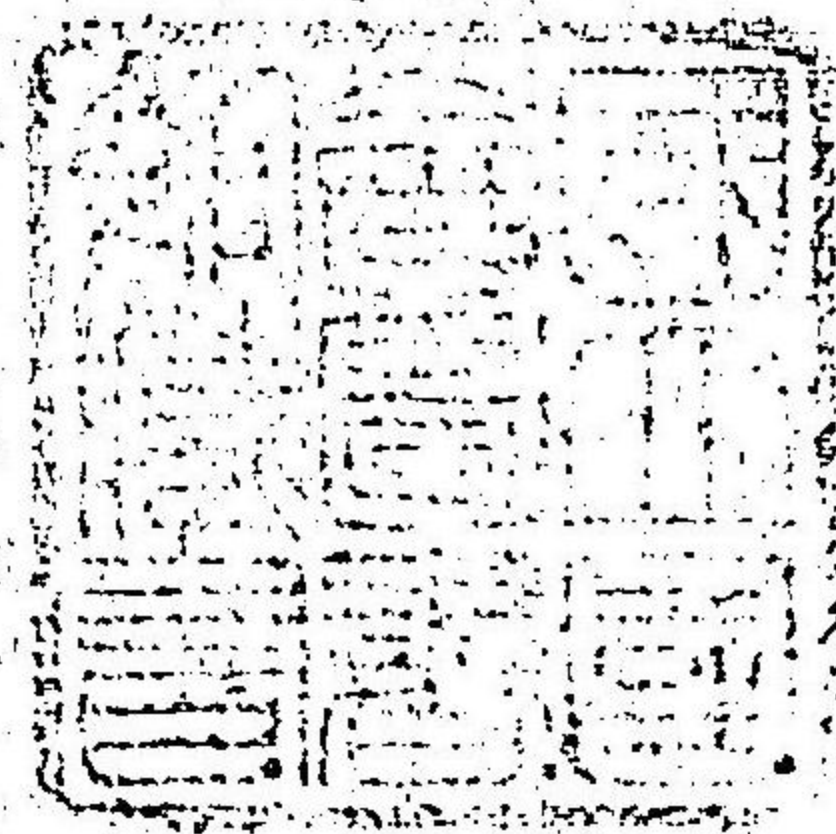
本草綱目拾遺卷之輯

上

811.49 HT21A

新編御伽草子

913.49  
A1212



319565

# 新編御伽草子

はしがき

新編御伽草子は、世に行はるゝ御伽草子に漏れたる、古草子を集めたるものなり。原本二十種、多く不忍文庫阿波國文庫の二印を捺したり。けだし屋代輪池翁の舊蔵本なるべし。福富草子の表紙に一紙を押し、草子の題目二十種を列擧して、新編御伽草子と題せり。蓋何人か世に行はるゝ御伽草子にならひて、續集せん心がまへなりしと見ゆ。余がこれを得たる後、類本にて校讀したるもあれど、類本を得ずして校正しがたきもあり。今この書を刊するについて、毎卷に開題めくものを記し、鼈頭にもいさゝか爪記したるもあれど、此には取りすべて、この御伽草子の文學上の位置を述べんとす。ついで先づ世に行はるゝ御伽草子より説かん。

御伽草子は、短篇の草子物語二十三種の惣名なり。その書は徳川氏の中世

○はしがき

913.49  
A1212



319565

# 新編御伽草子

はしがき

新編御伽草子は、世に行はるゝ御伽草子に漏れたる、古草子を集めたるものなり。原本二十種、多く不忍文庫阿波國文庫の二印を捺したり。けだし屋代輪池翁の舊藏本なるべし。福富草子の表紙に一紙を押して、草子の題目二十種を列擧して、新編御伽草子と題せり。蓋何人か世に行はるゝ御伽草子ならひて、續集せんの心がまへなりしと見ゆ。余がこれを得たる後、類本にて校讀したるもあれど、類本を得ずして校正しがたきもあり。今この書を刊するについて、毎卷に開題めくものを記し、鼈頭にもいさゝか爪記したるもあれど、此には取りすべて、この御伽草子の文學上の位置を述べんとす。ついては先づ世に行はるゝ御伽草子より説かん。

御伽草子は、短篇の草子物語二十三種の惣名なり。その書は徳川氏の中世

○はしがき

に出でたる板本と、近く明治二十四年に今泉島山の二氏の校刻せる活板本と、二種ありて、普く人の知る所なるべけれども、先づ其の名を擧げん。

- |           |           |            |
|-----------|-----------|------------|
| 第一、文正草子   | 第二、鉢かつき   | 第三、小野小町    |
| 第四、御曹子島渡り | 第五、唐糸草子   | 第六、木幡きつね   |
| 第七、七草さうし  | 第八、猿源氏草子  | 第九、物くさ太郎   |
| 第十、さづれいし  | 第十一、蛤のさうし | 第十二、子敦盛    |
| 第十三、二十四孝  | 第十四、梵天國   | 第十五、のせざる草子 |
| 第十六、猫のさうし | 第十七、濱出草子  | 第十八、和泉式部   |
| 第十九、一寸法師  | 第二十、さかさ   | 第二十一、浦島太郎  |
| 第二十二、酒頭童子 | 第二十三、横笛草子 | 是なり。       |

この草子どもの時代は、第廿二酒頭童子双紙は大江山繪詞ともいひて、兼好法師の筆なるものありといへば、南北朝の比の物なるべく、第十六猫のさうしは、慶長七年の文見えたれば、徳川氏の初世の物なり。されば、大凡この時

代の間に出來たる草子なること明けし。其の作者は、すべて傳はらず。さてこれを集めて、御伽草子と名づけたるは、何時の頃にか、古板本に其の年を記さざれば、明ならず。貞享二年の廣益書籍目錄に、この内の草子をこゝろく載せたれども、叢書としての御伽草子の名をば記さず。或は元祿の頃などにや名づけつらん、そは尙考ふべき事なり。

湯淺常山の文會雜記に、おとぎ冊子は、至て好書なりと、君修の評なり、五朝小説の中の咄をよく染かへしたるもの也と、君修の友人、小説よく讀む人の云へることなりと記せり。君修とは松崎觀海名は維時といへるが字なり。五朝小説といふもの未見ねば、この評の當否は知らざれども、此の草子の趣向は、様々にて、或は大福長者の宿世よくて目出度事を種とせるあり、或は繼母に苦しめらる、悲哀小説あり、或は滑稽の物語、或は因果應報の理を含ませたる佛教小説、さては孝子の傳、浮世物語など、何と指せることもなく、幼稚を諭し誘く話の種を主となせるものなり。

されば、僅なる叢書にはあれども、足利時代より徳川氏の初にかけての、文學の史料として見る時は、確にその時代の或る方面を明らかにすることを得べし。故に近時本邦の文學史を研究する人々は、必この草子をその材料の一つに供ふ。されどもこの草子が收むる所、僅に廿三種に止まれるは、物足らぬ心地せざることを得ず。先輩が、この新編御伽草子を集め置きたるは、この不足を補はんの料にてか、即余の感を同じくするものなるべし。

足利時代といへば、人は皆文學の暗黒時代とおもひ、徳川時代といへば、文學繁昌の時代といふ。これ大體において否定すべからざる事ながら、暗黒の内にも光明あり、光明の内にも暗黒あることを思はざるべからず。そもく國文學は、王朝時代においては、全く公卿の手に在り、故に當時の文學は、すべて上流にのみ行はれて、下級の士民に普及せざりしが、鎌倉時代を経て、足利に至りては、次第に下層に推し及ぼすべき傾向を生じ、徳川氏に至りては、詩人をして海内文章落布衣といはしむるに至れり。この詩の意味におい

ては、公卿に文學者なきを慨歎せしものなれども、文學の發達の爲には、布衣に落ちたるが却てその幸福なりしなり。而してこの文學を、縉紳の手より傳へて、布衣に與奪せしものは、即緇衣の徒たりしなり。宗教の目には貴賤平等なり、僧侶が教法を流布するに、公卿士庶を論ずることなきが故に、文學をも、貴賤上下に普及せしむること、尤適當の地位たるによれり。

文學が僧徒の手に落ちて、脂粉の氣は抹香臭に變じたりと嘲るものあれども、この時代の文學にも、慥に其世の特色を認め得べし。從來王朝の文學は概して寫實的抒情的なりしもの、此に至りては教誡的諷刺的の意思を以てかけるものを出せるも其の一つなり。神皇正統記の皇位の傍正を論じて、世道人心を正し、太平記の忠臣義士の事跡を叙して、勤王の心を鼓舞し、徒然草が世態人情を洞觀して、名利の避くべきを説けるなどは、言ふも更なり。かのはかなき小草子の、桃太郎、鬼が島渡り、花咲爺、かちく山などの話説、いづれか勸懲の理を示すたつきならざる。

徳川文學に至りては、諸種の方面おの／＼發達して、光華を競ふに至れりといへども、その始めて特色を現はせるは、元祿以後にあり。仁齋徂徠の經學、水戸諸儒の史學、契沖長流の國學を初めとして、芭蕉の俳諧、近松の院本等、皆この際に起れるものなり。元祿は即徳川文學の始めて新旗幟を樹てたる時なり。慶長元和の治平より、元祿に至るまで小百年の間は、文學次第に盛なりといへども、なほ翻譯の時代なり、摸倣の時代なり。

試にこの頃の著作を見よ、源氏物語を譯して若草源氏あり、雛鶴源氏あり、伊勢物語に擬して、仁勢物語あり。太平記に擬して、虫太平記、魚太平記、草木太平記あり、徒然草にならひて、犬つれづれあり、續つれづれあり、枕草子にならひて、尤の草子あり、又犬枕と題したるもあり。古今集の序に擬して、古今若衆といへるものさへ出來たり。たゞこの種類のものが、翻譯摸倣たるのみならず、經說にもあれ、詩文にもあれ、さては歌俳諧書畫までも、皆多くは足利時代の型範を墨守せしに過ぎざり。

されども翻譯摸倣の内より、又換骨脱胎の手腕を振ふものを生じて、遂におのづからなるその特長を發表するに至るは、物の發達の順序なるべし。棠陰比事が行はれしによりて、翻譯の平假名棠陰比事出づ、而して櫻陰比事が、これを本邦の事に翻案して出だせるは、たしかに一つの進歩なりき。戯曲の如きも、井上播磨掾貞享二年没が語りきといへる曲目を見るに、兵庫の築島二王の本地、さては十二段草子を造りかへたる新十二段なごなるが如き、山本土佐掾延寶中に至りては、小敦盛、鉢かつき、浦島太郎、酒頭童子さては梵天國なごお伽草子を種こなせるもの多く見ゆ。近松巢林子の如きも、其の初に成れるものは、概古草子謠曲を粉本となしつる跡著しきに、晩年の作に至り始て渾和天成遂に一派の法門を開けり。

されば徳川時代に行はれし、實錄、讀み本草双紙、しやれ本の類も、おほかたは足利時代の物に濫觴し、脱胎して出てたるが多く、或は演義歴史により、或は繪卷の詞にもこづき、あるは謠曲にならへるなご、其の系統を尋ねもてゆ

かば、多くはその源に到り着くを得べし。即元祿文學はこの摸倣の中より、  
 新生面を開き、この摸倣文學は、足利文學の素地を耕して、元祿文學の種子は  
 下せるなり。さればこの過渡の時代の文學も、又意を留めざるべからざる  
 に、惜いかな其の多くの材料の内には、堙滅したるものも少からず。

中にも草子物語の類の寫本にて傳はれるものは、次第に世に失せて、容易く  
 見ることを得ざるあり。一度板本に上れるものにて、貞享元祿の比の書目  
 に入れるものさへ、今は太稀なるが多し。されば御伽草子の編者がこの種  
 の書を収めて今に傳へたるは、少からぬ功といふべし。今此に文學史料と  
 して校刊せんには、謠曲狂言淨瑠璃本の類、其時代の最重なるものを取るべ  
 けれど、それは世にその人あり。このはかなき草子は、さる人も見えざめ  
 れば、此にこれを公にす。森の下草老いたらんよりは、人の結ばぬ若草  
 こそまづ摘ままほしきよしは、十番の物争の作者も既に言ひおけるをや。

明治三十三年の二月

萩野由之 志るす

新編御伽草子の目録

上卷

- 第一 福富草子
- 第二 十番の物争
- 第三 音なし草子
- 第四 わか草
- 第五 かざしの姫君
- 第六 常盤の姫
- 第七 小おちくぼ
- 第八 今宵の少將
- 第九 毘沙門の本地
- 第十 貴船の本地



下卷

- 第十一 淨瑠璃十二段草子
- 第十二 つき島
- 第十三 化物草子
- 第十四 魚鳥平家
- 第十五 狐の草子
- 第十六 こうろぎ草子
- 第十七 玉虫の草子
- 第十八 柿本の系圖
- 第十九 立烏帽子
- 第二十 尤の草子

福富草子

福 富 草 子 開 題

福富草子は、この御伽草子の中の最古きものにて、世に名高き草子なり、文は誰ならむ詳ならざれども、人の物契  
 みを顯したる心しらひ、足利時代の現象を寫し出しておもしろし。古物語類字抄に云ふ、こは高向秀武といふ者、  
 何師といふに可考考考しかりしに、妻のすゝめを隨ひて、道祖神を祈りたりしに、小柑子許なる鐵鈴を賜は  
 るる靈夢の告を蒙りぬ、さて其妻の合せて云、身のうちより聲の出て、夫によりて幸ひを得むといへり、然る  
 におかしく尻ひる事を習ひて、何某の中將殿に召され、綾錦黄金等を賜はり、いみじき福人となり榮えぬ、是ま  
 上巻され此隣に七條の坊長福富といふあり、これはた貧しかりければ、其妻となりたたく奏み、男にすゝめ  
 秀武が弟子とし習はせて、いだしやりしに、此福富は尿まりしちらし、打懲されて歸りこしかば、其妻いたく恨  
 み怒りて、秀武を責さいなむしなかり、是まで下巻 文體はいさしげなく見ゆれど、四五百年前の筆づかひ  
 とぞおぼゆる、下巻の繪やうは凡ならず、上巻は頗劣れり、されば原本は下巻のみにて、上巻は後人の蛇足なめ  
 りと傾きいふ人ありとせきげども、全文まさしく一具したれば、もさより上下の二巻なりしを、ばやくより上巻  
 は逸して、次々に寫し併みたりしにも有るべし、又傳へ聞く、此繪卷は土佐彈正忠廣周筆といふ説あり、廣周は  
 寛正頃の人なれど、文體の古雅なること、今百餘年も古げにおもはる、さにもかくにも、原本二巻は南北朝時代  
 なごに出来けむものなるべしといへり、こゝに收めたる本は、例の不忍文庫本なるが、一巻本にて、類字抄に  
 いへる上巻の趣きは見えす、されど首尾一具したるは、類字抄にいへる本とは自別本が、抑或人の説の如く、こ  
 れぞ原來の面目が、但し誤字脱文もありげなれど、他本の校定すべきものなれば疑ひを闕きし所もあり。  
 おもふに、足利氏の世の亂れは、下社上より來る、君臣父子の争ひに、天下の騷動やむ時なし、これ皆人のその  
 分に安ぜざるに起れり、此において、物契を誦むる致なるべからず、神皇正統記の尊氏の論も、その趣きは一  
 つに歸すべし。たゞし放屁の事は甚卑穢なれども、その頃の物語には、往々かゝる事を記述して憚らず、近世平  
 賀風來の放屁論の如きも、彼れに託して已が不平の腹をすかせるものなり、この福富草子の記者も、さる心づ  
 かひにもやあらむがし。

福 富 草 子

冒頭の一句は、一  
 篇の綱領なり、  
 いまだ其藝の何事  
 たるを説被せず、  
 開の字、笑の字を  
 下す、頗妙なり、  
 五のたなつもの  
 五穀をいふ、たな  
 つものば、種つた  
 の義なり、日本紀  
 には、水田の種子  
 なし、かよめり  
 一段、福富が福分  
 富有を寫して、後  
 段の地をなす、  
 築地は、土を高く  
 築きたる垣圍をい  
 ふ、練堀の類なり、

人は身に應せぬ果報をうらやむまじきことになん侍る、むかし福富  
 の織部とて、長者一人侍りけり、いかなる過去の宿縁にや、身に生れつ  
 きたる藝ひとつさふらひけるが、ならはざるに奇特をあらはし、はか  
 らざるに名を發して、世の人、神の如くにぞ思ひける、其藝あさましく  
 いぶせければ上中下の人までも、よく聞き知りて笑をもよほすこと  
 なりければ、おのづからおほやけ方にもきこしめし、もて興じおはし  
 ましけることな、めならず、されば富めるが上に富み、樂しきが上に  
 たのしみて、棟に棟をあらそひ、藏に藏をたて、五のたなつもの、耕さ  
 ずして、庭にみちくたり、それか隣にはくせうの藤太とて、いさまづ  
 しきもの侍り、こは織部にひきかへて朝夕の烟も、竈に絶え、さつのみ  
 ち草しげりつ、築地にあらぬ柴垣や、慢慕ならぬ鷹たれに、夜寒の床  
 をあかしかねつ、軒もかきをも、このためにこぼちとりて、あまり寒  
 さの風を入れける、夏はあさましき麻の衣ふるびて、やぶれ團扇にて

かきなほ、かきほ  
の誤にて、垣種な  
るべし

此段貧乏の體をう  
つして語に韻調を  
まじへたり

前身に、持戒修行  
の足らぬをいふ

うら讀は、讀書、は  
しりかきは、字を  
よく書くをいふ、笛  
を吹くなり

蚊を拂ひ、軒の夕顔のはなやかなるを、なぐさめに、あかしくらすめ  
る、幼かりしより契りし人あり、藤太には十あまり姉にや侍りつらん  
かし、たけ立すくよかに、顔つき荒あらいじく、口廣ければ、人鬼うばとぞ申し  
ける、鬼うば、或日つまのほくせうに向ひて申しけるは、士農工商の遊  
民は、ひとつゆゑつける藝の侍りてこそ、名を四方にかゝり、やかし、世渡  
るものにてさふらへ、あなあさまし、そこはいかなる昔の戒行のつた  
なき、高身になす能のおはせぬことよ、いとくちをしとくちをしや、  
うち讀はしりがき、吹きはやし給ふことこそならずとも、あの隣の福  
富が一藝ばかりの事は、習は、何とかならばさらん、さらばかしこに  
行きて、いかにも打歎きて、心を盡し、師匠とあふき、弟子ともなり給ひ  
て習へよ、神變ある世ならば、あれ程にこそおはせすとも、世渡るはか  
りのたつき、なごかならざるべき、すぐれて興に物し給は、隣の寶は  
こなたにみちはへるへけれ、たとひ生れ付きたりといふとも、なさ、  
る藝の、長じ侍るはあらじ、玉はみがくに光あり、ごにもかくにも、習ひ  
給へ、それをうけひきたまはずば、御名殘はをしく候へども、姥おばには御

いかなるはしのは  
いはよしの誤り

行きても話さんこ  
おもひしごの義  
なるべし

何等の莊重ぞ、抑  
教ふる所は何等の  
藝ぞ

輕浮追従の態、見  
る様なり、  
ついそらは、追従  
の音似なり、  
阿諛の意

ちやうさやうは、  
調作様、調合の  
仕方を見ゆ、  
又郎重を極む、

暇出されば顔のつや、かなるほどに、いかなるはしもさだめはべら  
んとせかする、ほくせう理ことわりにをれて、隣に行きいんぎんにかしこまり、  
しかくの事といふ、福富出て合ひて、ようぞのたまふものかな、我等  
もその朝夕の友なり、侍らましかりしかど、道は行いて教ふる事な  
ければ、おりたちて勸めまゐらせずして、かう月日過しなご、いとなさ  
けくしう言ことそへ懇ねんごうにもてはやすべし、ほくせうかしこまり、さても  
く有難の御よしみにぞものし給へ、日比月ごろ鬼姥がせめ侍りつ  
れど、かゝる大事の御能を、左右なう他の家には傳へたまはじと、推し  
量り思ひ侍りしかば、鬼姥が諫をも用ひずして、過ぎこし年月の悔し  
さよ、かう憐みおはしましけるを、姥にかたり、よろこばせ侍らんと、手  
をつかねてをる、織部の心の中には、今更ついそらやご、にくき物から、  
をかしさねんじつ、抑此一藝は、大事の薬の侍りて、服たぐし、さてつとむ  
る事に侍り、是が家の秘密なり、あなかしこ人に語り給ふなど、何か  
有らん、ふりたる巻物取出て、薬のちやうさやうを、こまかくと語る、ほ  
くせう、さも侍らば、ごとも御よしみに、其御薬、先一度の藝勤る程給

利に急なるもの、  
状態なり

はれよ、鬼姥があまりに、せはしく申侍るもうるさければ、近き程に一度ふり出で、先手柄をつかうまつり侍るべしと、しきりに佗る、福富さばとて、内に入りつ、黒く丸めたる薬二つ取り出で、是かまへて、すき腹にすかせ給ふな、少しおなかをつくらひて、其藝をなさんと思ふ、二時ばかりこなたに鹽湯ぬるくとして用ひ給へ、かならずふしぎ侍るべし、若遅くともさのみいらち給ふな、あまりに藝のおそなはり侍らば、たらひに水汲み入れて、ゐところをひたし、息をふき給へ、とめたくば、いきをのみ給へとをしふ、ほくせうよろこびて、かの薬を額に捧げ、いとま乞して歸る、鬼姥待兼て、いかにく、習ひ給へりや、をしへ給へりやといふ、ほくせうほ、ゑみして、しかく、と語りければ、姥喜ぶ事限なし、今日の内に、さしも有るへき上つ方へ行きて、のたまふべきやうは、福富の織部が師匠に、藤太のなにかし、何とやうにも御好み候へ、御好に隨ひて出侍らんとたからかに案内したまふべし、試にこれにて聞きたう侍れど、わづかに二粒の薬なれば、惜しう侍るぞかし、はやく出立給へとせがむ、かくて妻戸の隅のかはごよりふりた

ぬころは、又、  
俗におぬこ、いふ  
放屁の術をならふ  
て、始めて明なり  
弟子にして師匠  
名乗らんす、其  
新語を示すなり  
試に是にては、老  
姥まつこれを聞き  
たけれとなり

前の難縁を乞ふ一  
段と反映す

る烏帽子、かきの帷子、きぬこの袴とりいだして、ほくせうにうちきせつ、つゆも臆し給ふな、こしうし首さし仰ぎていひ入れ給へ、烏帽子のちり拂ひ、鬢なでつけ、前に立ち、後に廻りていふやう、烏帽子きたまひたれば、はじめて姥が親のもとへ婿入し給ふやうに覺えて侍るぞや、なうく、よい殿や、ほくせうは教のま、に二粒の薬をふくして、道すがら腹すぢばり、ひきつりて、かみなりの如くなりけるを、念じつ、ゐところをすゑていそぐ、今出川の中將、わかき殿にて、興じ給ふとも知りたるにや、かしこに行きて、しかく、と案内す、中將殿いと興あることかな、此間はうつ氣にて、學問もおこたりおはしつるに、いよかんなりと、かのほくせう御庭にめさせて、鞠のか、りに、わらぶたすゑて、あつもの大御酒とりくもてなし給ひて、御はし近う出でおはして、今やと御耳を傾おけておはす、御みすの内には、御妹の内侍のかみ、おばの尼前、御臺所おのくつごひおはしましける、藤太腹は痛けれど、食物にのみ心入たるを、かしや、さもしや、あまり腰のひきつり、おなかの痛むにたへずして、立ち出でんとしけるが、ごりはづして、さ

わらぶたは、圓座  
のこころなり  
誤ちて下痢せしな  
り、鞠臺の白沙をしき  
たる所

井出の梁は、井出の玉川にかけわたしたる魚梁なり、井出は山吹の名所形容又奇

下手の以下は、繪にかきそへたる詞書の本文に挿入せしなるべしよりて括弧を加へつ

これも別の詞書なるべし

とほらし侍れば水はぢきの如し、しらすはさながら山吹の花のちりしきたるやうにて、井出の梁もかくやらんとおほす、俄に風吹きたちて、御殿も御階も匂ひみちてあさましといふばかりなしも、尻をすゑて、走りにげんとしけるを、座敷の隨身おりたちて、笞杖ふりあげて、うちふせつ、いと黒きゐどころをひきあけられて、うめるを、烏帽子髪ひきたて、やうく御庭をおひ出す、下手のおならこきめや、かゝる狼藉うてやうく、やぶれし頭より、御かわくたりに血をあへして、立田川の秋に異ならずかし、九献にこそ酔つらめ、しゆくしくさ、もまして侍るぞかし、あらくさやうくひらにうちひき裂かれたる烏帽子、片つぶりに着なし、袖も袂も赤に染みて、ほうくかへりぬ、晝中の姿あらはづかしや、道すがら目なしとりのきの雀おふ童も、手さし指さして笑ふ、た、かれたる腰の骨も、すりむけし膝のかしらも、堪がたければ、町や棚ては、尻もかけまほしけれど、あさましげなれば、人寄もつけず、腰ひきねぢく歸るさま、何になぞらへん、おちほの町よりのぞきて笑ふ所、あれを見ては、こたれさせな、ねんくねんね不思議や、いかう

くさきは、もしまなどの風やふきつらんとおもへば、いぶせき匂ひぞや、鬼姥かゝる事とも知らず、日もたけぬるまゝ、に門にたち、のびあがりく大路を見やりて、待ちこがる、に、二町ばかりのあなたに來るを見つけて、すはやこ、へ人あまた具してかへりおはせるは、御送りの人々にや、おほやけに、いかに興じおはしましつらん、近づくまゝに、赤き小袖をうち着て、歸り給ふよと思へば、いとうれし、なほ待ちこがれて、内に走り入りつ、いふやう、あな見苦しき此程の古小袖よ、今よりは長者になりたまふべければ、かゝるやぶれ衣よもめさじ、嫂にも孫にも何しに着すべきと、引落し火吹立て、めらくと焼すてつ、孫はをしやといへど、聞も入れず、嫂はさこそよるこべど、なほいぶかしうて、くびさしのべて待居る、あなけぶた、煙は姥にやほれつらん、しつこの煙や、そちへゆけく、ほくせう辛うじてかへりぬ、赤きべ、かど見しは、つぶりにあへせし血なりけり、まつきな袴は、たれたるものなり、手ふる、ことならねば、杖にかけ、顔はしかめ、鼻はふたぎで、あきれ居る、藤太は着類やかれて裸になり、ふるひわな、きて、いひ

赤きべいは、赤き着物、今も俗語に用う

せうしやう

わけするも聞えず、我と身をいただきてすくみ居る、黒くふくつみたれ  
 ぞ、ほくせうの名におへる姿ぞかし、北どの、妙西は、どぶらひ來つ、  
 いふことの葉なや、南無阿彌陀く、とて歸るもゆ、し、  
 隣のおこうは、せうしやうたつ物のやれよりのぞきて、笑止がれど、お  
 ろとのあたりを目をぞつくる、かくて其夜もあくる日も、おなかの痛  
 なごりありて、ゆふへの煙はゐるところにたち、野邊の虫の音はおなか  
 に鳴く、ふりみふらすみ、うち時雨たる空のさまにしよんちよとしけ  
 り、ほかみさしつ、ことさきりく、いたむ、あなはらく、といふ聲も、い  
 きの下なれば、鬼姥はにくけれど、さすがにわりなき中なれば、皺多き  
 手をあた、めて、おなかをさすれば、ほ、の内よりあさましきかをり  
 いで、何やらんにや、く、とするもむつかしや、せんかたなきに、うつ  
 ふしにふせて、せなかに上り、いかにとりつきて、腰の骨を踏おひたる  
 孫はいふられて、何心なく笑ふ、しとにや、だれにや、鬼姥がせなかよ  
 り、すそくたり流しかけ、ふとも、しくめくは、ほくせうが腹癩をはや  
 あやかりつるにや、とおぼゆ、なほいきどほりやすまで、川邊にいで、

しとは尿をいふ

是亦小人の情態

身を清め、麻きりかけて南に向ひ、南無歸命頂禮三所權現つまの、ほく  
 せうに耻見せし福富の織部を、命のうちに取り給ひてうきめを見せ  
 させおはしませと、鈴ことく、しうおしもみて、のろく、しう祈る、其  
 神信心にや通しけん、熊野の方より箸ふとの鳥ひとつとび來て、麻の  
 前に羽をたれて鳴く、さては願ひかなひたり、姥は歸りけり、日にそひ  
 夜にそひていと、よわり、今は廁かたやのかよひさへならざれば、高き足駄  
 を足に着て、庭にもこよひ、砵の盤にもたれて、散らすこと夥し、喉かは  
 きて湯水をこふこと隙なければ、姥たまへ、姥たまへ、童のやうにあま  
 へて呼ぶ、呑める湯水はそのま、下す、かくていたうやつれ、ふくやか  
 なりつる顔ばせも、やせく、と眉まゆのほごいと、黒み落入たり、かくて  
 命も危かりぬべしとて、典薬頭和氣清磨がり行きて、しかく、といひ  
 なげきければ、慈悲の家には上下いとはすとて、やがていであひて、事  
 のやうすたづねて、薬てうじてたびしにぞ、鬼姥もすこし息いきをのべた  
 り、さて福富がたばかりけるよと思ひあはせて、にくさのみいやまし  
 にましければ、いかにもして恨みんと、かけてまつほごに、人の情は合

夢の吉凶を卜ふ人なり

以下虫蝕

ふなかとて、織部うちつゞき夢見あしければ、夢解く人にどかするに  
七日の物忌門閉ちて人に逢ふべがらすといふに、あなきうくつ、たゞ  
かゝる事は、神社の轉じ變へ給ふとて、朝とく物に詣でける、鬼姥き、  
つけて人さゝのくまくり待ちかけて、織部を見るよりも、ひしひしと  
つかみつく、そのさま魍魎鬼神もかくやあらん、いとおそろしともお  
そろしや、福富はさすがに男子なれば、姥が手をもぎはなちて、にげの  
びけれど、おひかけて頬のあたりにかみつくと等し、かくて歸るさま  
は人嚙犬よりすさまじ、目はさかさまにきれ口は耳の根までひろご  
りていきまく蛇體にやなりつらんと、道くる人は鬼の人喰ふと、あな  
おそろしとて、にげ侍るもあり、まためづらしとて、見る人も侍りけり

# 十番の物争

十番の物争  
開題

十番の物争。およそ何番の物あらそひと名  
つくる草子も、一時の流行にて、數々あり。  
その中に四十二の物争といへる草子は、春  
秋の優劣、花月の批判などを、歌にて合はせ  
たるが、四十二番あるなり。山本明清の考  
證には、それを南北朝の末の頃の著作なら  
んといへり。この書は、源氏物語の帯木の  
卷なる品定におもひよせて、世に行はる、  
歌合などの體に記せる、また一つの趣向な  
り。

十番の物あらそひ

わかき女數多すむあたり、いとすき心ある男なん、常はかいまみ、立  
聞なごしたまふを、内にはいかでおもひよるべき、うちとけ物語し侍  
り、いと若き聲にて、かすめる空けしき、いと艶なる世のありさまかな、  
あはれ昔の光源氏、頭の中將ならん男に、青海波まはせて、又狭衣の中  
將のやうならん人に、笛ふかせ、おのゝ装束かづけなごして見ばや  
といふに、又そばなる人我はた、六條院の御かたゝの物の手き、  
たまひしやうに、ここにも紫のうへは、あくまで匂ひ加はりて、霞のま  
よりさきいてたるかば櫻をみる心ちして、和琴をなつかしうかき鳴  
らしたまふに、明石のうへは、いとさまようもてつけ、さ月まつ花橘も  
實も具しておし折りたるをみることもいふべきに、つかひなしたる琵琶  
のばち音、めつらしう聞ゆるに、女三の宮は、きさらぎばかりの、青柳  
のはつかにしたり初めたらん心地して、うぐひすの羽風もみだれぬ  
べき風情にて、琴ひき給ふ、女御の宮は、おなしやうなるなまめき姿す

此邊のひき出てた  
る人々はみな源氏  
物語によりてさき  
たるなり

源氏野分袋の文詞  
によれり末に見ゆ



こしにほひ加はりて御もてなしよし有りて傍にならびはなきやう  
 におぼえて箏の御琴ひきたまふあはれに澄みのほりてきこゆるに  
 又た大將の御子の公達の笛あはせたまふ笛の音おひさき思ひやら  
 れておの／＼おもしろうめつらしき御遊をあはれ傍にてきかばや  
 といふを又すこしあざればみたる聲にてそれを傍にて聞きあたら  
 んはなかく美まし何事も我身にあらぬは何のかひかはあらんお  
 もふこと聞えて何かはせん女御君もなかく心くるし關白の北の  
 方などいはれて男子三人娘三人もちて一人をは女御にたて玉の臺  
 にすゑおき又あるはやむことなき人にもてなさせ男をはどり／＼  
 に殿上させきよけなる出入を見たらんはいかにうれしくをかしう  
 もあらんかしといへはうしろなる人それはあまりに作り付たらん  
 宿世のやうにていさかをかきふしもあるへからずたごへは光  
 源氏にても在五中將にてもいひ傳へしやうにかたちなまめいたら  
 ん人におもはれてすこし都はなれたる所にすゑおかれしづかなる  
 春の明ほのさひしき秋の夕にはそらふく風峰にみゆらんと眺めく

一くたりは一行に  
 て音信のこゝなり

らした、ならぬ萩のうは風に心をうこかしふけゆく鐘をうらみま  
 つ夜ながらの月をかこちなごしてたまさかに待ち居たらんこち  
 はいかにめつらしうもあかすあはれにもあらましといへはまた居  
 たるがふと逢見たる中の契はなかくうしろめたきおり／＼もあ  
 るへしかたちはあはん人の年月をへて思ひわたらんをつれなくの  
 みもてなしさすかに情なからずさるべきおり／＼は、一くだりをも  
 みせ又みづからもうちしきらんおりはきかせんに猶かくてはやま  
 じとおもひわびくらしたらん春の日あかしかねたる秋の夜有明の  
 空にもあながちに忍び書きつらんと殊更よしばみかみのかなごも  
 なべてならぬをうちしめりたる花のしたに露もおとさであさぼら  
 けの程にちいさき童なごしてさしおきたらんをひき解きて見んに  
 歎きわびぬぬ夜の月になごさま／＼かきつくしたる文のかすつも  
 らばをかしうあはれにもあらんかしといふに又傍よりそれはあま  
 りにこはくしうぬちけたるわざなるべしなへて夕へに馴れあし  
 たに別かれ冠のひたいくつの音かり衣の袖さしぬきのつまそのう

此邊古歌を引きて  
文なせり

こはたやまは木幡  
山なり

太平記後基朝臣東  
下の條におもひよ  
りてけるに似た

つりかのありさまなど、さまざまにおもひくらべ、信太よりのちえの  
葉の敷をつくし、かほかたちすこし衰へなば、伊勢をのあまに身をや  
つし、ありか定めずうかれています、或ときは大原高雄さがの山、伏見深  
草こはたやまかちにてゆかん宇治のさと、かた野のましばおりしき  
て、よごの河瀬の月もみむ、今はたおなし難波瀬、かのゆきひらの中納  
言のもしほたれにし須磨のうら、光けんしの大將のたびねの床のあ  
かし、瀉ふねさしとめむ淡路島、こゝろつくしのもしの關、ひれふる山  
を松浦がたわかみこそ年はおひぬれわかうら、しほさしいでて濱  
千鳥すみよし初瀬よしの山、花のふるみちわけつゝも、淋しきけふの  
ゆふまくれ、飛鳥の寺のかねのこえ、名も恐ろしや白浪の、たつたの山  
路おしなへて、にしき織かく神なひ山、むかしのことをおもひ出て、引  
手あまたの二見瀉、かの齋宮の御息所の、ふりすて、とよみたまひし  
鈴鹿川、やそせの浪をうちわたり、いせのはま、萩はるくゝと、行かへる  
人にあふさかや、關のいはかぎふみならず、滋賀の幸崎、うち出のはま  
かの忠度の詠しけん、むかしなからの山さくら、うつろふかけの色も

香も、今はかひなきかゝみ山、みの、中山なかゝに荒れぬとき、し  
不破のせき、清見かせきや、田子のうら、たち出て見ん、駿河なる、うつの  
山邊の、蔦のみち、なほはるくゝと分て行く、こゝろの末にさても猶、お  
もひそひつるふしの山、もえし烟もいまははや、たえてそやみし、みち  
のくの信夫の里のはてまでも、命あらんかきりな、かめありき侍らば、  
おもまろかるへしといへば、又ある人あまりに、それはうきたるやう  
ならん、我はた、まな高くおもしろく、さるべき人に、みえしなからの  
そのまゝ、にほかゆくこともなく、夜かれなく、もゝとせにひと、せ足  
らぬほごまでも、おもかげは離れず、そはばやといふを、又おとなしや  
かなる聲にて、あなこころやすの御宿世や、まのぶの山に迷はんこそ、  
おもしろからめ、おほろ月夜の内侍のかみ、木からしの吹くにつけつ  
、待ち去間に、なご、おどろかし女三の宮のけふりくらへ、かやうにわ  
りなく、命もたゆごこひわびて、袖のまがらみつつみかね、枕にだにも  
知らせじとおもふこそ、あはれも淺からねといへば、あなこゝろくる  
し、我はた、人にもみえじ、世にすまば、春は花のもとにて、目をくらし、

あくなる誤あるへ

夏は泉にのそみて、すゝしき木かけのまはたやみの螢をあはれみ秋はたのむのかり、山の鹿野邊のまつむし友とせし月をあふきて夜をあかし、嵐にたくへて琴をしらへ、たつ浪ふく風にうたをよみ、何となくあらんといふに、又かたはらより、それはあまりに物さひしや、品にもよらじ、かたちをもいはじ、釣するあまの翁ありとも、よろつての寶にあきみちて、思ふ事なくあらんほどの、おもひ出やあるべきといふもあり、またおくの方よりうちなきたる聲にて、五障三せうの身をいかにしてもたすからんとは願ひたまはで、たゞうつゝ、ともなきことをのたまふこそ、はかなけれ、電光朝露のうち、何物かあらんとて、

風さはくをさ、かうへの玉霞はしも見えぬ世をはなげかて  
 といふを、そばにてあくなるあま君なん、あなゆゝ、しかくおぼしよれることに、さらば御返事きこえさせんとて、

たすくべき身とはたさらにまらねども誰が爲にかは世をもいとはん  
 といふに皆ものいはすなりぬこそ。

此以下前段と接せず別種のやうに見ゆ

ころはやよひの末つ方の事なれば、花はのこる木々もなく、ふりくれ  
 てももの淋しかるよひのほど、御まへよりすべりて、うちまごろまんと  
 しけるに、人四五人ならびゐて、さま／＼はかなきことなごかたり侍  
 りけるついでに、くちをかしき人のありけるが、あはれうつくしき人  
 もがな、このざしきにおきて、言葉をかはして慰まばやなどいふほど  
 に、われも人も岩木ならねは、おもひ殊にて、心の糸のみだれがはじき  
 ふしを、みしかき筆のすさびにまゐるしつけて、左右にわかむ、そのかち  
 劣をさため給ふへし、

一番 左

まなにもよらじ、みるめもいはじ、心つかひゆゑ有りて、きやまやにや  
 さしく、何となくほれ／＼として、月雪花もみぢのをり／＼、あはれな  
 る夕へ、かなしき晨の心にも、なさけある言葉を、水くきのあどにまぢ  
 みむ時は、われも心つかひせられて、かへすことばいか、など、おもひ  
 てはづかしがるべき人ぞ、おもしろからん、

右

源木帝木の語

源氏野分巻にけた  
さうきよらひにさ  
こうちして春のあ  
けほの霞のまより  
おもしろきかば櫻  
のさきみたれば  
な見るこいちして  
さありそれによれ  
りさ見ゆ

おらは落ちぬへき萩の露ひろは、消えぬへき玉篠のあらははこ、  
ろおかれてたのもしからすた、なさけのかた深くして、松山の浪こ  
えさらん人の、みるめあることなく、うつくしくて春のあけほの、霞  
のひまのかば櫻をみるこ、ちせん人にちとせ万代と契らはや、  
判云、ひたりの月雪、みぎの霞あけぼのさり、にていつれと定め  
かたけれども、霞のうちのかは櫻の色おくれんこそ、花のなこりに  
やど、ねんなきこ、ちして、

二番 左

わつらはしく心ざりにくき人はうるさし、何事もやすくとして、お  
かしく物いひ、はなやかにてにぎくとまたる人ぞよかるへき、

右

その人にひとりをさしてはむつかしと、きくにまたがひて、ともかく  
も有なむ、其うちに心とまりて侍らん人の、さしもぬしつよくてけさ  
もりのひまをまちて、うちぬるよなく、心をつくして忍山にまよは  
む程はおもしろからん、

誤字あるへしされ  
と校すへき本なき  
ないかいはせん

ふりつ、りは容態  
ないふ

尋常さは此頃ほ他  
にすくれたるこ  
をいへり世の常の  
心にあらず庭訓往  
來にもかく川わた  
り  
上藤しき人は上藤  
おなし上人さいふに  
臣なしの上藤さ人の  
女をいふ

左げにもとは覺れども、まよはむ程のこ、ろつくし、まさりぬ、

三番 左

みるめはおくれたりとも、おくゆかしう、まめやかにもてなして、言葉  
すくなく、のこり多く、心ふかげならん人は、すくれて覺ゆへし、

右

さのみ心ふかげなる人もむつかした、みるめだによくば、引手あま  
たなりとも、われを途のよるべにして、いと、こ、ろにく、ば、うきも  
つらきも忘られて覺ゆへし、

このつがひは、左かちとや申べからん、

四番 左

ふりもみるめも、おもふやうになくとも、心づかひまどくとして、こ  
ころやすく、ゆく浪の音きかざらん人ぞ、うちとけられぬへし、

右

さしの程は、廿に過ぎ三十にたらぬ人の、ふりか、り尋常に、色このみ  
にて、い、かにも上藤まき人ぞよかるべき、

左はうちとけ過ぎ、右はまたあまりにきつくいたる人のふりにく  
げなりとも申へし、

五番 左

ぬしつよき人を心つくして、一夜のゆめの枕にならへ侍らんは、わか  
かたふかくなりまさりて、思ひ川の玄からみをこゆる浪の音こそき  
かまほけれ、

右

人にとがめられずして、色ある落葉ひろは、や、

おもひ川のしからみをこえんなみのおと引かへたる落葉の色こ  
そめつらしく候へ、

六番 左

同じ様なる人は、めづらしくもなく、月のうちなる桂は、およはぬ枝な  
れども、雲のかけはし渡るみちあらは、たぐひなき光を袖にうつまて  
一夜のちきりをむすばむこそ、此世の外までの思出なるへけれ、

右

およばぬ枝は折らんもてづ、なり、がけのした草さて、思ひくだされ  
んも心ちあしかるへし、おなし程なる人こそよかるべけれども、いつ  
もそはんことはいかゞはべらん、又あま衣の間遠ならんも、袖のしほ  
たれがちなるへし、吹かふ風の音つれをもきかで、床の塵のつもらぬ  
ほごになれまほしくこそ侍れ、

ひたりは雲井まであがりて、たくひなき月の光に、袖をかさねん事、  
まことにこの世の外までのおもひ出なるへし、右の下くさの色も  
ことわりえられて、おぼゆれば、これもかちまけいづれと申しがた  
し、

七番 左

いまだ人のむすばでうらわかき初草に、まくらかりては、露の情わす  
れつへしどもおもひえず、

右

もりのまた草おいぬども、世なれたる人の奥深く、かど有て恨むへき  
ことをも、にくからぬ程にうちかすめ、かこつべきことをも、なほざり

にもてなして、心ある人に、鳥の音をきかでありたく候へ、

左は業平の朝臣の、人のむすはん事をうれへけむ、はつくさの色、たれもさこそと推し量られておほゆ、又かゝる人となれて過けん、もりの下草も、ゆかしくおほゆれば、此草あはせも、いつれと申かたし、

八番 左

せゝの埋れ木、あらはれはて、後はあやなし、あふ夜まれなる闇のうち、にまよひて、年月をふるとも、よそのみるめは、かり、かりそめにも浪のにはどり、下にのみかよふへきこ、ち、おもしろからん、

右

色も香もこのましからす、たゝひたすらに、我よりも外をしらざらん人に、だち離るゝ、おもかけもなく、そひとげばやと、こそおもひぬれ、ひだりは、あまりに事このみたるやうなり、右は又人めもおもはぬけしきにくげなりとも申べくや、

九番 左

すかた、みめ、ならふ人あまたあらんは、孰れも目うつりして、おもしろ

かるべしおなし所に隔なく交りぬ、て杯めくらしして、思さし思ひとりにてあくるをも暮るゝ、をもしらて、小歌ましりにあそば、や、

右

たとへは光源氏のやうに、色このみなる人に、紫の上の御おほえのこごとくにて、世にたくひなく思はれはや、

紫の色をくたけて覺ゆれども、また人あまたの中、にゐては、めうつりせんこと、げにもなり、さりながらその人ごさして思はぬことば、うかくしき色とこそおもへ、

十番 左

おなし江につながるゝ、棚無小舟、いかにぞや、たゝいつとなくよせては、かへる浪のうき、船に、枕をしてねなん人こそ、おもしろからめ、

右

かすくの御ことの葉どもの外は、なにと申へきふしもなし、たゝこの御ねかひどもを、ひとつものこさず、身にまはりてすぎはや、

ひたりは、よせてはかへる浮舟は、あまりにあだ浪たかく候て、たの

もしからすや、右の、こりなき御願はよしあしわかねともありて  
世の中はてしなれば、のこさす身に去りてすぎなんこと、げにも  
おもしろかるへくこそ候へ、

さて此一帖は御宮つかへのくるしみを忘れためにすちなき口  
すさひを去るしつけけるなるへし、たれ人の見侍りて、批判のこと葉  
はそへられけるぞ、あらうつ、なのくちすさびごもや、あらうつ、な  
の口すさびごもや、

おもひよりたのむかひなきもしほ草かきあつめても藻屑はかり  
そ

返し

もくづとは誰かおもはむたくひなくみるめかひある筆のすさひ  
を

新編御伽草子

音なし草子  
開題

この草子も作者知れず、これは帝國博物館の藏本にて校す、跋に永祿十三年孟夏中泮之比染筆訖、末弟春秋十九歳尊朝親王と記させたまへるを見る、御名は押字の體なりき。こは親王の御作にはあらざらめど、この比に程遠からぬものか、文品は高からざれども、辭藻を飾りて絢爛に彩りたるは、蓋この時代における出色の文字なり。後世曲亭一派の文は、既に此に淵源したる所ありむ。

音なし草紙

近き程の事とて、世に疎忽なるをかしき事の由来をなん、詳しく語り傳へけるは、西の洞院の河近きあたりに住馴れし人の侍るが、そのかみ、見そめしより、互に淺からず思ひ、いかならん岩のはざま、水の底までもと思ひて、年月を過しつゝ、あからさまにも立出づる事なき人の俄に思はずも、遙々と習はぬ旅の心筑紫におもひ立ちぬれば、いこ心細くも覺ゆるに、又跡にとゞまれる人の眺入りたるさまもこそわりぞかしと、かたみに袖をしぼりつゝ、末の松山浪越ゆべしとも思はずして、立歸るべき程を遙にうち歎きつゝ、わが行くかたは西なるに、都は東のそらなれば、月の出入る山をこそ戀しき方のしるべには、互に眺め侍らめど、やうくこしらへ立出づるには、はやきさらぎもなれば過ぎ、彌生も近き程なるに、都の花の梢とも見すて、行くは雁かねの歸る空には似たれども、それは越路の故郷に、急ぐ心もありあけの、我は盡せず物愛くて、引かへつらき旅衣、立出難き心地して、名残は多く



情狀双ながらな

思へどもとゞまるべき道にあらすこと下りけるが、さきへはさらに  
行きやらで跡にのみ心の残りければ、

たつよりも心つくしのたびごろも

つゆけき袖をいつかはらはむ

女かへし

言の葉の露おきそへていともなほ

とまるうき身ぞ濡はまされる

女も名残忍び難く、徒然のさびしさに旅のそらをのみ思ひやりつ、  
眺め暮し侍るをりふし、程も近くて常に見し人なるが、忍び入来て聞  
ゆるは、思ひの色をかうとだにいはまほしくはありしかど、人目の關  
に洩しわび、徒にのみ蘆垣の、ま近きながらかひもなく、明し暮してす  
ぎの門、さすがにしのびはてすして名に立つともいか、せんか、  
れる道の惑ひには品位にも依らざるや、數ならぬ身に便なくも、よそ  
ふべきにはあらぬとも、光源氏は現なや御繼母の藤壺に、いとわりな  
くも如何して、忍びくの御わざに、設の君の御名をば、冷泉院とぞ申

設の君は藤壺に密  
通して設けたる君  
との義

臘月夜のあやまち  
は源氏物語花の宴  
の巻の事なひける  
なり  
人にくからぬは源  
氏の配所にて明石  
上に物ひしるいふ  
鬼一口に云々以下  
身はいたつらにて  
云々までは伊勢物  
語によりし文なり

しける、そのみならず春の夜の、臘月夜のあやまちに、須磨の浦へぞ  
流れゆく浮寝の床の浪枕、思ひ明石のうた、寝も、人にくからぬ住居  
とて、問はず語の夢をこそ、又も結ばせ給ひけれ、さて在原の中將も、鬼  
一口の辛き目に都の中に住わびて東の方に旅衣、はるく行きて宇  
都の山、思ひをいと、駿河なる、富士の煙とかこちつ、なほ行末は武  
藏野の、はてしもあらぬ戀路ゆゑ、身はいたづらに業平の、昔男に今の  
世の我も何かはかはらまし、幾程あらぬ夢の世に、はかなく思ひ消え  
ぬべき、あはれを知らせ給ひなば、露の情をかけ給へど、いと口なれて  
いひ寄れば、人の心の奥も見ず、はや花染の仇にしも、うつろひ易くな  
りにけん、百夜千束の例より、いとあり、難く侍らめ、篠の小笹の假初を  
偽りなれし人やらんと、思ひもあへすいつのまに、移り果てぬる心ぞ  
と頼みかたなき世なれども、人の心はさまざま、になべてあらねば、變  
りける、妻に別れて海に入り、共に自害をするもあり、歎きわびつ、程  
もなく、思ひ消ゆるもあるものを、命までこそあらずとも、なごかは同  
じ世にかはる心のうたてさよ、たゞ何事も一筋に、思ひ定めぬ世の中

聞へし入らでは古  
今集戀歌に君來す  
は聞へも入らじ濃  
紫わがもさゆひに  
霜はおくともさあ  
るなされり  
阿漕の浦には伊勢  
引く網もたび重れ  
ばあらはれにけり  
さいへる古歌なこ  
れり

伊勢物語に思ふに  
は忍ぶる事ぞまけ  
にける云々ある  
歌の心なり

や風もまたきに糸す、きはや亂れつ、打靡き夕暮毎を松虫の吹き  
くる笛をしるべにぞ、聞へも入らで元結に霜置くまでも侍りければ、  
心安くも今ははや、其關守もあらばこそ、夜なく、毎に通ひ來て、年頃  
なれし人よりも、猶睦まじく打解けて、思ひかはせる其色を深く包む  
と思へども、浮名は殊にもれ易き世のならひなるに、まして阿漕の浦  
に引く網の、たび重りて人目にも、あまるばかりの其氣色を、いかでか  
人の知らざるべき、いとも思なる心にこそ、

今ははや忍る事もやうく、まけぬれば、色に出で、ぞあたりの人々  
は、此事をのみさ、めきあひけるを、此にさる若き人の聞きつけて、我  
もいかさまいひよりて見ばやと思ひ侍るが、げに浮船の御方へ匂宮  
こそ、薰の御真似し給ひつ、混れて入らせおはしませと、思ひ出して  
我も又彼の男の氣色をなんしつ、行きて見んとぞ思ひたち、月のし  
はく、遅き夜のふくるを待ちて彼の家の、軒端ま近く木がくれて、笛  
ふきならした、すめば、女は夢にも知らずして、やうく、今に來なま  
しと、待つ程なれば、笛の音を、た、其人と思ひつ、姿さだかに見もわ

白氏文集

待宵の侍従の歌

かず、袖を引きつ、内に入り、盃肴取出し、興ある事のめでたきは昔も  
今もかはらじや、三百盃もあながちに、酔すなど詩にも作りける、世の  
うき時もわびしきも、酔ひてぞしばし忘らる、殊に不死の薬にて心  
をのぶる物なれば、空しくすること勿れとはげにもとおぼえ侍ると  
いと馴れ顔にもてなして、かたみにしひて飲む程に、後の覺えもあら  
ぬまで、共に酔てぞふし竹の、夜半すぐとおぼしきに、通ひ馴れたる人  
も來て、いつもの如く笛をふき、こはつくりつ、音なへぞ、さしかため  
つ、寝ければ、如何なる事の有らんと、おぼつかなくは思へども、しば  
しが程はまつ宵の、更ゆく鐘の聲きくに、昔の人の言の葉も、思ひ知ら  
れていたづらに歸らん事の、本意なきに、忍ぶ妻戸も忘れつ、叩けぞ  
音の聞えぬは耳無山かあやしやないつの間にかは、昨日に今日は替  
る瀬の、飛鳥の川とちかひつ、東路ならぬ此宿に、今は勿來會の關す  
ゆる、人の心ぞいとつらきと、打恨みつ、

たのみなき人の心をはかなくも、後の世かけて何ちぎりけん  
といひつ、歸りにけれど、女は爰に臥たるを、有らぬ人とも知らずし

能馬朝倉に朝倉や  
木のまる殿にわか  
おれは我居れば名  
のりなしついでに  
は行くは誰か子そ  
さあるを引けるな  
り

て、あな煩はし戸叩きけるや、夜はいたくこそ更ぬるに、邊なる人も如何思ふらん、此主こそいとよくなん、聞知りて侍れどて、其名をさだかにいひあらはしつゝ、あのはたりには、なまいたづらなる人の、あまた侍る中にも、とりわきて仇めきたる色添ひ、爰彼所の軒に立つゝ、木隠れ居て、行き來の者を招き寄せ、人を弄する心ありて、かゝる好からぬわざを爲侍ると、悪くげに語りなしけるを、此男つくづく聞きて、まろが事よと思ひぬれば、いとおかしきを念じつゝ、名のりをしてや行かましと思ひしかども、さすがとがめを憚りて、木の丸殿にあらはこそと、獨ごちつゝ、詞少なことばすくに云混いひまぎはして、まだ夜深くも歸りつゝ、實にかしこくも爲濟しけるよといと嬉しさ限りなくて、

思はずもちぎりし事を忘られぬ

後のなさけは知らずながらも

女は此人違へたる事はおぼろけにも知らずして、夜深く叩きける安からず思ひて、爰にさる者の侍を語らひよせて、有し夜の様を聞えつゝ、よし自らをこそあなつせら給ひふども、邊も思ひ憚からで、夢驚かし給ひたる悪くさを、かちてたべといひければ、長まり侍るとてぞ行きにける、

古歌に大空は戀し  
き人のかたみやは  
物思ふ度に眺めら  
るらん、と云へる如  
く人を思ふ時は、其  
方の空をながむる  
由にいへり

使も元より、此人違の事をは夢にも知らずして、過し夜深く叩きける事をかこち顔に行きて、かの女のいひしまゝに聞えければ、人して云はする程もなく泊りし主出來りて、實に御咎めはさる事なれども、それは常々うとからず、通へる人のわざなれば、彼所へこそはかこち給はめ、爰には更に知り侍らず、去りながら某も過にし、宵は何と無くやすらひ出て、侍るに、招く氣色の見えしまゝ、誰とも知らで立寄るに、袖を引せ給へるは、いと思はずに覺ゆれど、さすが嬉しき道なれば、いかでか辭み申へき、一夜參て、御どのゐるを申せし事も混れなし、扱又殊に珍らしき香數々取出て、酒の威徳の有る事を、様々語給ひつゝ、御盃をたびければ、數をも知らず飲酔ひて、現も更に無りしが、斯くては人の御爲も如何と思ひ憚りて、歸りしながら、そなたの空のみ眺めしに、今更かゝる御使の有へしとは、かけても思ひよらさりし、ゆるし給はぬ御事を押ても參りたらばこそ、身の僻事にも侍らめ、いなかにおはす

ろうじは論じなり

る殿にも、此故をたどひ罪には沈むとも、いかさま歎き聞えんと、ろうじつ、云ければいと道理におぼゆれば言の葉も無くて、しかくの其故をも知り侍らで、かゝる御使を申し面目を失ひたるこそ口をし

●けれどて歸りぬ。

使歸りて彼のもとに云し事を、有の儘包ます語り聞ゆれば、人やりならぬわざながら、俄に胸の潰れてぞ、我にも有らぬ心地して、物も覺えず今更に、世の人聞え思ふより、増りて猶も苦しきは、哀に深く思ひおき、心つくしに住人も斯くと聞かれば如何せん、いと悲しきに打添へて傍は忍び來る人も洩り聞なんも耻かしく、心つきなき事なれば、返らぬ事の悔くて、取返す物にもがなやと千度万度思へども、過言一度出ぬれば、驕も舌に及はずいふ言の葉は、今更に前非を悔るかひもなし、面目無さは限りなくこそ侍れど、御身を深く初めより頼み侍る事なれば露いさ、かも此事を人に洩させ給ふなど、いとよく口を固めつ、數々の引きいで物を盡してぞ、彼の腹立し心をもさるべきやうに聞えなし宥めてたべと云けるに、かゝるべしとは白雲の跡はか

よりかへすものこ  
れも古歌によれり

古歌に岩橋の夜の  
契も絶わへし明る  
契も絶わへし明る  
さあるなごりしな  
り

引出物を略言せる  
か或は出物の字を  
脱せしにや

陸奥の名所なり古  
今集戀にみちのく  
取川なき名とりて  
はくるしかりけり  
ともよめり

なき事なるに、由なく人に頼まれて、又は何とか岩橋の夜の契も絶はて、明てわびしく愛き事の、今有とていかにして、有ぬ様には岩波の云くたかんは難くのみ思ひながらも様々の、ひきともあまたたびけるに辭み難くていさ、かも疎略は更に侍らじと、懸て立てぞ行にける、女は更に現とも、夢ともわかぬ心地して、いと淺ましきの餘りにぞ、

今朝こそは有らぬ人としら露の

むすぶ契をゆめになさばや

いなみ難さのまゝにこそ、如才あらじと聞えつれ、行ては何といふべきと、詞を更に無りける、人の頼むに身を捨て、頼まれぬるも事に依る、笑はれぐさに成はてば、我さへごもに名取川流しはてんも朽惜く譬へば漢の古に帝堯と申奉る帝より、許由と云る賢人の、箕山に住むと聞しめし御位を賜ふべしと、御勅定の有けるに其返事をは申さで、剩さへかゝる事を聞きて、耳が穢れぬとて、潁川の水にて耳を洗ひし所へ、同じ山に住む巢父も此川に來合ひしが、さやうに穢れたる耳を

洗ひし水をば、牛にはいかで飼べきとて、牛をひきて歸りしとこそ聞  
 け、昔の賢人はかやうに心清かりしぞかし、いかなる我なれば傍痛き  
 事に頼まれけん、かく穢れぬる心をば、大海にてすゝぐとも、いかでか  
 清からむと、古き例も耻かしく悔しさ限なけれども、今更異議に及ば  
 ずして、又彼處に行きつゝ、さても不思議なる卒爾をも知らず、申出づ  
 るこそ返々も口をしく候へば、御詫言に参りて候、よし／＼人は知ら  
 ざれば、たゞともかくも御心得にてこそあらんすれ、あはれ此事を音  
 無しに深くも頼み侍ると、俄に引かへ詫けるもいと可笑くて、某を世  
 に徒なる好き者との給ひしさへ、御恨は深く侍るに、ましてや故も無  
 き事をかこち給ふは心得ず、いとめづらかなる事哉とろうじつ、い  
 ひければ御道理にては候へども、かゝる過の侍ればこそ、かやうに御  
 詫言をは申候なれ、實に亦昨日今日までもしのぎを削り戦へる敵な  
 れども、降を乞ひぬれば御許を給ふも習ぞかし、是は誠にいはけなき  
 女心地のはかなくて、亂れしすきに引れつゝ、よしなき事を聞えしは  
 咎にあれども、さりさては浮節なから、なよ竹の一夜をこめし御情も、

草子の名此におこ  
 れり

以上疎忽なること  
 を叙し以下作者の  
 教戒を寓す

此世ならざる契ぞと思召し赦させ給へかしと、打笑ひつゝ、いひけれ  
 ば、さすが打ほゝゑみて、少し和らぐ言の葉のいとうれしくて、御ひが  
 事は無しとて、聞え顯はし給はんも、いはぬに劣る習あり、悪き者と  
 て今更に辛き目を見せ亡はせ給ひなば、よしなき罪に侍るぞ、只さる  
 べくは此事を思ひ止らせ給へかしと、詞をつくしてさま／＼に、わび  
 ければ、悪きながらもさすが又いと可笑きにすかされて、やう／＼の  
 事になん聞入りて侍るとぞ、  
 されば除にけしからず、我身の程をふさやかにいひなさんどて、かゝ  
 るうたてしき事をなん取出て、人笑になるぞ心憂き、たとひかゝる事  
 ありと、知らず顔にて忍びなば、かく憂き事はよもあらし、死ぬるに増  
 る耻ぞとは、げにかやうなる事をこそと、聞くも憂ければ、ごにかくに  
 見やう形はおくれても、心は下の品ならず、只何事もつゝ、ましく、忍び  
 すぐしてさすが又、世の浮節も哀をも、情ありつゝ、知る人の、只假初に  
 云捨る言の葉ごとの末までも、露違へじと思ふには、心悪くも頼もし  
 けれ、其人柄はやごとなく、かたほにあらぬ様ながら、心の様はさしも

此一段を以て冒頭  
の疎忽なるをかし  
き事の物語の句を  
收結せり

なく、偽り勝にさがなくて、面はゆげなき風情には花の姿も何ならず、  
心の程にやつしつ、色香も消る心地して、難波の事も深からず、思ひ  
なさで浅くのみ、見劣りするぞ憂き、されば高きも下れるも、おのが心  
のゆくまゝに、人の誹を知らされば、遂に怪しき事出来世の言種とな  
るぞうき、又さりとても見聞く世に、露きすなくて、萬にも満てる人は  
あらばこそ、唯何事も耳立で斜かたなるぞ、目安きや、餘りに下しう何處迄  
も取る方なきは口をしく、人も落しめ侍れば、其品あるも品なきも、唯  
程々に従ひつ、心つかひなんいとよくたしなみ侍るべきことにこ  
そ。

あしひくは

わ 草 開 題

この草子は原本は寫本なれど別に天和三年二月江戸大傳馬町三丁目  
うろこかた屋開板の本ありその本は上中下三卷にわかちて所々に繪  
を挿めりもと繪卷にてありしもの、體なり今それと對校するに文詞  
には異なる所なければとも歌には結構の異なるものありたとへは寫本  
に

露結ふ雫となりや果なまし庭のわかき風の吹なは  
どあるを板本には

露結ふ庭の若草風吹けばもこの雫となりやはてなん  
とある類なりおもふに原寫本は刻板以前の本なるべし文は幼けれど  
も語つかひには變遷の證とすべきもあり

319565

若 草

按察大納言 本官  
大納言にして按察  
使を兼ねるを云ふ  
公達 後世は多く  
男子を云ふ事聞く  
えたれと云ふ事聞く  
高貴の子を男に  
わたりて云へり

中むかしのとなるに、按察の大納言とて、世にかくれなき公卿一人お  
はします公達二人もちたまふが、一をは少將殿と申ける、次は姫君に  
て、朝日の前と申して、御かたち世にすくれ、とに詩歌管絃の道いとか  
しこくましませば、只人にはま見へさせし、女御に參らせんと思召い  
つきかしづきたまひける、さて又大納言との、御臺所の兄御を、前の關  
白殿と申ける、是にも姫君一人おはします。玉のやうなる御かたちに  
てまします、御行末もたのもしく、父母の寵愛はかきりなし、げにはか  
りなき世の習にて、無常の風にさそはれて、關白かくれさせたまひけ  
る、その思ひのあまりにや、母うへも程なくはかなくなり給ひぬ、大納  
言殿の北の方、おば御にてまします、わが子にせんとの給ひて、淡路  
といふめのをそへ、公達とおなしやうにそだて給ふ、月日うつりゆ  
くにしたがひて、うつくしくまし、ける、八つ九つの比少將常に御  
覽して、此行末を御ゆかしくそ思し召しける、朝日の前と一所にすま

○若 草

若草殿前に出たる  
關白少將殿の名  
なり此少將殿の  
に侍るなり  
あこがれ所な  
てあり所な  
若草殿前を云  
少將殿前を云  
離れてその心  
く離れてその心  
やうの義なり  
へ行

打そばめ正面に  
向はて身を佞に  
けるを云恥たる  
なり

せ給ふときこえける、今ははや十あまりになり給ふ、少將殿御ゆかし  
く思召し、奥方の女房たちを近づけ、さても若草はいかばかりひと、  
なり給ふらんとおもひ給へは、おとなしくましく、て、うつくしき申  
すもおろかなりと語りければ、いよく、あこがれ給ひ、ひまもがな、  
まぎれ入て見は、やとおほしめしげるに、すてに十五にならせ給ふ年  
のかみな月廿日あまりのとなるに、時雨のつれ、心細き暮方、妹御  
前の御方へ推参して、御入有、あまりつれ、に侍るほどに、おもしろ  
き冊子あらは見参らせんと仰ける、朝日の前きこし召、やかてさうし  
とりに立給ひける、若草は手習しておはしけるが、誰やらむと見あけ  
給ひて、打そばみはづかしげなる風情にておはします、いとけなき御  
時よりいやまさりぬる御姿、たくひなうこそ見え給ふ、少將いよく  
あこがれ給ひ、空しく歸らんは、心うしと、  
わか草のおひゆくすへをまつほどは  
我ひとりゐに露ぞおきそふ  
とかき給ひて、わか草に参らせ給へは、かほ打あかめておはします、さ

いもうと  
前後に關らす男の  
兄弟より女の兄弟  
なして云ふ中古  
の習也

て朝日御前は、冊子ともあまた取出し、少將とのに参らせ給ふ、さうし  
に御心がけなければ、心ならずかへり給ひぬ、わか草思し召すやうは  
あはれ父母のましまさは、かゝる恥がましき人には、逢はじ物をと、涙  
にくれておはしけり、少將殿歸り給ひて、その夜は御目も合す、わか草  
の御事のみ思ひ明かさ給ひけるが、内へも入らせ給はず、打しほれ  
おはします、いもうと御前は、少將の御有様、わか草を思召す體を御覽  
じて、面白き草子を集め、御手箱のかけこに入て、わか草に仰られける  
は、餘り少將殿つれ、にいていたはしきに、是をもちて御参あれと仰  
ける、昨日さへ御恥かしく思召つるに、人して申させ給へと仰ければ  
何かは苦しかるべきと、度々の給ひければ、若草心うく思しけれども  
頼む人の仰をいなみ申も如何なれば、恥かしなから持て御参り有、朝  
日の御方よりとて、打置きて歸らんとし給ふ、少將ゆめうつ、ともわ  
きまへす、袖をひかへと、め給へは、萩す、きの風に靡く如くなり、少  
將の給ふは起臥せんかたも思ひくらすなごとき給へは、實に仰  
せわりなく思ひ候へとも、朝日のおほさん事も恥かし、此度は歸させ



おろかなる人にて  
 もなり若草は少  
 將の母北の方の兄  
 の子に於て母北の  
 方は從弟なり又種  
 姓の分あり云は種  
 略ならぬ申なり傍  
 がおろかなる云  
 が如し  
 御帯など 妊帯を  
 いふ領妊より凡五  
 ヶ月に淡路御領妊  
 べきを淡路御領妊  
 を知らず其用意も  
 爲ざりし也

給へ、又、こそ参り候へしとの給へは、少將仰けるは、いとけなくましま  
 す時より、思ひそめにし事なれば、た、打解け給へと申給へども、更に  
 なびき給はず、されとも夜すてに更ければ、若草仰けるは、いまは朝日  
 のお方へも恥かしくて、出へき心ちもなしと仰ける、少將うれしくお  
 ぼしめす、御かたらひときこえける、淡路不思議に思ひ、少將殿かたへ  
 参りて見れば、淺からぬ御中也、さて少將殿めのこと、このよしをき、て  
 母上に申しける、母上きこしめし、若草とてもおろかなる人にてもな  
 し、少將に思はれむは然るべしと仰ける、人々おろかならすもてなま  
 けり、はや其の年の暮より御身も重くならせ給ひぬ、あらたまの年も  
 明けければ、かすみと共に臥くらし給ふ、すてに卯月の頃に成ぬれば  
 夏衣一重に透たるに、た、ならぬ御けしき見え給へは、淡路驚き、か、  
 る愛たき御事とも知り参らせすして、御帯など参らすへきものをと  
 申せは、顔うち赤めておはしけり、此のよしを少將殿へ申ければ、さは  
 何事ぞと計り仰ける、淡路思ひけるは、はつかしきも道理也、少將十九  
 若草十六になり給ふ、さて七月の頃若くさは御心苦しげなるを少將

御覽して手習のついでに、

はかなしやまた恨めしやわか草の

朝日を待ちて結ぶまら露

と書て戯ふれ給へは、わか草は心細き事かきりなければ、うき世にな  
 からへん事不定に思し召して

露結ふ平となりや果なまし

庭のわかくさ風の吹なは

かやうに口すさひ書き給ふを、少將御覽して、いま、しき事かなと  
 の給ひけり、かくて九月の頃にもなれば、御せんくらの舊殿有ければ、  
 ひき繕ひ吉日をえらみ、少將もろどもに御車にめして移り給ふ、さて  
 女房たち三人御めのもとに参りかしつき侍り、少將とのさま、祈誓  
 をかけ給ふ、その験にや程なく御産の紐をとき給ふ、御子とり上見奉  
 るに、玉の様なる姫君也、少將殿も母御前も御悦びは限りなし、さて少  
 將殿は心うれしく思召女房たちに懇にいひおきて、常の御所へおか  
 へりなされつ、七夜の御よろひを、めてだしと思召して

七夜 出産の後三  
 夜 七夜 云て祝  
 やしなひさ云て祝  
 ふ事なり或は祝  
 して七夜のみ祝ひ  
 しに七夜あるべし

御せんくらは詳な  
 らす

朝日さすみかさの山のひめ小松

雲をわけてやとひ登るへき

とか様に詠みて遣はし給へは、若草御覽して御心慰み給ひける、さて三十日立ちければ御忌あきて、御所へ入らせ給へは、祖父祖母御前見給ひ、實にいみしくおはしける、然れども大納言殿の給ふは、世に有人の婿になりて世繼をも儲けたらんこそ面目も有べし、便り無き者の腹に宿り祖父祖母二人してもてなす事と、折々ごとに仰ける、是をば知らず少將、どのわかくさは、よに嬉しく思し召し御寵愛なされける程に、はや二歳にならせ給へは、彌々いたいけにそみえにける、さる程に、三條西の洞院に、左近の宰相と申人、姫を一人もち給ふが、少將を婿にとらんと心かけ給ふ、折ふし内参りのついでに、大納言殿へ宰相申さる、は、かやうの事を親の身として申出すも、傍はら痛御事なれども、姫をひとり持て候、御子に参らせん、又少將殿を我子に請はんご申されければ、大納言聞し召し内々是より申へきに、望む所を仰らる、物哉、とかたく契約してそ還られける、宰相の方には待かねたる事

左近の宰相は参議の唐名なり参議にして左近衛の中將を除しなるべし内参り参内を云ふ禁中にて大納言に物語りある也

いたいけ

北の方はおりならす、北の方は若草を疎略に思はす、少將の申を引別入事を元より不服に思はる、也此事未々迄見えたり

なれば、又使こそ参りけれ、参りの時あらまし申つる義如何なされ候と申つかはさる、大納言聞し召し其御事に候、此程は吉日なく候へは打過き候ひぬ是より追付申入るへしと返事有り、さて北の方へ申さる、は以前も申つる如く、又宰相の方より使参りて候へは、いなみ難くして事うけ申て有、けふは吉日なれば少將にも語らんと仰ける、北の方はおろかならず思し召したかひに睦ましき中を引離なし、その上いたいけしたる幼なき者もいたはしさよ、多くも無く一人の子を、ともかくも心次第にあらせたきに、何そや宰相の子にならすとも過ぎわぶる身ならしと、かき口説きの給へは、大納言殿も眉をひそめておはしける、又ある時宰相参會のついでに過ぎにしあらましの事は如何思召候やらん、我等人がましくもなく候ゆへ打すてさせ給ふらんと、腹立顔にての給へは、大納言仰けるはいつそや申如く、疎畧には存せぬなりいかさま吉日を撰らひたがひに行末迄も繁昌なる様にと存じ遅なはり候と仰ける、我宿に歸り、北の方にこのよしを語り給へは、恨めしや何しに約束を給ふ、そや、少將若草を疎畧ならす思ひければ、今更引

三條の宰相の子に  
さ中古の結婚は  
に方より妻の家  
に行て住居し其  
の父の辨ふる常  
の時風習なれば直  
ちの風習なれば直  
りなればふみ書  
きて先ち男の方  
女へ先ち男の方  
あり女より又返し  
し式に如く吉日を  
し故に吉日を擇ひ

分けんもいたはしや、又ひめも三つになれば、人の色顔を見知り片言  
いひていたいなれば憐れなり、然りながら男子は父の計らひ又娘  
は母がいらふといへは少將事はかまひ申さぬと氣色を變へての給ひ  
ける、されども大納言殿は、少將殿を召れける、何事やらんと御前に出  
らる、に大納言殿抑けるは、かやうの事を申もいな物なれども、さり  
なから爲の悪しき事をば申まじ、三條の宰相の子にと度々御申候へ  
ども、幼なき者も有る故に悪しと思ひて過ぎつれども、餘り度々事のな  
れはさのみ辭み難くして事受け申て有り、今日は吉日なればふみ書き  
て遣はし給へ、もし若草に思ひかへて、親の言ふ事を承引なくは、今日  
よりして親子の契りかなふまじとて硯料紙を取出しそれく、と仰  
ける、少將現ども辨へず、如何は返事申さんと暫時さしうつつい  
てまします、是にて否み申ならは即て不孝の身と成る、へし先づふみば  
かりは仰に従がふへしと思し召し、屏風のかげにより筆の立處もわ  
きまへず、現ながら連ね給ひけり

あふ事を前にあはれをかくるかな

など世をおくる思のみして

數ならぬ香身をこ  
そ前に父大納言  
女の腹に時めく人  
の思ひて若草は詞  
も思ひて若草は詞  
白の女なれと今沈  
みてあるな云なり

どかやうに詠みて、わが御方とかきて、左近のせうを遣はさる、若草は  
これをは知らず、何心もなくおはします、少將どのは父の御前を退出  
して、几帳の内へころび入、胸のいたむとの給ひて、打しほれてそおはし  
ます、若草御覽して、いかなる御事にてた、ならぬ御氣色こそ怪しけ  
れど、の給へは、少將との聞し召し、此事隠してはいと、恨みも深かる  
へしと思召、唯今召れしはべつの子細で候はず、父大納言かやうの事  
を仰有て、胸ふさかりて悲しけれとの給へは、若草むね打騒き、あら淺  
ましやと打しほれ、涙にくれておはします、少將仰するは、父のいかや  
うにの給ふとも、わか心いつまでも變るましきと慰め給へは、若草涙  
のひまより、何しに御身を恨參らすへき、又大納言との、御計らひ  
も悪しきとも存せぬ也、唯かすならぬ我身をこそ恨み候へ、あはれ父  
母のましまさは、かゝる憂きめを見ましましきものをと歎き給へは、少將  
も共に涙にむせひ給ふ、左近のせうは三條よりの御返事とて、憚る所  
もなく、差上くる取あけて御覽するに

あふ事をまつもあらしの世の中に

あはれはかぎりありとこそまきけ

と有ければいと、心憂くそ思しける、おぼこの御方より若草の許へ御使  
参る、さこそ恨めしく本意なく思はれん、心の中推量られ悲しく侍れ  
ども、大納言殿の御計ひゆへ違背中にき、入給はすさりなから少將  
疎におもひ候はねば幼きものに慰み給へ、我子に劣す思候間、必ず心  
置き給ふなど、細々とありける、又朝日の御方より、たとひ少將殿御心  
かはり候とても、みな常のならひなれば、力及はす、されども御心露ほ  
ども變らせ給はねは、いつくにも同じ御心にてこそ候はめ、昔の如  
くに我々ど一所にましく、て御心をも慰さめ給ふへしと方々より  
御使有るに付ても、涙の靴ひまもなし、さて翌る日にならければ、大納  
言殿より急ぎ出で立ち候へど、度々使たつ、御心に進まぬ事なれと思  
ふ人をふり捨て、思はぬ人と思ひ顔にせん事の淺ましき御事と、伏  
しつみてそおはしける、若草申させ給ふは、何とてかくておはします  
ぞ、さなきだに大納言殿みつからをこそ悪し、と思し召すらんに、と

さこそ、うらめしく  
次なる必心おき給  
ふなき云へるまで  
文の詞なり  
たひ少將どの  
此詞より次なる慰  
め給ふべしと云る  
までこれ朝日前  
より若草へおくり  
し文の詞なり

いかに、おしめて  
時めく人の婿にも  
ならす若草を愛し  
てあるなきて云  
るなり  
きの引被き伏し給  
ふ女の敷く時す  
る事にて常の衣服  
を頭より引覆ひて  
泣く體なり泣き顔  
を人に見すまじき  
爲にして中古の物  
語なさに多く見え  
たり

くく御参り候へと引起し給ふ、大納言殿よりは何とて遅く出らる、  
そ我等むかひに参るへきかど、きつと使を立てらる、少將是非に及  
ばずやうく御前にいで給ふ、装束を着せ参らせ御覽すれば、誠に繪  
には寫すとも筆にはいかて及ぶへき、大納言はうち笑ませ給ひて、こ  
れ程の人をいかて押籠て置くべき、廣き所へ出してこそ、かひくし  
からめと仰ける、少將殿はかやうの時若草に暇乞申さんと、我御方へ  
入せ給ひて御覽すれば、若草きぬ引き被ぎ伏し給ふ、幼き人は何心な  
く遊ひめぐりてましく、けり、少將殿直衣の袖をうちかけて、必曉に  
はどく歸り申へし、いつ習はぬ愛き獨寢の痛はしさよ、今こそ父の仰  
に従かふとも、未迄愛きめをは見せ参らせし、淡路よくく慰めよと  
て、出てさせ給ふ後姿を御覽して是を限りと思召御心消るはかりに  
歎き給ふぞ哀れなる、さて宰相の方へ御越あれば、豫て願ひし事なれ  
ば儀式の作法いみじくて御盃の献々に、御よろこひの引出物なごす  
きて、夜も既に更けければ、花やかなる女房立出て、少將殿の御手を取  
り、内へ入奉れども、御心進まずおはします、宰相の姫君も、みめかたち

去程に以下刊本中  
巻す

ならはぬは心に如  
姫君は男などを知  
何の者なるやを  
少將のよそくしに  
くありしきなり

美しくましませは心に思ふ事なくばさを珍しく侍るらめ、我は若草の歎きを思ひ出し、忍び涙せきあへず、さすが餘なる日來の言ひ約束を今宵の中ばかりと思召、傍に添臥し給へども、更に有へき御心し給はず、鶏の聲遅しと待あかし給ひて、三條よりの道すからも、御車よりさきに御心を急かせ給ひて、御所へ歸らせ給ひけり、去程に三條の姫君は習はぬ御心にや怪しき人の氣色かなど、いと恥しくを思しける、さて少將殿はわかき御覽すれば未だ宵より臥給ふとおほしくて、簾の際に臥しておはしける、如何なる事をか思ひ明かし給ひぬと、御顔を撫て給へは、額の髪はしほくと濡れ、淺ましける風情也、實に道理也、今より後三條へも行くまじきとて、かき抱き内へ入給ひて明させ給ふ、大納言是を知らず喜び給ふ所に御供の人々はや歸り候とて申せは驚き給ひ、せめて三日有ても歸らずして、宰相の思はれん所も有、親に恥を興ふるものかな、少將これへ參られよ、子細を聞かんと度々使立けれども出給はず、母上あまり氣の毒に侍り、是へ參られどもかく申給へと仰ける、少將殿聞しめし、世の中は女こそ身をは心に

況して男は此道を  
心のまゝに女は  
父母の心に從ひて  
思はぬ人に從ふは  
常なりそれだこよ  
き事にはあらぬを  
況んや男子は許思  
ふ女を妻と爲して  
こそ本懐ならんこ  
也

始たる所にて打ふ  
きたらんは、今行  
きは、病に臥ん  
は、地方

任せぬと聞け、それさへ辭み申も有、況して男は此道を心の儘にこそ有ぬべきを恨めしの父上やとの給ひぬ、若草は自らが止め申とこそ誰人も思すらんに、はやく御參り有れと勸められ、やうく父の御前に出らる、大納言殿氣色を變へ、何とて三日も立ざるに歸り給ふぞ、假令ための悪しき事にて、親の言ふ事ならば少しは承引有べきに、人の親の子を悪しかれと思ふべきか、親に恥を興ふる事いかにくと仰ける、や、有て少將申給ふは、昨日より風の心ち侍れども、此よし申さは三條への事辭み申やうに思し召さんと存じ煩ひながら參りぬ、始めたる所にて打臥したらんも憚り有と存じ、罷歸りて候との給へは、實にさぞ有らん、さらばふみ書きて、遣はし給へとの給へは、又辭み難くてかくなん、

かへるさは道ふみ迷ふこ、ちして

たどりかねたるしの、めのそら

とかきて、かしこに引き結びて打置きて、わか御かたへかへり給ひ、あちきなや如何なるかたへも諸共に行き隠れはやと思へとも、父の仰

そむかんも恐れ有、又従ひ申せは苦み有、如何はせんと歎き給ふ、さて大納言はいかにもすかして三條へやらばやと思ひ、少將殿を呼び寄せ打笑みながら強ちに辭み申さる、事をさのみ申べきには有らね共、今一度參り給へ、人の心もいとほしく、あやなき事と賺し給ふ所へ御返事とてさし上る、取りあげて御覽するに

ことわりやけにいかはかりたどりけん

夜ふかくかへるしの、めの空

と猜みかましく墨ぐろに書いてこされたり、大納言殿仰けるは、此度賺しやりたりとも、又明日は歸るへし、車をも供の者共も、一人も残らず戻るへしとの給へは、少將とのを三條へ送りて、皆々供のものはかへりけり、宰相殿には少將殿打解けられぬ事をなげき、様々の慰みを爲給へ共、更に心に染すして、夜の明るをぞ待給ひて、御供の人々を召るれば、みな歸りて一人も居ず、南無三寶たばかられて有けるよ、さすがに徒はだしにても歸れず、又迎も來たらんと思召ておはしければ、宰相の方には御悦びはかきりなし、大納言思すやうはとかく若草があ

人の心もいとほしく、あやなき事と賺し給ふ所へ御返事とてさし上る、取りあげて御覽するに

南無三寶

大佛大和國奈良  
舍那東大寺の盧  
聖武天皇正年中  
の創立なり

れはこそ、少將かこゝろも落付すまづ何方へも隠して置かはやと思ひ、年比召仕はれし女房の年よりて、宇治に住む有、彼が方へと思しめして若草の所へ御つかひ有、そは少將三條に候へは、さこそつれづれ、勞はしく候程に、尉みのため大佛へまうで有るべく、内々其支度有へしとの御使有、若草聞し召し、今さら大佛詣と仰けるこそ怪しけれ、わか身を如何にもなしはて給ふらん御計らひにてこそあらめ、されども辭み申べきにもあらずと心得しと申させ給へとも、心細さは限りなし、少將は五日になれとも歸り給はず、淺からず契りし事も皆偽となり行、又住みなれし宿をさへいだされ、都をよそに見なさん事の悲しさよ、さて幼きものをも片時もはなさじと思ひしに、今更振棄て置かんもせん方なし、自こそおさなくて、父母にはなれしか、此子は十にも足らずして、母なき身とならんよ、少將ましますとも、生さぬ中の事なれば、なごか母ほご思ひ給ふらん、祖父御も疎略にこそ思すらん、彼といひ是れといひ、さても甲斐なき我身やと歎かせ給ふところへ、その幼き者をこなたへ渡し給へと有ければ、若草の給ふは、遂に添ひ果つ

生さぬ中の事なれば、なごか母ほご思ひ給ふらん、祖父御も疎略にこそ思すらん、彼といひ是れといひ、さても甲斐なき我身やと歎かせ給ふところへ、その幼き者をこなたへ渡し給へと有ければ、若草の給ふは、遂に添ひ果つ

おぼこ 大納言の  
北方を云若草の  
物詰りの所なれば  
斯くさまに云るな  
り

べきには有らすとも、今は御寝あれは今宵はかりは身に添へて明日こそと御返事有ければ、おぼこは聞し召し涙を流し、あら情けなや今に悔み給ふへきぞ、少將に添ひもやらず、その歎さへいかはかり有ぬへし、又幼なきものも引別けて、習はぬ住居に在らせん事一かたならぬ思ひかな、子を世にあらせたまきは世の常の習ひなれども、野の末山の奥までも、思ふ縁こそ有らま欲しけれ、せめて幼い者の痛はしければ、ひと所にて慰さみ申せと有べきを、かやうに計らひ給ふ事の恨めしさよ、とかき口説きの給へは、大納言殿の申さるゝは後までの事にて無し、まつ暫くの程ぞかしと仰ける、若草は夕暮方になりぬれば、又立歸らん事も難かるへし、朝日の御方へ御暇乞はんとて、幼き人を乳母に抱かせ参り給ふ、朝日御らんじて、内々これより参り候はんと思ひつる打ふし御出候とて、御涙を流し給へは、若草も御涙にむせび給ひ暫したかひに物をも給はさりければ、糸薄の風に従ふ御有様にてましませば露のこぼるゝかどぞおぼえける、や、ありて若草のたまふは大納言殿より、明日大佛へ参れとの御事にて候、あやしく存じ候、

世になき者さ  
草の心中に大佛  
詣りて大納言  
の給ふ事を察  
し給ふ事な  
り

へは、もし世に無き者と聞し召さば、幼き者を我紀念と思し召し、情を懸けてたび給へ、けふを限り此内を出され参らせん事、露程もわきまへず、此程馴れし女房たちも、名残り惜しく候との給へは、皆毎に聲をあげてそ泣にける、既に夜も更ければ歸らんと立ち給へは、朝日たがひの御かた見とて、硯を取りちがへ給ふ、若草わが御方へ歸り給ひてかしこを御覽するに、枕ならべて有、日ころの語らひを思召いたして

しきたへの枕もうきにたへすして

おもひ出でぬる事を恨し

と様々あはれなる事を書き付て、さて幼い者も人の吉凶を知りたらば、諸共になげかんのを、御顔をさしあげ合せて歎き給へは、幼き人は驚き、ひし〜と抱付給へは、いつしか膚にそはん、今を限と思しめし、悲しみ給へは、幼き人は、片言してぞまし〜ける、夜も明方になれば御車よせ、はや御出とす、むるに心に染まぬ物詣で、左右なくは出て給はず、淡路申けるは、是ほど情なく怪しき御事なれば重ねて思

おさなき人は片言  
して若草の母子  
の別れを悲しむな  
姫君は幼稚にして  
何事をも聞分す片  
言に物なご哀れな  
るを云いと哀れな  
る體なり

ひ知らせ給ふ事も有ぬへし、とくく御出て候へと申ければ、力及ばず、幼き人をめのごに渡し給へは、母上に取付き離れ給はずやうく取り離し申せば、手をさしあげ慕ひ給ふを哀れなる、やがて御車に抱き載せ御門を出し参らす、おさなき人の母上やと歎き給ふ御聲遙に聞こゆれば、若草も淡路も、こがれ悲しみ給ひけり、次第に御車遠さかり、幼き人の御聲も聞えずなりぬれば、御涙のひまより

慕ひ來し其みどり子の面影は

さていつの世に忘れ果てなん

と打ち詠じ給ひてやうく宇治に着き給へば、小柴垣の内にあやしげなる庵のある御車立てければ、内より六十ばかりの女房簾打上げ一目見参せて、淺間しや是程の御姿にて、いかなる御事ましくと、斯かる淺ましき庵へは送り給ひけるぞと申ける、若草も淡路も、大佛詣ての事は偽なりと、是にていかにもなし給はんと思召すなるへしと、猶もあぢきなく心細く思しける、御供の人々日も暮れ候はん、に御車より下りさせ給へと申ける、都を御出の時はおさなき人慕ひまませば

小柴垣の内にあやしげなる庵のある御車立てければ、内より六十ばかりの女房簾打上げ一目見参せて、淺間しや是程の御姿にて、いかなる御事ましくと、斯かる淺ましき庵へは送り給ひけるぞと申ける、若草も淡路も、大佛詣ての事は偽なりと、是にていかにもなし給はんと思召すなるへしと、猶もあぢきなく心細く思しける、御供の人々日も暮れ候はん、に御車より下りさせ給へと申ける、都を御出の時はおさなき人慕ひまませば

は車寄せけるを憂く思ひしか、今ははや都の紀念と思しめせば、名残惜しく思しけるが、やうく下りさせ給ひて引被きてそ悲しみ給ふ主の女房淡路に問ひけるは、いかなる御事にやと申せば、始よりの事共を細々と語りける、あるし聞てさても痛はしき御事哉、我等年寄りて候へは後の世を助からんとこそ思ひしに、かゝる御方を預かり堪ぬ思ひに罪も深らんと申つ、若草の御前に参り、御つれづれに候はん大佛へ御供申さん、尊き聖のましませば御参り候て罪障をも御懺悔候へと勧め申せば、慰む方もやと思し召し、大佛へ参り給ひ上人に對面して様を變へんとの給ふ、あるし申けるは、爰は目も茂く候へは宇治にて御心静にと申しければ、實に其も道理なり、然らば戒ばかり受け申べしと、年頃少將殿と御手馴れし、琵琶と鏡を佛にまゐらせて思ひの間に迷ける罪深き身にて候へは、佛の御利益にてかならず淨土へ導きたまへと伏しをがみ、宇治へ御下向ましとける、さて淡路をば近く召れ、けふは物もふでして佛の前にて懺悔して何事も前の世の報ひなれば、物思ふべき身と生るゝも、前世の事と思ふ故やらん

戒はかりけり申べし出家の事は後日に出成て先受戒を初に殺生偷盜邪淫妄語飲酒の五戒を受るなり



火の中水の底まで  
れい思ひ入りた  
るを云ふ榮花物語  
見はてぬ夢の巻に  
心ざしのかきり火  
水にいりまごひ云  
々さも見えたり

今宵は心はれやか也、ちとまごろまんとて臥給へは、淡路も心安く此程の思ひなけき心もつかされて、御あそにまごろみけり、人々みな静まりて、若草起きさせ給ひて、硯に向ひ思し召しおく事を書き給ひて思しけるは、どかく夢の世の中の世の中なれば誰か残り止まるべきと、一筋に思ひきり、水の底にも入なんと、唯ひとり迷ひ出で、宇治橋までおはしけれども、夜更けたればさらに人にも逢ひ給はず、橋の上に暫した、すみ給ふに、誠に水の音たかきを聞き召し、今を限りと思しけるが、さても少將殿かやうに心變り給ふへしとは露程も思はさりし也、かく歎く思ひは夢になり共見ゆるらん物を、空しく成たりと風の便に聞き給は、なごか幼き物を哀とおぼさん返す、くも幼き者の母なき者と成給はん事のいとほしや、都を出し其時離れじと取付きし而影の今のやうに思はれ、又朝日もさこそ歎き給らん、さて淡路も火の中水の底までもとなげかまじと、彼はおほしめして聲を上げてぞ泣き給ふ、これ程に果報なき身の今少しもなからへは、猶罪こそは積るらんと思し切り給ひ、雲透きに川の面てを御覽すれば、宇治

ひさつ蓮佛は蓮  
に座するが故に蓮  
く云へり智度論に  
蓮花淨土柔脆欲現  
蓮花淨土其上云々  
神力能座其上云々  
さもあり

うらなし履の類  
なり按にうらは  
かさも思へど猶  
れの方ちて足な  
のべし木末は未  
我なり云く類を思  
ふべし古く類を見  
さある履の物に見  
えたるも此類の物  
なりしならん

川のくせとして、岩高かく水のおもて漲りて、身の毛もよだつばかり也、かほごに思ひ切りたる身なれども、いつくへ身を沈めんとおもひさだめすこ、へ行きかしこへ行きかなたこなたにイみ給ひしが、さても無慙な我心かな、いつくに身を投げて心安かるべきぞと、御心つよく思し召し、西にむかひ念佛百返ばかり唱へ、南無西方極樂教主阿彌陀佛、本願あやまり給はずば、父は、のひとつ蓮に導き給へ、此世にてこそ薄き縁なりとも、少將殿をば淨土にてまち参らせん、又捨ておきしみどり子を、十方の諸神諸佛も憐みを垂れ給へと祈念して、御目を塞ぎ、たがりて、落る白浪に、御とし十八と申に、川の水屑となり給ふ、此を知らず淡路は目醒めて見れば、まします、打ち驚き胸さわぎこ、やかしこを尋ねけれども、まします、こは如何にとあきれ果て泣きさわぎければ、主の女房も驚き、諸共に尋ねけれども、まします、やうく、と夜明けて、橋のあたりへ参りて見れば、そのしるしあり、うら無しを踏み馴し脱ぎて有、爰にて御身を投げさせ給ふらめ、みづからに知らせ給はぬ事こそ恨みなれ、をさなき時より付き参らせ、片時

空蟬の如く古くはうつしみのみ  
云て現身の蟬なり  
しを中古より蟬の  
もねけたる源氏  
空蟬にうせみ木  
身をかへてける木  
の本にうせみ木  
なつかりしきかな  
もつかりしきかな

おさなしくは長し  
君の今少しは長し  
にてあらんにはい  
になおかならぬ義  
に云ておなじの語  
小兒の物をよなく  
辨まふるおなじの  
しきおなじの年た  
けたるおなじの年  
きの意なり

さて以下板本に  
下巻とす

あちへ遊近をな  
ちちち云るを俗  
にあちちち道は  
し云て同じく爰も  
あなたと云ふ詞な

はなれず火のなか水のそこまでもと、附添ひ参らさんと思しに、みづ  
からを何しに捨ておき給ふぞやと、既に飛び入らんとしけるを、人々  
取付き止め、御歎きはだうりなり、さりながら身を投げ給ひて詮も無  
し、後世菩提を懇に吊ひ給へと、様々になだめ、主の女房つれだち歸り  
けり、さて若草の臥し給ひし所を見れば、空蟬の如く脱き捨て置き給  
へり、淡路あまりの悲しさに、未だ憂き世にまします人に物申す如く、  
唯今みづからが命をも取てたび給へ、無習はぬ冥途の御旅唯<sup>さぐ</sup>々々  
と獨ゆかせ給ふかやと、天をあをき地にふして、悶え焦れて悲しみけ  
り、あかし申けるは、此由を急ぎ都へ申さんどて、申つかはしける、大納  
言とのは驚きまはしが程とにそ思ひしにかく成りけるかな、去なが  
ら廣く沙汰するなと仰ける北の方は聞しめし、御涙せき給へず、誠に  
思ひ餘りて身を投げけるこそ道理なれ、少將聞なばさこそ歎き申へ  
し、いかに包み候とも途には隠れよも有らじ、その時は少將をもうし  
なはん、憂き目を見ん事の悲しさよと、かきくごきの給へば、大納言は  
今更思ひあたり大息ついておはします、をさなき人は母上を尋ね物

をも参らず面<sup>おもて</sup>やせてましませば北の御方御覽じていとほしや、おど  
なくばいか計り歎きぬらん、おさなきとて何心なくた、母戀し戀  
しとばかり悲む事の哀れさよ、おどなく成りたらば、さぞみづから  
を恨へしと、涙にくれておはしけり、さて少將との三條にましま  
して、若草のはかなくならせ給ふをば、まろしめさず、さこそ若草の待  
給ふらんと、飛立つ計り思しめす、この程は夢見あしければ、心もとな  
く思しめし、雛に侍を召して、差當りて用の事有り歸らばやとておも  
ふ也、送りてたべと仰ければ、畏まり候と申、少將よろこひ急ぎ御所へ  
御かへり在て、わが御方を御覽するにみなく、戸鎖して人音もせず、  
胸打騒きつ、朝日に御尋あれば、若草は大殿の御計らひにて、何方へ  
か出給ふとの給へば、これはゆめかや淺まし、とて、我御方にかへり  
給ひ、幼き人のめのごを近付問はせ給へば、申べき詞なくして、たゞ泣  
き悲しみてぞ居たりける、おさなき人は少將殿に抱き付き、母上なし  
とて泣き給ふ、さても痛はしや、此子を振り捨て、出でんと思ふ心の  
うち、いかばかり哀しく有らんと、おさなき人を抱き給ひて、母はと御

長谷へ参るへし  
長谷は大和國なる  
長谷寺なり十一面  
觀世音ミ拾芥抄に  
載せり

問あればあちへと指をさし給へば、まことに消え入る心地にて、こ、  
かしこを御覽すれば御床に枕二つ並びて有に、若草の御手にて歌を  
遊ばしおきたり、さてもわれをうらみ給ひけんわれゆゑうき思をさ  
せ申事の悲しさよ、われ三條への事をそむき申せばおそれ有と思ひ  
仰にまたかひ候に、何のどがにより幼き者を引き放ち行方まらずな  
し給ふ、いかにもして行へをたつぬべし、今は佛を頼み申より外はな  
し、明日長谷へ参るべしと、左近の亟に仰つけられ、馬ごも用意仕れど  
の給ひ、少し眠ませ給ふに、春の野に露にまほれてましますを見るに  
若草にておはしけり、何しに斯る恐ろしき中に立ち給ふぞとの給へ  
ば恨めしげに御らんじてと、かふの物ものたまはず、かくとぞ  
君ゆゑに底の水屑となりはて、

逢ぞくやしき中の川水

とあそばし、そのま、消え失せ給ひしと御らんじて夢さめ打驚かせ  
給ひ、さては此世に亡き人と思し召し、いよく御心細くぞおぼしけ  
る、左近を御供にて長谷に御参り有て、三千三百三十三度の禮拜し終

夜祈誓し給ふ、願はくは尋る人の行へを知らせたび給へと、ねんころ  
に祈願し、曉がたに少しまごろませ給へば、御帳の内より氣高き御聲  
にて、汝がたつぬる人は恨み深くして身を捨て、今は此世にはなきぞ、  
とくく下向あるべしとて、

まら露はもとの雫と成にけり

やどりし草の原を教へん

とあらたに示顯まし、けり夢さめ打おごろき給ふに、身より汗流  
れけり、さては示現にて有り、もはや此世に亡き人と成けるかやと、御  
袖をしぼり、長谷を下向有、大佛に参りて上人に對面して、よろづ世の  
中にあぢきなき物語りし實に頼なき事はかりにて候へば、様を變へ  
んとのたまへば、聖泪ぐみて、されは世の中に物思ふ人こそ多くまし  
ませ、此程もやことなき上臈の参り給ひて、世にも心細げにて、佛に物  
を参らせて、様を變んと給ひしを、付き参らせし女房の制し申て、戒  
ばかり持ち御下向有しと語り給へば、少將不思議の思ひをなし、その  
人は何を佛に参らせ候ぞと問ひ給へば、琵琶と鏡と取出し是にて候

と見せければ、少將御覽するに、琵琶は若草諸共に手馴し琵琶なり、鏡は同じ影をうつせし鏡也、琵琶の撥はらに

朝夕に手なれし琵琶をたてまつる

みち引給へ月の都へ

またか、みのうらに

かけさひて今そ思ひのます鏡

うき後の世に曇あらすな

と若草の御手にて書き給へるを御覽して、佛の草の原を教へんと御示現在しは是成へしと、たゞ消えいる心地して、歎き給ふぞ痛はしき、もはや行えをも尋ねまし、恨めしき父母にも暇を乞ひ、又幼き者をも妹に預けんと思召、都へ歸り給ふ、宇治を御通り在に、小柴垣の内に、女の聲にて、何に命のなからへて、斯かる憂き思ひをせんよりは、ひとつ所にむかへ給へど悲しむを、あはちが聲と聞給ひ、左近に此内へ案内申せと仰ければ、あはち、誰なるらんと立ち出、少將とのを見つけ走り寄りて馬に取つき、泣き叫ぶ、少將どの馬より下り給ひ、いかに〜と仰

遣る方もなく思  
ななくさめ遣るへ  
き方のなきを云歎  
きの深きなり古歌  
に身にかふるもの  
なかりけりおさな  
子はやり方もなく  
哀しけれごもさあ  
り

手すさび反古さし  
手のすさびに何さ  
はなく言の葉なご  
な香置しなり

ける、まばしは涙にむせびて物をも申さずや、有てかやうに生きてまします人には、めぐりあひ候に若草はかやう〜の御有様にて、今は夢にさへたしかに見え給はずと、なきくどきけり、少將どの聞え召しやる方もなく悲しみ給ひ、若草のわりなく成し所を見んと、あはちを先に立て、宇治橋に御出有て御覽するに、たぎりて落つる白浪のみの凄すさましき有様なり、たとひ心健き者にて、思ひ切りて身を投ん事は難かるへし、まして女の身として身を投げし事、左こそ思に堪へかねて、我故かくは成りはてぬ、さまを變へ跡をも懸に吊らはんと思し召し、まづ都に歸り給ひ、若草の御手すさみの反故はらごもどり集めて、御手箱に入れておさなき人を抱き妹御前の方へまし〜て、此程と惑ひありきて若草のゆくへを慥かに聞届けてこそはんべれ、それにつけても斯る恨めしき方へ立歸らんとは思ひ侍らす、然れども幼なき者が、ち、は、にそはす侍るも心うし、御身に預けて心安すく修行せんと思ひて、是まで歸り候、今日より後は若草のかたみ、又は我等が紀念かたみと思ひ宜きにはごくみて給はれ、さて成人おとなしくなりたらば、此の反古を



身はならはしの  
古歌に手枕のすき  
間の風もさむり  
き身はならはしの  
物にぞありけるさ  
あるを引たり

てこそ参り逢ふべけれ、今は我身をも世に無き者と思し召した、佛を念じ浄土へ生れさせ給へと打笑み、まことに思ひ切りたる様にて申給へば、大納言は聞し召し、日來の恨みは我に免じ給ひて、今一度かへり給へ、御身を善知識として、親子三人一所におこなひ、浄土を願ひ候は、佛も嬉しと思しめさん、さなくば我も是にてさまを變へ、共に佛を願はんぞ仰ける、少將入道ごのは十月の事なれども、ころもの下に帷子一重めされければ、さぞ寒かるらんとて、大納言ごのめしたる小袖を脱ぎて参らせらるゝに、着給はず、身はならはしの物にて候、さむしとも思はず、この堂の下より落る水をのめば、物ほしきとも存せず、人に交はらんと思はねば、嬉しき事も悲しき事も無し、これほどに豊か成事を知らずして、今まであらぬ思ひに心を苦しめ候事か、なごの給ひけり、やう／＼其夜も更け、れば大納言ごの少將入道の傍にて少しまごろみ給ふ、少將入道思しけるは、これまでの心ざしは痛はしけれども、思ひ入たる道を妨げられんも、淺ましや、たゞ逃げばやと思しめし、左近入道と竊かに二人出給ふ、その時大納言ごの御ゆめに、

少將入道かくこそ、

極樂の契りぞ深き此世には

これぞかぎりの墨染の袖

と詠じて出給ふを、引止めんとし給ふを、引はなしにげ給ふと御らんにて打驚き傍を見給へば、少將はましまさず、あら口をしや、子にさへ是ほごに見捨てられ、今は存生へ何かせん、是にて右も左も成らんと悲しみ給ふ、御供の人々申けるは、御歎きは道理にて候、さりながら都にていかばかり待かね給らん、まづ御歸まし、く、御心次第に遊ばし候へとて、御輿に抱き乗せ、都に歸り給ひけり、北の方は此由を聞き召し、御心にさほごにおぼし召さぬ故に、逃し給ふらん、荒き風にもあてじと思ひしに、さやうに疲し候事の哀しさよとて、焦れ給ふ、大納言ごのは、惚々となり、はかなき世を悲しみてこそ、かやうの事をば爲出しつれとて、御様を變へ給へば、北の方も同じく墨染の衣になり、吉野のおくに入給ふ、さるほごにあはぢの局も様を變へ、山々寺々へ参り、若草の御菩提を懸に吊らひけり、さて少將入道ごのは、よし野の奥

惚々となり、恍惚  
さして百事を辨へ  
ざる如き衣なり、幾  
内の詞にほれと云  
るもこれなり

を逃出て、爰かしこをめぐり、秋風ものさびしく蟲の聲もあはれにきこえければ

秋風の身にしむものと思ひこし

蟲にも似たる草の原やど

どながめ給ひて熊野に参り給ひて、後の世をいのり給ひ、本宮に通夜し給ひ終夜我故身を亡ひし人の世の有様を示現し給へと祈念して、少しまごろみ給へば上人天降り、少將を拜み給ふ、こはいかに我こそ拜み申さんにとのたまへば、我はこれ宇治にて空しくなりし若草也、ふた心なく吊ひ給ふにより、變生男子と生れたり、御恩報んために拜み奉るといひて、雲井遙に上り給ふと御覽じて御夢さめぬ、左近に此由語り給へば、是ほどに祈り給はんに、神佛もなごか納受なかるらんと申せば、御悦びまし／＼けり、此山にて往生を祈らんとて行ひ給へば、三年と申す春の頃遂に往生を遂げ給ふ、紫雲空にたなびき、音楽耳にひゞき異香四方に薫じければ、左近入道有難く思ひ喜びの涙を流しけり、さて若草の姫君は、御年十一と申に攝政の御孫侍從殿の迎へ

熊野紀伊國にあり此の籠りしは那智山を云なるべく本宮は今の熊野座神社祭神伊邪那美命なり

させ給へば、母は若草の遊ばしおきし反古ども御身を離さず朝夕御らんじて、さて其後に渡り返して、父の仰をたがへず五部の大乘經を書きくらし給ふが、御夢に紫雲の内に母上とおぼしくて御聲ばかりして、

かきながすわが黒髪に浮びつ、

今ぞ蓮のうへに生る、

とかやうに聞え西へ飛行給ふと御らんじて、夢さめて御名殘惜しく思し召し、此由を祖母御前の御方へ御傳へあれば、今はうかび給へりと覺えたりと、御よろこびは限なし、さて吉野には峯の嵐烈しく岩つたふ水も心細くして大納言どの十念たしかにて大往生を遂げ給ふ、又北の方はその、ち四年すぎて、卯月なかばに無常の風に誘はれ西に向ひ手を合せて願はくは彌陀如來本願通り給すば先立給ひし人々と一つ蓮に導き給へと高聲に念佛し、遂に往生爲給ひけり、朝日御前は三位の中將殿の北の方とならせ給ふが、父母兄御におくれさせ給ふに御最期にも逢ひ給はず、女の身程はかなき物あらじと歎き給

十念 觀經に隨修遇之知識教稱十聲阿彌陀佛得生第九品さある是なり

これにつけても  
此物語は既に終て  
是より以下は世の  
教訓に作者の云る  
詞なり

ふぞ理ことばなる、是に付けても世の中の欲に限りなきは必ず家を失うな  
り又女の餘り短氣なるは、わが身を失なひ人を必ずそこなふ物也、む  
かし高野大師も、忍ぶに堪たるといふ二字を、三年までよくく學び給  
ふといへり、誰とても夢の浮世うきよに幻まぼろしの身なれば、唯何事も皆さきの世  
の報いと思ひ、心を流る、水の如くに、恨の塵芥さらりくとおし流  
し給ふべし。

かざらぐの娘





かさしの姫君

五條は京都の五條  
なり  
北の御方は妻室  
かさしの姫君がさ  
しは挿頭の義にて  
古は花などを髪に  
さしたるなかさし  
の花さいふこれに  
よりに名付けしも  
のなるべし

業平は在原氏文徳  
清和兩朝の頃文學  
に名高き風流才子  
なり

光源氏は源氏物語  
に見えたり

むかし五條あたりに源の中納言とてよろづにやさしき人おはしけ  
る北の御方は大炊殿の御むすめなり姫君一人おはします御名をば  
かさしの姫君とぞ申ける御かたちを見るに髪のかゝり眉口いつく  
しくて春は花のもとにて日をくらし秋は月のまへにて夜をあかし  
常に詩歌を詠じ色々の草花をもて遊び給ふ中にも菊をばなべてな  
らす愛し給ひてなが月のころは庭のほとりを離れがたくおぼしめ  
して年月を送り給ふ十四と申す秋の末つ方に菊の花のうつろひゆ  
くをかぎりなくなしきことにおぼしめしつゝけてうちまごろみ  
給へば年のほど二十あまりなる男の冠姿ほのかに薄紫の狩衣に鐵  
漿黒にうすげしやう太眉づくりのやごとなき風情はいにしへの業  
平光源氏もかくやとおぼしくて姫君によりそひたまへばひめ君は  
夢幻ともおぼえず起きさはがせ給へばこの人姫君の御袖をひかへ  
なごか露ばかりの御なさけもなからまじやとてなくく色々のこ

こしつたは既往の  
ことを云ふ  
きぬくは男女相  
遇うたる後朝ない  
ふ

どの言の葉をつくし給へば、ひめ君もあはれとやおぼしけん、夜半の  
下紐うちとけ給へば、かの人うれしくて、いとこしかた行末を語り  
あかさせ給ひけり、きぬくにもなりしかば、この人ひめ君にうちむ  
かひて、またの夜は必とてなくく

憂きことをしのぶるもとの朝露の

おきわかれなんことぞかなしき

ときこゆれば、姫君、

未までと契おくこそはかなけれ

しのおがもとの露ときくより

まれ人は客人なり  
御名を知らせ給へ  
古は男女相合ふこ  
も初は互に名を語  
らぬ風俗なりしな  
り

と、互に言ひなかし給へば、まれ人は離のほどりへゆくを見へて、おも  
かげもなし、さてかざしの姫君はいよく、不思議の思をなし給へど  
も、人にとふべきたよりもあらねば、心ならず、それよりして互の御契  
あさからず、忍びくにかよひたまへば、いつとなく日敷をすごし給  
ふほどに、あるとき姫君おほせけるは、今は何をかつ、み給ふらん、は  
やく御名をしらせ給かしときこへ給へば、この人はづかしげにて

花そろへば歌合の  
類の合せものにて  
花を出し合ひて優  
劣を評することな  
るべし

西の對は母屋の四  
の方にある別殿な  
り、姫君の住み給ふ  
所を見ゆ

このあたりに少將と申しはべる物なり、後には定めてしろしめすべ  
しとて、歸り給ひぬ、そのころ朝廷には花そろへありとて、人々をめさ  
れければ、中納言殿も参り給ふ、みかど中納言を近づけ給ひ、よのつね  
ならぬ菊の花そろへ奉れど、繪言あらせ給へば、ちからなくして中納  
言菊をたてまつらんとて、かへられけり、さて少將は、その日の暮方に、  
西の對むかひに來り給ひて、いつよりもうちしほれたるありさまにて、世の  
中のあだなる事ども、かたりつゞけて、うち涙くみ給へば、かざしの姫  
君、何とやらん御物思姿見えさせ給へば、いかなる事をおぼしめしわ  
づらひ候ぞやと、よもすがらきこえさせ給へば、今は何をか包み候べ  
き、見えまいらせん事も、けふを限となりぬれば、いかならん末の世ま  
でと、おもひし事を、みないたづらごと、なりなん事のかなしさよと  
て、さめくくと泣きたまへば、姫君もこはいかなることぞや、御身をこ  
そ深くたのみ奉りしに、みづからをは何となれとて、さやうにはきこ  
えさせ給ふらん、野のすゑ山の奥までも、いざなひ給へかしとて、聲を  
惜しまずかなしみ給へば、少將も心にまかせされはとて、とかくの詞

髪を切りにて髪を切りて證さずこそ此頃の風俗を見るに足るべし

しのひの下に脱文あれども今類本なくして詳ならず

めのみは乳母

かんなき巫祝なり此頃占卜の事は神主にてなしたりと見ゆ

もなしや、ありて少將涙のひまよりも今は、や立ちかへりなん、あひかまへてくおぼしめし忘れ給ふな、みづからも御心さしいつ世に忘るべきなんといひて、髪をきりて下給したる薄様におしつ、みて若おぼしめし出でん時は、これを御覽せさせ給へとて、姫君にまゐらせて、また胎内にも、みどり子をのこしおけは、いかにもくよきやうに育て給ひて、我かたみともおぼしめせとて、なくくいで給へは、姫君も御簾の外までしのび、あづけおきいづくへとてかおはすらん、今一たび見え給へとかなしみ、たゞならぬ御身とはてしまで思ひなげき給ひけり、今はなやましくならせ給へは、めのだいかにと悲しみて、母上にこのよし申ければ、中納言殿もさわぎたまひて、いろく、にいたはり給へども、そのしるこそなかりけれ、めのだいかなきの方へゆきて、御年十五にならせ給ふ姫君の、長月つこもりの酉の刻よりいたはりつかせ給へるは、いか、候べき、考へて給はり候へと、きこへしかば、神主申けるは、なにもはかりがたく候、若たゞならぬ御身にてやおはすらん、いかさまにもあやうき御占にて候とありし

對の屋即前におりし西の對なり

御すつたを以下乳母の詞なり

あさましくはあきれる意

うちまわりは榮内にて天皇の後宮にもそなへ奉らんとの意  
かいしやくは介抱する意なり

かば、めのだ不思議の思をなし、いそぎかへりて母上にかくと申されければ、北の御方おほせけるは、みづからも然様には見なしてありしかども、さやうの事はあらじとおもひはんべれは、言ひいてん事もさすがにて、若又いかなる事にかありけん、よくくすかして問ひ給へと、きこへければ、めのだ對の屋に参りて、御すがたを見参らすに、たゞならぬ御ありさまとおぼえて候ぞや、みづからに何をか包ませ給ふべき、御心の内しらさせ給へかしと、こまなくとさ、やきければ、姫君おぼしめしけるやうは、とても忍びはつべきことならねば、語らばやとおぼしめし、はづかしながら、はじめおほりの事どもを、のこりなくきこえければ、乳母あさましく思ひけり、さるほどにめのだ北の御方へ参り、ありのまゝに申ければ、中納言殿もきこしめし類なくあさましき事かな、うちまわりの事をこそ、あけくれ思ひしに、さてのみやまん本意なさよとて、うちすすみ給ふ、さるほどにやうく、月日もかさなりければ、内々御産所をはじめて、女房たちあまた介錯申ければ、實にいつくしき姫君出き給ふ、めのだうれしくおもひ、やがて御産湯衣

まゐらせて申されけるは、人々も見たまへ、母姫君も御覽せよ、これにつけても、御命ごのみことながくよとて、母姫君にさしよせ給へは、ひめ君見やり給へば、いまだあやめもみえさせ給はねども、かゝやきいつくしく、御顔ばせ、父少將にすこしもちがはせ給はねば、そのとき姫君かくぞ詠じ給ふ、

夢ならばゆめにてさめてあさましや

こはいかなりし忘れ形見ぞ

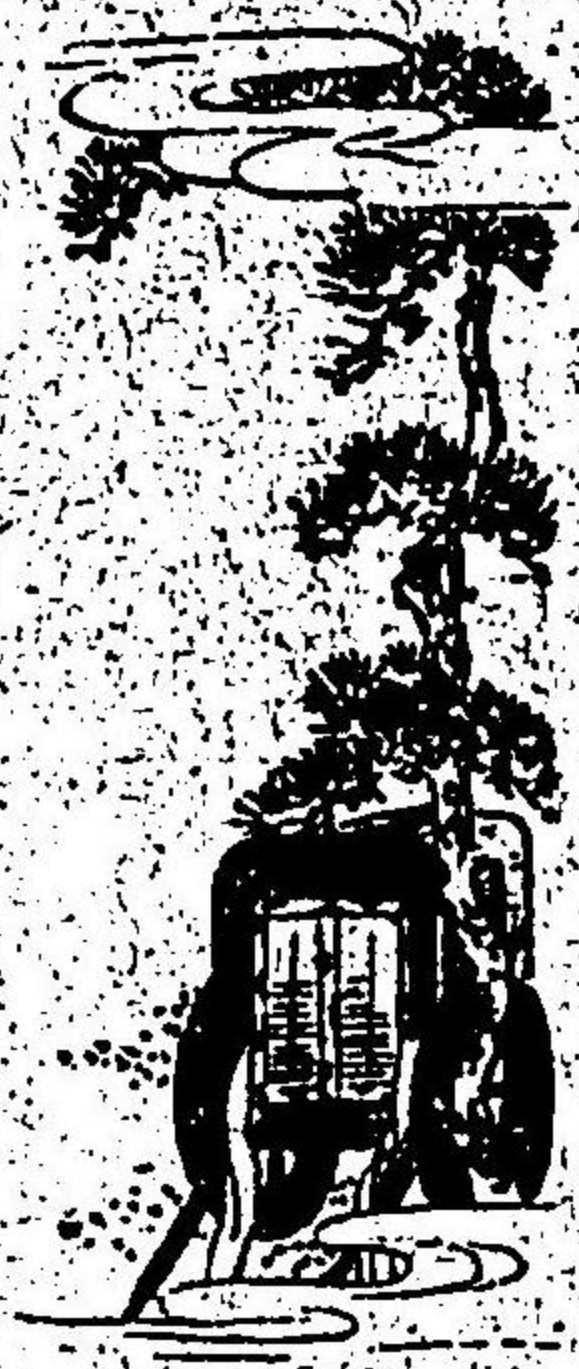
とて、御涙をながし給ふ、さるほどに北の御方きこしめし、あらうれしのことどもや、いそぎ中納言殿に見せ参らせんとありしかば、母ひめ君おぼしめしけるやうは、あらはづかしの事どもや、親の身にても、さこそあさましくおほすらめ、これにつきても少將殿命をめせとぞ、かなしみ給ふ、さてあるへきにあらされば、ものと姫君を抱き給ひ、北の御方もろ共に、中納言殿御覽して、あらうつくしの姫君やとて、やがて御袖にうつし給ふ、御いとをしみかぎりなし、かくてつながぬ月日なりければ、七歳にて御袴ごはかま著せまゐらせ給ひけり、日敷をふるほどに、ほ

御袴ごはかま著せは御裳ごも著べし  
のこさなふなる

どなく十三にそならせ給ふ、眉目めめ容かたちのいつくしき、唐の楊貴妃漢の李夫人我朝の衣通姫小野小町なんとも、これにはよも勝らじとて、人々申けり、さるほどに君きこしめされて、女御にそ定まりける、中納言殿も、北の御方母姫君もろともに、御喜はかきりなし、さても御門ごかど御寵愛はなはたしくこそきこえけれ、いよく淺からぬ御心にも、かなひ給へは、ほどなく若宮姫宮うちつゝ、さいてき給ひて、まことにめてたき事にぞ人々申けり、あまりにふしきなるためしなれば、するの世までの物がたりにかきおきはんべるなり

常盤のうは

○新編御伽草子



### 常磐のうば

大和國に、常磐の姫といふ人侍りける。樂み榮えて過けるが、年頃の翁  
におくれて後子共あまた有けれど、もよろつ心にしたがふことぞな  
き。なほ年つもり行まゝに、思ふやう過にしかたはさて置きぬ。老の末  
こそ悲しけれ、柴の編戸の明くれに、つもれる罪をもしらずして、空し  
く年月すきゆかば、我後世をいか、せむ。朝には世路にほこれとも、夕  
には我となく白骨にいたる身をしらすして、赤白二つの腸の蟠れる  
をたとふれば、毒蛇にかはらぬ風情かな。紅粉翠黛に頭を色とりて、男  
女和合の愛欲は、臭きかはねをいたけり。死骨を焼ぬれば、白骨となり  
て野にしやれぬ。皮肉の間に亂散して、刹那のほとに離散する。惡業容  
をあらはして、正しく劔に身をさきて、刀の林にかはねをきる。紅連大  
紅連の氷に閉られて、焦熱大焦熱の焔に咽はむ事のかなしさよ。うき  
身のほどを觀すれば、岸のひたひの根をはなれたる草程もなき命を、  
物にたとふれば、江の邊なる捨小舟、係る無常をおもふには、若く盛の

赤白二の腸これに  
佛説にある譬喩な  
り

○常磐のうば

身なりともいごひはつへきあたし世をましてうばらが老の身の、か  
 しらには雪をいた、き眉には八字の霜をおき顔には四海の波をた  
 りみ、目には霞を立籠て耳もきこえず口かはき息はあらくて齒は落  
 め、こしは梓の弓をはり立居る姿の恥しや肌はあらくて膝よわくた  
 ふれかちなる佗しさよかひなき命なからへて、子どもにみゆるもは  
 つかしや念佛申て死なはやと、嫗は俄に思ひ立願ふ衆生を迎へたら  
 むと、譬ひをたて、おはするか誠さもあらは嫗がしわざを御覽せよ  
 といふま、に手水うかひするよりも西にむかつてふしをかみ、南無  
 や西方彌陀如來、嫗を極樂へ具してゆきよからむ縁をたつねつ、あ  
 りつけ候へ彌陀佛、夜と、もに念佛すれば咽かわきて、かなしやな、あ  
 らお湯ほしや、彌陀佛湯ても水ても少したべ、是につけても急きつ、  
 淨土へ疾して參らはや、あみたよくとよば、れと、惣して佛のおは  
 せぬか、佛の耳のきこえぬか、嫗等か聲の及ばぬか、人爲ならぬ嫗をお  
 き、他人をばしむかへたまふなよ、世の人往生するときくならば、うは  
 にはなかくうとまれて、えらせ給ふな、彌陀佛といひければ、子どもは

伯瑜過ありて母に  
 答うたれし時母の  
 力弱くなりて痛少  
 きを嘆きしこと説  
 死に見えたり  
 木を刻み丁蘭とい  
 ふ人母の死を木に  
 刻みて之に孝ふに  
 如くせりこの事の  
 子傳に出てたり

是を聞からに、あはれなるとはいはずして、にくみけるこそおかしけ  
 れ、うはか念佛申きけ、極樂淨土にせきあらし、高聲せずと骨不折に、心  
 の内に申せかし、あなかしましや、年寄のよなく、この高聲やとて、  
 申せとす、むる子はなくて、制する事こそ悲しけれ、おのれらあまた  
 そだて、は、老の行末か、らむと、樂しきことは飛鳥川、明日をもえら  
 ぬ此の嫗を、哀とおもはぬかなしきよ、朝夕付添ひあつかへといは、  
 こそ憎からめ、十日に一度いかなれば、か、る齡の老の身を、なとかみ  
 るめのなかるらむ、昔の伯瑜は其打杖のよわき事を悲しみしそかし、  
 況やまさしく木をきさみ母の容と見し事も、今更哀そまさりける、父  
 母恩重經のことわりを、哀子共に聞せはや、父を害せし惡王はむかし  
 もためし有しかと、母の乳房の恩愛を、いかて愚におもふべき、斯はお  
 もへと、これも又、子共のためをおもふなり、唯彌陀をこそとなへなめ、  
 さても老後のならひとて物ねかひこそ隙なけれ、子共か所はちかけ  
 れと、よふことなけれは南無あみた、あらさひしさ悲しや、南無阿彌陀  
 佛、酒かなのまん、あら腰いたや、膝いたや、のとかはきや南無阿彌

なかしきことをねむしつ、  
むしつゝねむする  
は堪へ忽ふことな

ひめにしてひめは  
姫飯さて今の粥の  
類なり今俗にひめ  
糊さいふひめも此  
ひめに同じ

はしは齒ぐきの  
ことなり

かいもちひ今いふ  
蕎麥れりの事なり  
と中島廣足の説な

陀佛く、子共はいか、並居つ、をかしきことをねむしつ、  
をきかむとて耳をたて、そ聞にける、いもかな食はむ、  
やはく、と、柿かな食はむ、あまく、と、やきたる餅のさねもなきを、  
是飴にからみてくは、やな、白米かなひめにして、湯をものまばや、  
しなく、とゆや柑子橋けん、  
柿、栗、柿なつめ、梅、李、林檎や梨やくは、やな、  
枇杷や山も、山いちご、  
榎の實を拾ひ食は、やな、  
あちきなやあをのり、  
和布くひたやな、  
齒は落うせてなければ、  
ま、  
を、  
持てあいらひ、  
も、  
と、  
きり、  
昆布がなまはぶらむ、  
あを、  
海苔あま、  
海苔とつさかのり、  
よ、  
ろ、  
つ、  
の、  
海草くひたやな、  
南無阿彌陀佛く、  
あらくるしや、  
山の物にとりては、  
野老早蕨くすの根、  
松茸ひらたけ、  
なめす、  
き、  
かのま、  
た、  
椎茸ま、  
めり、  
た、  
け、  
くり茸ねすみて月よたけ、  
までもくは、  
やな、  
扱また魚のほしき事、  
たとへむ方もなかりけり、  
鯉ふなわか、  
鮎鱈うくひ、  
ふり、  
鯛鱈いかめしく、  
思ひのま、  
に、  
食はばやな、  
ま、  
鳥兎まみ、  
貉かはいぶりにして、  
くひたやな、  
鮑や榮螺にし、  
蛤もあらほしや、  
さのみいふもは、  
つ、  
か、  
し、  
や、  
か、  
ひ、  
も、  
ち、  
ひこそいづれより、  
片時へむしもわすられね、  
あらあちきなや、  
南無阿彌

陀佛、念佛申身なれとも、  
く、  
う、  
の、  
文、  
字、  
が、  
絶、  
せ、  
ね、  
は、  
せ、  
つ、  
の、  
ほ、  
う、  
と、  
も、  
い、  
ひぬへし、  
若くてのみし、  
茶もほしや、  
茶のこも更に忘られず、  
せい、  
せん、  
温鈍、  
饅頭ひやむきうむさう、  
羊羹あふらもの、  
ひ、  
き、  
ほ、  
し、  
い、  
り、  
つ、  
け、  
う、  
け、  
こふくは、  
やな、  
古喰ひし物ともわすられば、  
こそ、  
彌陀佛、  
南むあ、  
み、  
だ、  
佛く、  
子供あまた有けれども、  
と、  
ふ、  
ら、  
ふ、  
事、  
は、  
あ、  
ら、  
は、  
こ、  
そ、  
何、  
し、  
に、  
子、  
供、  
をそ、  
だ、  
て、  
置、  
今、  
は、  
恨、  
の、  
種、  
と、  
な、  
り、  
け、  
む、  
う、  
ば、  
ら、  
か、  
若、  
く、  
盛、  
り、  
な、  
り、  
し、  
時、  
子、  
供、  
か幼くありつるに、  
願ふことはなければ、  
も、  
ほ、  
し、  
さ、  
う、  
な、  
る、  
物、  
を、  
は、  
尋、  
ね、  
求めてくはせしに、  
う、  
ば、  
ら、  
が、  
か、  
ほ、  
ど、  
願、  
ふ、  
に、  
は、  
あ、  
れ、  
ど、  
も、  
憎、  
き、  
く、  
れ、  
は、  
こ、  
そ、  
子、  
供、  
お、  
も、  
ひ、  
し、  
心、  
さ、  
し、  
の、  
か、  
た、  
は、  
し、  
ほ、  
と、  
も、  
思、  
へ、  
か、  
し、  
九、  
夏、  
三、  
伏、  
の、  
夏、  
の、  
日、  
は、  
枕、  
を、  
あ、  
ふ、  
ぎ、  
て、  
乳、  
を、  
ふ、  
く、  
め、  
涼、  
し、  
き、  
風、  
を、  
子、  
に、  
あ、  
て、  
、  
玄、  
冬、  
素、  
雪、  
の、  
寒、  
き、  
夜、  
は、  
濡、  
た、  
る、  
床、  
に、  
我、  
は、  
寝、  
厚、  
き、  
衾、  
を、  
子、  
に、  
は、  
き、  
せ、  
風、  
を、  
も、  
あ、  
て、  
じ、  
と、  
い、  
た、  
は、  
り、  
し、  
に、  
斯、  
る、  
恩、  
を、  
は、  
忘、  
れ、  
は、  
て、  
、  
軀、  
を、  
ば、  
よ、  
そ、  
に、  
な、  
し、  
は、  
て、  
、  
人、  
す、  
ま、  
ぬ、  
所、  
々、  
に、  
お、  
し、  
こ、  
め、  
て、  
ひ、  
こ、  
ら、  
か、  
憎、  
む、  
も、  
わ、  
ひ、  
し、  
き、  
に、  
ど、  
く、  
し、  
て、  
淨、  
土、  
へ、  
ま、  
へ、  
ら、  
は、  
や、  
灯、  
火、  
に、  
よ、  
る、  
夏、  
の、  
む、  
し、  
笛、  
の、  
音、  
に、  
よ、  
る、  
秋、  
の、  
鹿、  
其、  
外、  
地、  
を、  
か、  
け、  
る、  
獸、  
鳥、  
ま、  
で、  
も、  
子、  
を、  
思、  
ふ、  
こ、  
そ、  
よ、  
し、  
な、  
か、  
り、  
け、  
り、  
淵、  
に、  
も、  
瀬、  
に、  
も、  
身、  
を、  
な、  
げ、  
て、  
死、  
な、  
は、  
り、  
ひ、  
こ、  
ら、  
は、  
曾、  
孫、  
等、  
な



やと思へども、廣大慈悲の釋迦たにも、八十一にて入滅し給ふ、うはら  
 か九十にあまるまで、いきたるもげに耻もなし、まひけふ無碍の理を  
 説し、文珠の智慧もおどらしなり、さうむけんの經をどく、普賢菩薩も  
 餘所ならず、子供にくむもことわりなり、かくはおもへど酒ほしや、鯉  
 かな鯉かな煮てくはむ、秋の夜ながき夜もすから、春の日ながきひね  
 もすに、片時へんしもわすれず、まごろめは夢に見え、覺れば面影にた  
 ちて物ほしや、よふか〜と待けれど、も、そらまらずして過ぬれば、嵐  
 木からし身にしみて、えそこらへねはうちふしぬ、あしけの馬にはあ  
 らざれど、またはみかへり〜足手も強く成ほどに、一日に百里も千  
 里も行つべし、かくうらみて思へども、子共や孫があるならば、虎ふす  
 野邊のはてまでも、なとかありきてゆ、かさらむ、おく齒も牙もまたあ  
 れば、青梅かち栗くひつべし、めみせてきかせむ人あらば、さうかうた  
 ふべし、燈火くらき陰にても、こはりのみ、も入つべし、人の誹謗を思  
 はずば、竹馬に鞭をうちぬへし、あまり居たるもわびしさに、まさりか  
 ほなる風情にて、門へあそびに出たれば、わらは冠者原くわんしやとつと笑ふぞ

さうは唱歌なるべし

こはりのみは小針の穴に糸を通すことなるべし

やあらくるし、南無阿彌陀佛〜といひつ、姫は大きに腹をたて、  
 猿樂田樂が物くるひのやうにと言ひて立ちかへり、盃の水にうつり  
 たる、姿をみればけふもまた、おそろしや鬼のひほしにことならず、佗  
 人のつくりしにあらねども、まばらに見ゆる麻衣、さてもかひなしと  
 音をそなく、柴の編戸に立歸り、思ひの涙を流せども、哀と、へる人も  
 なし、南無阿彌陀佛〜、賤のを手巻くり返し、むかしは今にかへらね  
 ども、思ひ出てもかひぞなき、過にし源氏の大将の、わりなくしのびし  
 藤壺の、今いくよとか恨けむ、かしは木の右衛門督、みすもあらず見も  
 せぬ人をおもひそめ、およはぬ枝の色ふかき、身をいたづらになしは  
 てて、おきてゆくいづくの露とまよひしに、空にうき身の消ぬらんと  
 の玉ふ聲を聞きして、出にしほどの魂も、身をはなれてや御袖に、どま  
 りぬらむとしたひける、其曉のきぬ〜の思ひにも劣らしな、今の姫  
 らか念佛となふる心のわりなさは、人しれずのみ恨みわひ、又或時は  
 むさしの、草葉の露ぞ身をやとす、ひとかたならぬ大麻の曳手あま  
 たの、其中に、伊勢齋宮の御事は、ねひとつはかり月影に、丑みつまでの

源氏の大将光源氏の藤壺の女御に通すこと源氏物語に見えたり

伊勢齋宮在原業平の故事伊勢物語に見えたり

薰大將これ源氏物語に見ゆ

御契り君やこし我や行けむの返事かきくらす心のやみにまどひに  
 きと、かたみにかけてし御情に、阿彌陀も姫等をおもへかし、薰大將のし  
 けみをわきて、たつねとへりしなきの人、そのかたしろにするおきし  
 匂ひもかほるをわかすして、契りそめにし曉の、立はなれなはしぬへ  
 しと、情をこめて橘の小島が崎の舟のうち、川よりをちの中やざりの  
 ざけきほどの春の日に、みれどもあかすかたらひて、終にうき身は兎  
 道川の底の水屑とおもひ立、涙に沈みし夕暮も、姫等が袂におどらし  
 な、酒ほしやのさかにはさきや、霞を分て行鷹も、秋は歸るならひあり、嵐の  
 風にちる花も、又こむ春のたのみあり、さてしばらくと、まらぬは、有  
 爲轉變の喩かや、さてもかひなき黒髪、今年は白くなり、にけり、宵の  
 鏡を今朝みれば、老ほごつらきものあらじ、過にし昔を思ふには、さな  
 がら夢の心ちして、ねられぬ夜半の手枕に、落る涙ぞと、まらぬ、うは  
 か盛のかたちをば、嵐になびく女郎花露にしほる、瞿麥の、木高き峯  
 の藤のはな、霞の中の樺櫻、谷より出るうぐひすの、羽風に靡く青柳の、  
 まゆのうちなるしら菊の、うつろふほどの、秋冬の、さかりの露のこぼ

たいなんさんは未考へす

けいしやうほくはは上牧馬なるへし二つともは琵琶の名器なり古事談に見えたり

またうつは下靴にて履のこまなり

ひらかけ平足駄の類にや

れたる、夕に思ひ出るといひしものを、盧橘によそへても、昔おほゆる  
 かたちぞと、さすがに人目や見るめそよ、今は子共に憎まれて、花にた  
 とふる人ぞなき、春の花とも身をおもひ、秋の月とも光をあらそひし  
 身を、今は子共に憎まれて、闇のにしきに異ならず、姫等が若くありし  
 時、人をもこひつ戀ひられつ、または心盡しの人々は、業平實方光君、大  
 内おほやけへもめされつ、玉の床にもねしものを、長生殿の夜半に  
 出比翼連理の契りまで、後世かけてかたらひし、そのいにしへもわす  
 られず、咸陽宮にあらねども、窓うつ雨ぞかなしけれ、小野小町が衰へ  
 しに、かはらぬ姫が有様に、百官萬民こそく、あふかぬ人もなかり  
 しに、玉樓金殿の床の上にして、かしたつかれ、月卿雲客にうやまはれし  
 も、唯夢とのみぞ覺ゆる、たいなむさんの春の花清涼殿の秋の月、けい  
 しやうほくはの調まで、物あつかひはせしぞかし、からなしみ、なし  
 高足駄沓やしたうづはきしかど、今は子共にか、ればこそ、ひらかけ  
 をだにみつつけえず、經細高麗綾錦、毼の筵もしきしかど、今は子共に  
 くまれて、破れむしろに臥したれば、あらやいぶせや身もいたや、狐の

皮かな、二三枚責めて、鮎の皮もかな、たとへ鼠の皮なりと、えさせたり  
せば宵ごとに背中ばかりにあて、ねむ、朧月夜にあらねども、しくも  
のみなき姿かな、ひしきものには袖をして、葎の宿に寝もしなむ、小野  
小町にあらねども、みつから野へにやおくらまし、いや／＼わかれし  
娑婆世界、これもおもひて何かせむ、阿彌陀佛の左右の弟子、観音勢至  
菩薩たち、姫を導き給へ、南無阿彌陀佛と唱へつ、高座にのぼり念誦  
して、西に向て伏拜み、やがて臨終正念して、紫雲忽棚引て、音楽空にあ  
らたなり、華降り異香薫しつ、往生疑ひなかりけり、後の世までも書  
と、めける、ときはのうはこそめてたかりける／＼、

小ねちぢな

小 お ち く ぼ  
開 題

これの原寫本に百華翁といふ人の跋文あり、それにいふ、ふるくおちくば物語とて四帖あり、これはさうしもちいさき故に小おちくほといふゆゑり、とりかへはや、濱松の中納言などいふ物語は、ふるく作りたるはうせて、後につくりあらためたるか、世にはのこれるに、此草紙はふるきも後につゝれるも、ともに残りて、いときなき人々のもてあそびくさにし侍るものならし、し初年の時、ふる後達のよみて、さかせ侍りしは、四帖の本にもあらず、この小おちくほにもあらず、別本と見えたり、なと記したり、さらはおちくほと名つけし物語は、すへて三種ありと見ゆ、されど、その後の人の偽作といふにはあらず、なほ摸倣の作のみ、この小おちくほ、まことの小おちくほながら、この頃の手より見るべきものなるべし。

小 お ち く ぼ

中昔の事にや、明日あすをか、澤野の中納言と申人おはしけり、世の中ゆたかにて、君の御おほえもいみしく、時めき給ふ、北の御方は大臣の御娘にてぞおはしける、やんことなき御あたりにて、年月をすくし給ひしか、されどもいかなる事にやありけん、いまた若君にても、姫君にても、一人も御子まします、中納言も北の方も、明暮歎き給ふ事かぎりなし、ある時めこの侍従北の方に語り申やう、六角堂の観音は、靈佛にておはします、歩あゆをばこびて、祈誓いのちかなし奉るに、しゆしやうの心にしたがひて、願ねがみて給ふとこそうきたまはれと申ければ、北の方、うれしき事をもきかせつるかな、我も此年ころ思ひよりぬ、さらばとて、忍びやかにめのとばかりを具たしたまひて、六角堂にそまゐられける、御前にてさまゝ祈誓いのちかましゝて、内陣のかたはらに局しつらひ、七日通夜したまふに、まんする夜の曉の夢に、御戸代のうちより、こがねの箱をたまはりしを、北の方の袂に納めたまふと御覽して、夢さめぬ、めて

たき御夢なれば、よにたのもしく下向し給ふ、其のちいくほともなく北の方た、ならぬ御身とならせ給ふ、やうく日敷をふる程に、いさゝかの惱もなくして、御産のひもを解き給ふ、とりあけ見給ふに、ひかるほどの姫君にてそおはしける、中納言殿よろこひ給ふ事かきりなし、めのと介錯の女房、あまたつけまいらす、かしつきそたて給ふほどに、日にそひてうつくしく、おいた、せたまへり、しかるに生死無常のはかなきならひなれば、姫君のおとし七歳にならせ給ふときは、北の方例ならすなやみ給ふ、かりそめの心にやとおほしつるに、日を経ておもらせたまふほどに、中納言殿驚きかしつき、かなしみ給ふ事かきりなし、北のかた今をかぎりそやおほしめしけん、めのとにたすけ起され、中納言殿にむかひて、泣々の給ふやうこそあはれなれ、身づから此度必むなく成り侍るへし、我なからん跡にても、かまへて姫君の御爲に、あらくわたり給ふなよ、これのみよみちの隙となるべしと、かきくごき給へば、中納言殿御身ひとりの子にてもなし、我も親にて侍れは、いかてかあだにはあたり侍へき、心やすくおほして、とく佛の

おさなしきは成長  
せし人の義

此歌誤字ありて意  
通せず

御名を、心にかけて念し給ふへしと、のたまへは、北の方よにうれしげにて、さて姫君の何心もなう乳母うぶの膝にあそひて、おはしつるを、よひてかきいだき、髪かきなで、おとなしき人にいふやうに、泣々かきくごきのたまふやう、君をは六角堂の観音にあゆみをはこびて、まうけ侍りしなり、しかれども、浅き契にや、祭たまはん行末をも見届けすして、うちすて空しくならん事こそかなしけれ、われなからん跡にても、我をこひしと覺しめさは、この観音のお前にて、我後の世をも祈てたまはれ、かへすく、なこりをしくこそ候らへとて、

すゑかものまたいてた、ぬふりすて、

いかになりゆく我身なるらむ

と咏しつ、南無あみだ佛くと唱て、つひにはかなくなり給ふこそ哀なれ、姫君はみつからをすておき、只一人ひとりいつくへ行かせ給ふそやと流涕なみだこがれ給ふそいたはしき、中納言殿は、同しみちにともだへこがれ給へとも、姫きみの行末のみ思ひやられて、かひなき露の身のなからへ年月をすぐし給ふ程に、さてしも、心安からぬならひなれば、又

北の方をむかへたまへり、姫きみの御ことをは、かの母上の心苦しけにのたまひおきしを、わすれがたくおほしめし、よろつにつけて、いとほしみたまひ、あらしき風にもあてまじきやうには、く、みたまへとも、今の北の方おはして後は、御心もま、ならず、おぼしけるま、母の何かにつけて、つらくあたりたまふよしをきこしめして、いつしか年もゆきたまはぬ人にかやうに物をおもはせ奉る、草のかけにて、さこそつらく恨み給ふらめ、我が御あたりにて、そたてまゐらせ、朝夕影をなりともみたくおほしつれとも、ま、母のはさんにて、よろつ隔つるやうにしたまふこそ口惜しけれ、中納言は御心になはぬありさまを見給ひ、人しれぬ御歎きに、御袖のかはくまそなかりける、かくて年月うつりゆくほどに、今の北の方の御腹に、姫君二人若君一人ぞいでき給ふ、北の方寵愛したまふ事かぎりなし、中納言はこの公達につけても、大姫君の宿世のほど、いとほしくて、人しれず涙くみ給へり、日にそへて、おひたち給ふほどに、大姫君のうつくしくあいきやうつきて、かゝやくやうにおはしければ、繼母の我子いとほしきにつれても、大姫

をいさゝにく、ぞ思ひける、辰己の方に一間なる所のありけるを、板敷をさせて、そこに住ませ給ふほどに、人落窪の姫君とぞ申ける、姫きみはあさましき名をいはれ、耻かましき目みんよりは、ごくしてわれをもむかへとり給へど、なげき給ふぞいとほしき、

日にそへてうきのみまさる世の中に

心つくしの身をいかにせん

世中のつらき折々は母うへのいまはの時、のたまひおきしことのはを、おぼし出て、観音のみなをとなへ給ひなごして、あかしくらし給へり、その頃殿下の御子に、二位の中將殿と申て、やん事なき人おはしけり、色にふけりおはしつ、いまだ御臺所もむかへたまはねば、父母御心ぐるしく思しめす事かぎりなし、いかならむしづのめの子なりとも、御心だにいり給ふ人あらばと、尋たまへども、遂に御目うつる方もなし、中納言の大姫君は、かたち世にすぐれたるよし、きこしめしければ、中將忍びつ、御文ありけり、藏人の大夫かのおちくぼの御方にまゐり、めのとを近づけて御文をまゐらせけり、姫君ひらきて見給ふに

薄様のこがれたるに詞はなくて、

きみありとさくに心をつくばねの

みねと戀しきなげきをぞする

姫ごみは世の中のつらき事のみ、あぢきなくおぼしけるに、又かゝる  
わざ漏れ聞えなば、いか計のうきことかき、とくらんと、うつ、なく  
て、ひきかつぎふし給ふ、めのと申けるは、これはたゞ人にてもおはし  
まさねば、中納言殿きこしめし給ふとも、くるしからぬ御事ぞかし、あ  
また人々おはします御中に、思はれたまふ事、ひとへに観音の御ひき  
あはせにてこそ、たのもしく候へば、先一筆の御返しあれかしとて、硯  
紙さしあげ、れば、姫ごみいとはづかしげにて、

ほに出ていふかひあらば花す、き

そよとも風のうちなひかまし

いかにして洩れけん、繼母此由をき、つけ、ねたく思ふ事かぎりなし、  
あはれ我きん達には、かやうの事もなくて、なんぞやあの落窪のあさ  
ましき體にておはしつる人にと、いとゞにく、思ひて、中納言殿にあ

しごまにいひて、家のうちもいたさばやとおもひつ、まことや落窪  
のかたへは、卑しきもの、入り来て、耻かましき事あるとなり、誠なら  
ば制し給へ、我いふ事をば聞給はぬなれば申なり、よの公達のおもふ  
せなりと、にくげにのたまへば、中納言さはあるまじけれども、我にう  
とませたさのあまりにこそと、いとゞ哀にて、姫君のもとへ立より、め  
のどをよび出して、しかゞのどを人のしらせつるは、よもさはあら  
じと思へど、ついでに申出るなり、誠にてはよもおはせじ、よくゝか  
しづきまいぬせ、人笑にならぬやうにせらるべし、母のいひ置し事も  
忘れねば、姫君の御事も、いとほしく、朝夕けぢかくて見まゐらせたく  
思へども、心になはぬ世の中にて、うちすぐれば、乳母をはしめて、う  
とみまゐらす事のやうに、つらくこそ思ふらめ、忘る、聞もなきぞ  
よとて、ふししづみたまへば、是はたゞま、母御前のいかにもして、う  
しなはせたくおぼしめすさまに、いひなさせ給ふ成べし、いかでかや  
うの御事の侍らむ、是につけても、姫君の御宿世のほどこそ、いとほし  
けれとて、なきしづみけり、六角堂の観音はあらたにおはしませば、姫

ぎみをいのりてまうけしなり、つれ／＼にておはしまさんよりは、かの御堂へまゐらせたまひて、祈りを申たまへかしと、なにかの事まで、こまかに語り給ふ、めのはかへりつ、姫君へかくと語りければ、いとゞきえ入る心地して、ひきかづきてぞふし給ふ、かくまう／＼としておはせんよりは、かの御堂にもうで給へかし、御心をもなぐさむにこそと申ければ、さらばとて牛車さはやかに、めのと、たゞ二人ぞ、まうでたまひける、その留守留守のおりふし、又二位の中將殿より、御文もちてまゐりて、落窪にて尋ねまゐらすれば、繼母き、て、姫君はしか／＼の事ありて、人にぬすまれ、行方しらすなり給ふと、虚言虚言つくりていはせけり、中將殿これは夢かや、いかにせんと、そゝろに心に思ひみたれ、狂亂の心つきて、いづくともなくうせ給ひぬ、まゝ母是をき、よくこそたばかりすましたれと、心ちよげに思ひけるこそうたてけれ、さて姫君は六角堂にまうでたまひつ、三七日こもりおはして、さま／＼に祈りし給へり、満する夜の曉うちまどろみ給ふに、御帳の内より、高き御聲にて、汝は我あたへし子なれば、あらしき風にもあてじと、影身に

そうてまもるなり、幼よりみなし子となり、思ひをすることを不便にはおもへども、かなはぬならひなれば、方なし、いまはとく／＼下向せよ、これより下向せん路にて、はじめにあひたらん人を、なんぢがつまとするならば、未はめでたかるべしとのたまふとおぼえて、夢はさめぬそばにふしたるめのも、同じくかやうの示験示験を蒙ふりぬると語りければ、姫君わらはの見しにもたがはざれば、いかさま御利生御利生なれば、たのもしく、二人うち具して下向したまふほどに、いまだ夜ふかなれば、人もいまだもうでざりしに、此頃御堂に物狂とて、童の住みけるか、一番にゆきあひける、姫君よく／＼見たまふに、歳は甘ばかりにて、髪はそらさまにかきみだれ、顔黒くよごれ、身には麿麿をきて、さながら人のかたちとも見えざりけり、いかに観音の御利生御利生なればとて、かゝるあさましきものを、つまと定むべきかと、あさましく、恨めしく、乳母乳母もろともに泣き沈み、やりすごさせたまへば、物狂申やう、車のうちへ申たきことあり、我此あかつき観音の示験示験をかうむり侍りぬ、人にはさやうの事はなかりしかと申に、いと耻かしく、中／＼人も聞きなば、



くわんさうは諷争  
の字にや北の方の  
夫に對しての意見  
の義なるべし

いよく人わらひならんとおほしつ、扱やがて車にうちのせ忍ひ  
やかに落窪に入らせ給ひて、過したまひぬ、あさましとおほしけれ  
ども、観音の御利生なれば、もしやと末をたのみつ、さまざまにいた  
はり、あさからぬちぎりをかはしたまひぬ、いつしかま、母北の方き  
、つけて、よき事こそは、日頃申せしことをは、みなくわんさうのやう  
におほしつ、うけひきたまはぬゆゑに、あのごとくなるあさましき  
ことをも、し出したまふなれ、それみ給へ、姫ぎみのこのほど六角堂へ  
まゐるとて、夜つめ日詰ひよめをしたまふは一門のおもてぶせし給ふなれ、  
さらば世の常の人にてあらばこそ、物狂とて、人笑になりしものを、  
我聞にひきこめ、心うければ、海へも川へも沈めたまへど、恨みかこち  
ければ、中納言こゝろのうちにも、し實まことならば、あさましき事にもある  
かな、さればとて、いかでつらきめみせ侍らん、彼が母のかぎりの時ま  
でも、くれぐれといひおきたまひし事も、忘れねば、いかならん人にも、  
みせきこえばやと思へども、まとならぬ親子の中は、思ふまゝ、ならね  
は、さてのみすぐせまし、露の身のきえうせなんと、思しも、姫ぎみのゆ

ゑにこそ、思ひ亂れていみしからぬ様にて、かやうには侍れ、姫君のと  
とては、たとへいかなるふしぎありとも、心うくはあらじとのたまへ  
ば、まゝ母思ひの外なれば、ねたく口をしくて、いかにもして中納言殿  
にみせて、疎ませばやとぞおもはれける、さるほどに物狂は落窪の御  
方にて、あかしくおぼしけたまひしか、まゝ母のつらくあたりたまふ事を、  
あさましくおぼしければ、或時のたまひける、かくていつまで、人にし  
のびつ、すぐすべきぞ、御身の中納言殿に見参申べし、そのよしをの  
たまへどかたり給へば、姫君は、さなきだに、人の笑はるゝに、思ひの外  
なる事をものたまふかないかにして、かやうの事をば、親子の中にい  
ひだすべきと、あさましくて、ちたび案じ給ひしかども、観音の御ひき  
あはせありしことなれば、いづくまでも人次第とおぼしつ、中納言  
殿へ御文参らせらる、はづかしき申とにて候へども、しかぐのとな  
ん侍りてと、かゝれたり、中納言殿御覽じて、人の日頃申し、もいつは  
りならざりけり、いかゝすべき、さればとて、姫に耻みせんも、心苦しけ  
れば、對面すべきと、申されける、姫君、よにうれしく思しつ、かくと

たらせ給へば、さらば装束を請ひてこのたまふほどに、また文あそばして参らせたまへば、立烏帽子直垂を参らせけり、物狂見たまひて、まづはかやうの物着たるためしなして、いてかへし給へば、あら心ぐるしや、中納言殿おぼさん事のうたてさよと、おぼしけれども、ありのまゝに、いひてまゐらせ給へば、もとより、そゝろはしき人なるゆゑに、かやうの事もあれとて、心のまゝにとて、かふりと、のへいとしんじやうにして参らせ給ふ、これこそとて御心よげにて、さらば湯殿しつらひ、御湯まゐらせよとて、の給ふほどに、めのとに心あはせて、ごかくして御しつらひたてまつる、髪梳りツツなどして、装束をめさせければ、いづしかはなやかに、あたりもかゝやくはかりに見えたまへば、なんどなくよにたのもしくぞおほしける、夕さりおちくぼの人の中納言殿に對面ときこえければ、まゝ、母その方さまの人々、これを笑はんとて、よそのていにてたり、各花カハナをかざりて、並み居たり、中納言は、いかなる耻がましき目をやみんすらんと、心くるしく思しかども、姫か爲にて侍れば、たとひいかなるめみるとも、おほして出たち給ふ、さるほ

ごに落窪の人は花やかに装束して出給ふ、北の方の人々、物のひまより、これを見て、笑はんとてのぞきけれども、わたり殿のあひだは扇をかさして、通らせ給ふほどに、更にいかなる人とも見えたまはず、さ敷にいらせたまひぬ、中納言は消え入る心地せられけるが、今はかなはぬ事ぞと、おぼしなほし、これへわたらせたまへとありしかば、ものもいはす、中納言殿より上のさしきに、むすこ居直りて、扇をかざしておはしけり、人々、これを見て、さればこそ痴者チモノよと、見るに違はず、いかなるかたちにてか、あふぎをはかざしぬらん、をかしさよとつぶやきける、盃参るにも、ことはもなし、まして扇をもとりたまはず、中納言は腹をすゑかねたまひつゝ、たとひいかなる人にてましますとも、姫君にかくうちとけてましますうへは、親子オヤコの間に、さのみ御心へたてたまふへきにあらず、今は扇をとらせ給へかしこのたまへば、ほけほけとうち笑みて、扇をとらせ給ふをみれば、あたりもかゝやくほどの御ありさまなり、中納言見たまふに、たゞ人ならねば、うち驚き、頭を地につけのたまふやう、君は殿下の御子二位の中將殿と見まゐらせて

ぬ、老のひが目にて侍るか、かゝるいふせき所に、ものし給ふごは、ゆめ  
く、おもひより候はで、日頃びろうをあらはして侍ること、まことに  
おそれ入てこそ候へ、さても御事ゆる殿下も北の政所もおぼししづ  
みておはしますに、なとや夢にもしらせたまはざりしぞ、あはれ高き  
も卑くきも、親のおぼしめすほどに、御子はおほしめされさるに、さら  
ばいそき御所へ参りて、このよしを申べしとて、殿下の御所へとまゐ  
られける、殿下も北の政所も、二位の中將殿うせたまひぬとて、あさか  
らぬ御歎きにて、ものもきこしめしいれす、うちふしておはしける所  
へ、中納言まゐられしかは、これへとてめされ、いかにそやとおほせけ  
るに、中將殿の御あり様を尋出しまゐらせて候と、申されければ、殿下  
のき、もあへたまはず、これは實かうれしやな、今まで世になきもの  
と思ひしに、かひなき露の身のながらへて、又うれしき事をもまくか  
など、御こゝろありけり、中納言殿ことの體をありのまゝに申されけ  
れば、さらばとくくと、迎の車まゐらすへしとて、殿上人牛飼雑色に  
いたるまで、われもくと参りつとふ、やかて中納言御車のしりに乗

てまゐらる、御車中門にやういれければ、みうちにおはせし人く、  
皆くこぼれいて、中將殿を見まゐらせ、いかにして今までおはし  
まさざりつるぞ、御こと故に、このころ世のさわきにて侍りつるに、ま  
つくと何事なく御わたりこそ、めてたけれどとて、よろこぶことおひた  
し、殿下夫婦の人くは、あまりの事にや、物ものたまはず、うれしさ  
のあまり、涙にくれてそおはしける、中將殿のたまふやう、われおもは  
すに、狂亂の身となり、なにとなく世中あちきなくて、或る夜御所をし  
のびて、山々寺々を修行して後、六角堂の観音にまゐりしに、ふしきの  
示験をかうふりつ、中納言の娘にあひなれ、この年月かの許にあり  
しなりとのたまへは、北の政所この由をきこしめし、いかなる人にて  
も、御身の心をと、めたまはんには、いそき御迎たてまつるへしとて、  
御車きよげにしたて、雑色牛飼にいたるまで、花やかにして、まゐら  
せたり、中納言このよしを見給ひ、さてもまゝ、母の申されしこと、も  
を承引し、つらくもあたり侍りなは、姫君かく幸し給はんや、かしこく  
もいとほしみける事よとて、ことにうれしくおほしけり、乳母も、この

ほと継母のつらくあたりたまひし心くるしき、いまはかく花々しき  
事のいてくれは、ほこりかほよろこはしくて、夢の心地をしける、姫君  
はことにはなやかに、美しく装束して、出給ふを中納言はつくく  
と御覽して、うれしきにも、まづさきだつものは泪なり、哀れ母上のま  
しまさば、よになき事のやうによるこびたまはんものをと、袂をしぼ  
りたまひぬれば、北の方はいさゝ、妬くぞ腹立ちつぶやきけり、かくて  
姫君は殿下の御所へおはしつきぬれば、北の政所見給ひて、あらうつ  
くしの御ありさまや、中將殿の心をとめてたまへりしは、ことわりな  
りとほめたまふ、實にいみしき御幸ひやと、羨みまゐらせぬ人はなし、  
その後中納言まゐり給へば、殿下も北の政所も、此日頃中將をかしつ  
きたまふとき、てまことにたのもしくこそ侍れば、かへすく有難  
く侍れ、今は世を中將にゆづり侍べし、御身うしろみして、よををさめ  
たまへとて、關白をは中將殿にゆづりたまへり、さて父殿下夫婦の人  
々は、出家とならせたまひて、山里にぞ籠りたまひける、さて關白殿は、  
太政大臣に歴あかり給へば、おちくほの姫君は、北の政所とぞ申ける、

澤野の中納言も大臣に成り給ひ、めでたきことはかぎりなし、さるは  
どに北の政所は、おちくほにおはせし時より、身たゞならずなやみた  
まふが、このほどの御祈りのしるしにや、やすくと玉のごとくなる  
若君いでき給ふ、人々の喜たとへん方はなかりけり、かやうになに事  
も、めでたくのみなりさかえたまふ事、これ観音の御利生なりとて、や  
がて御堂を造立し、所領をつけまゐらせたまふ、是を見かれをきくに  
も、佛の御方便に身をまかせ、丹誠無二に祈り奉れば、利生忽あらはれ、  
諸願必成就せずといふことなし、ありがたかりし御誓しんじてもあ  
まりあり、仰ぎてこれを信すべし、

今宵少將

○新編御伽草子

十八

# 今宵の少將開題

この今宵の少將の物語は、一名を雨やどりともいふ、本によりて文段に異同ありて、一々對校しがたし。原本は寛永四年八月十一日寫之とあれば、おもふに足利の末の世の作なるべし。虚構の小説にはあれど、其の脚色甚妄なり。まづ按察大納言の娘の私生兒が、時の帝の女御の皇子のかたはなりしが爲に、竊にとりかへて、その私生兒は皇子となり、春宮となり、遂に御門になり給ひて、その御子また位をつげりといふ趣向なり。これを長谷の觀音の利生に歸して、佛の功德と讃歎すれども、御國においてはあるまじき不敬無禮の脚色といふべし。されど足利の世の亂れに、綱常の壞れ甚しき比には、名分も大義も失ひぬれば、太平記には天皇御謀叛の語あり、平家物語には重盛の父を教訓すことへ記せり。顛倒の甚しき此の如くなれば、一步進めて皇胤の亂れを假想して、かゝる物語かけるも、またその時世の反應とやいはまし。畢竟は無智の俗僧等が、觀音の利益を誇張せんとて、かゝる事を記したるなるべし。その世の様を見るべき爲には、これも一つの資料ならん。

## 今宵の少將

按察大納言の姫君  
二歳にて母にわづらふ

男の田舎へ云々  
ある男の乳母を誘ふなり

いと昔にもあらず、中ごろの事にやありけん、按察大納言と申す人はしげり、同じ程の御女をかたらひ給ひて、すみ給ふほどに、比類なき姫君一人まふけ給ひて、いつきかしづき給ふ事限なし、二つばかりのころ母上例ならず惱み給ひけるが、いたう日數も積りて無常の風に誘はれ、終に空しくなり給ふ御跡のなげき譬へん方なしといへども、後の御事などもすぎつ、やうく忘草も生ひければ、又北の方を迎へ給ひて、この御方にも娘君二人出て來たり給ふ、いつしか、この姫君たちの御事ばかりにて、もとの娘君をば、唯乳母の許に住せ奉りて、わたくしのやうに、いたはしくも心苦しう明し暮して、男の田舎へ誘ひけれども、我さへうち捨て奉りては、誰かは哀と申すべきと思ひて、片時も立ち離るゝ事もなくぞ侍りける、姫君は御年の重なるまゝに、事に觸れて哀なる有様かなと思しめしつゝ、けて、御涙がちにて過し給ふを、乳母は心苦しく思ひてなく、つれづれと詠めさせおはしませ

五ヶ鞍馬に詣つ

んよりは忍びやかに鞍馬へ参らせ給ひて、御心をも慰み給へかしと申せば、實にもと思し召して参り給ふ、乳母は又他事なく一すぢに、この姫君の御事を祈り申しけり、念誦も過ぎければ、下向せんとし給ふ程に、日も暮れて道恐しきうへ、姫君のならばぬ御徒歩に、いたくたびれ給ふ程に、御いたはしくて、今宵は通夜申させ給ひて、御心しづかに御かんさんともかくもどぞ仰せける、乳母も佛の御前にて、御經三十卷讀み参らせて柱に書きつけ、る、

鞍馬山いのる心をあはれみて

みちびきたまへ後のしるべに

姫君は佗しく苦しく思しけれども、よと共に念誦し給ふ、ころは四月二十日あまりの事なれば、有明の月影ふけていと哀なり、折しり顔に郭公一聲二聲なきて通りければ、なくはむかしの人や戀しきと、すぞろに悲しく思しめして、姫君かくなん、

たれにまたかたらひおきて郭公

鞍馬の山に鳴きわたるらん

いんきんは看經の字の唐音なり

なくは昔の人や戀しき新古今集の郭公花橋の香なごめてさわる下の句なり

夢の告

名にし負ふくらまの山はくらくとも

うき世をてらせ有明の月

さうち詠めて、少しまごろみ給ひける御夢に、傍に童子一人ありて、初瀬へ参り給へとの給ふと思へば、夢覺めてふしぎに思し召して、御乳母にこのよしを語り給へば、わらはも只今さやうに現ともなく侍りければ、いかにもして初瀬へ参り給へとて、下向し給ひて、やがて初瀬へ思しめし立ち給ふならはせ給はぬ御事なれども、御夢想に任せてはるく参り給ふが、我身の事はまづおきぬ、母上の御菩提を導き給へ、同じくば一つ蓮に迎へ給へ、かゝるうき世にながらへて、かひもなしと深く念誦し給ひけり、乳母は唯一すぢに、姫君の御事をぞ祈り申しける、かくて日も暮れける程に、苦しうてそのまゝ、通夜させおはしまして、夜もすがら念誦し御經を讀みたまふほどに、八聲の鳥もつげわたり、檜原が末に残る月影も、哀催す心地して、姫君かくぞつ、け給ふ、

初瀬山尾への鐘のこゑ聞けば

月をのこしてあくるしの、め  
とうち詠めて下向し給ふ、ならばぬ旅の空にて、行やり給はず、乳母い  
とぞ心苦しくて、御手をひかへて、とかく慰め奉りて行く程に、奈良坂  
といふ所にて、暫し休らひて、

人しれずくるしき奈良の坂にして

君をぞ祈るこゝろひとつに

とうち詠めて、下向し給ふ、かゝりける程にやうく、京に入り給ひぬ、  
五條あたりにて雨降りければ、さるべき家の門に立ち寄りて、空の氣  
色を見給へども、いと、恐しく降り増りければ、せん方なくて立ち給  
ふ、宿の庭を見給へば、橘盛にていと、おもしろく、とにかくに思ひ煩  
ひ給ふ處に、雁あげたる車、牛かけながらやり入れたり、見ればいつく  
しき殿上人なり、忍ばん方もなくて立ち給へり、いかなる人なるらん  
と怪しくて、すきさまに見給へば、妻髪のかゝりいといつくしくて、な  
べての人とは見えす、御髪扇をひろげたるやうにて、長に餘りたり、同  
しき細装束の人寄りて、かいしやくしけり、いかにも賤しからぬ人な

歸途の雨

かいしやくは介錯  
なり即介添の意な  
り

大將の子の中納言

り、やつれたるさへ、理なくいたはしく思して入り給へり、この人は、大  
將の御子に中納言と申す人にて、ぞおはしける、この家は乳母の許な  
るが、常にはおはす所なり、御乳母出で、いかに御供の人々のぬれ候  
らんとて呼び入れてもてなす、雨はいと、増りければ、姫君せん方な  
くて立ち給ふ、この中納言人知れず御心にかけ給へるは、いかにこの  
人のぬれ給ふらんと、いたはしく思して、御乳母に仰せけるは、雨にし  
のひて立ち給ふ人、この妻戸に入り給へと仰ありければ、女房に笠さ  
せて、あやにくなる雨は、やがても晴れ難く侍る、立ち寄り給ひて、雨  
をもすぐし給へと申しければ、姫君の御乳母は情ある人とは思ひな  
がら、これも雨やどりの便なきにも侍らねば、こゝにても過しなんと  
思し召しよりてうけ給はるこそ、御嬉しく侍るとて、返したりければ、  
又おし返し、何かは苦しく候ふへき、ことごとくしく思しめすべからず  
とて、あながちに申しければ、實にいつとなく立ちたるも、侘しげなる  
と言ひて、姫君ひき具して入りにけり、鮮明なる屏風几帳の内に、耻し  
ながら立ち入りて、衣なんどのしごろに濡れたるを、中納言めしもの

雨やどり



遣り給へなんぞす、め給へば乳母こしらへていだす。姫君の御乳母これ程までは思ひよらぬ事かなと思ひながら、姫君かくと申しければ、道の苦しさに、やがて臥し給ひけり。この中納言は、大將の一人子にておはしますうへ、藝才人に優れて、内のおぼえもめでたくおはす程に、殿上人上達部の中に、姫君もつ人の、我もく、と望みおはしければ、ごも、いまた定の人もおはせさりけるか、いかなる前の世の契にや、この姫を一目御覽じてより、理なく御心にかゝりつ、ゆかしく思しける程に、雨にことよせて出で給へり、やうく静りて、忍びやかに几帳押しやりて添ひ臥し給へば、姫君はさながら夢の心地して、あきれ感ひて物をも仰せられず、乳母うち驚き、こはいかなる人ぞや、かゝる怪しき御歩行も、やうありてさせおはしますに、悔り給ふにやと言ひて、おし奉れば、さらば何事に主人の申すまゝに宿り給ひけるぞと言ひ紛らかしておれる程に、臥し給ふ乳母とかく申しければ、なかくかひあるまじき事の給ふものかな、思ひあまりてこそ参りつれとて、歸りよもし給はず、御乳母力なくしておきさりぬ。姫君はならはせ給は

内は内裏をいふ

田長ならね一本  
田子ならねどもあり

ぬ、御事なれば、恐しくあさましく思し召して、臥し沈み泣き給ふ、どかくなぐさめ語らひ臥し給へり、いかなる前の世の契にや、いとわりなく思しめして、千夜を一夜になさまほしく思、せごも、夏の夜なれば程なく明けにけり、さながらつゝ、むべき所ならねば、日の出づるまで語らひ給ふ、いまだ御年は十五六ばかりなり、實に耻しげなる御有様、道理と覺えて、たうたく離れ難く、つつましければ、いと名残をしくて起き出で給ふ、かくとあらまほしく候へども、かたく奏問すべき事ありて、内へ参り侍る、これはおほつかなき所ならず、ゆめく御心を、おき給ふな、不思議なる御見参も、淺からぬ契にこそ、やがて又参るべしとて、

早苗さる田長ならねど中立ちて

ねみてぞふかき契しらる、

とあそばして、よしある女をして参らせ給ふ、御乳母取りていつくしの御手や、御返事せさせおはしませと申しければ、愛き事に思しめして、御答をもし給はず、御道理なれども、観音の御利生にこそ、ちからな

き事と思しめしなぞらへて、御返事申させ給へど、あながちに責め参らせければ、恥しながら辭みかたくて、扇のつまに、

なのみして生ふる早苗のふかくとて

ひかれにけるぞ悔しかりける

と書きてうち置き給ふを、乳母取りて御使に賜ひけるとて、いかなる人にておはしますぞと問ひけれども、今にきこしめしてんといひすて、歸りぬ、さて御返し渡しければ、中納言に奉る、御手などの美しく、筆のたてとゆふに、いと、うち置き難く、理なく思して、我乳母にこの人ゆめくかへし給ふな、暫し見んと思ひ侍る、歸らんと言ひ給ふとも、歸し給ふべからずと言ひ置て出て給ふ、さて姫君は雨やまば疾く歸らんと申しけれども、御あしのいたさにと言ひ又かゝる所を立出てんもつ、ましく、耻しく思し、召し煩ひたる御氣色の、しるく見えさせ給へば、乳母實に御道理と思ひて、知る人の許へ車をこひに遣しければ、やがてまはして参りけり、乳母何となく出て行かんもはしたなし、嬉しくも候ひつる雨宿、まことに一樹の蔭にてなど言ひ入れたり、

筆のたてさいふに  
な一本に筆の立て  
やうのうつくしき  
文字のならひたく  
ひなくおほしてさ  
あり

車めし寄せてわが  
家にうつへる

中納言かへし申すなど仰せられけれども、いかやうなる人にてはおはしますらん、もし思ひつき給ひても、せんなしと思ひて、承りぬ、これを始めとして、便には侍らすとも、必ずくゝと大方の返事ばかりなり、姫君妻戸のもとにたち出て、一方ならず物思ひつゝ、むにあまる袖の涙、せきあへずしておはしますを、乳母とかくこしらへ参らせて、御車にめさせ、我もうち乗りて歸りぬ、姫君は我が御方におはしつげども、いと、思ひに伏し沈み給ふ、乳母は神佛の御計ひならばさりともとは思ひながら、苦しさをやる方なくて、とかく慰め申しけり、さる程に中納言はうちにて御暇過ぎて、いつしか急ぎ歸り給ひて、尋ね給へば、御乳母何處よりとも知らず、御車参りて歸り給ふを、いかゞ留め参らせつれども、かなはずと申しければ、言ふかひなくして口惜しきものかな、せめて何處とも見置かする事さへなくて、何をしる人に尋ぬべき、さても言ひ置く事もなかりけるか、情なしやとの給ひて、ありつる妻戸を見給へば、ちりたるたち花に、姫君の御手にて、  
なれにしぞ悔しかりける橘花の

かを知る人もあらじと思へば

と書き給へるを御覽するにいと、御面影の戀しくて、ふし沈み給ふを、乳母見奉りて、これ程までは思ひよらすと、あさましき事限なし、中納言殿は空しき床に臥ししづみ給ふを、郭公音づれてとほりけるを、我を問ふかど、いか、戀を添ふるこ、ちして、

ほと、きす花たちばなの香をとめて

なくく、戀ふる我ぞはかなき

どうち詠めて、さても親のありと言ひしが、しられじと急ぎ歸りたるにや、いかでその人を知る便もかなと、神佛に祈り給ひけり、さる程に五月の頃にもなりぬ、かくていつとなく人目つ、ましくて、扇と橘と御懐に入れて出て給ふ、いつしか乳母も、つらく、我身もうらめしく悲しくて、我方へおはしつきて、あるにもあらぬ心地して、明し暮し給ひけり、姫君は乳母の心の中も耻しければ、いひも出し給はず、さても思ひかけざりし夜の夢の行方も知らず、人知れず悲しくて、露霜ならば消えなんものをと、夜盡しめし歎かせ給ふばかりなり、乳母は今

中納言女の行方を尋ね

中納言の父母婚をすいむ

姫君た、ならず

こそありとも、辱くも鞍馬の御つげ、初瀬よりの下向の事なれば、實に佛の御ちかひならば、さりととも念じけり、中納言は日敷の積るにつけても、この人の行方を知らさせ給へと、神佛に祈誓申し給ひけり、せめての事にありし扇と橘とを取り出して、御覽じけるぞいたはしき、父母も一人子なれば、いつとなく詠めがちにておはするを、心苦しう思ひ、宰相の君と申す人の御女なべてならずおはするに通ひ給ひて、心をも慰め給へとの給へども、萬思ひ入りたる御氣色にて、御返事もなかりけり、いかなる御心ならんと、母上なげき給ふ事限なし、中納言はた、雨宿りの人の面影の、忘る、間もなく、思ひ積もりて過し給ふ、さるほどに姫君は、前の世の契や深かりけん、一夜のしるしにた、ならずなり給ひて、惱み給ふを、乳母は見知りまゐらせて、こはいかなる事ぞとて、あさましくは思へども、ちからなき御契と思ひなぞらへて、過ぐる程に、月重りてはやその月にもなり給へば、御心にもしるき程なれば、何となり行く我身ぞと、一方ならぬ御心苦しき譬へん方なし、御乳母はこの事を人に漏らさで、たひらかに見奉らん、もしいかな

たうし詳ならず或は當時の字にや

る事もおはしまさば何せんとしづ心なく悲しく思ひけるが、わらはが姉にて侍る人、たうし女御の御乳母にてありけるを尋ねて、御心をも慰め申したく侍れども、父君いかゞ思しめさんと憚りけれども、親しき人多き中にも、これぞ大事を漏らす事あらじと、たのもしくて、文こまゝと書きて遣しけるが、猶々細やかなる事は某御見参にて申し侍らんと書きてぞ遣しける、その返事には、委しく承りぬ、をりふし里に出て、侍る、必ず待ちまゐらすべし、又姫君いかにねびまさり給ふらんと、御ゆかしくこそ侍れなど、細々と書きたるがまづうれしくてやがて御車に乗せ参らせ、我身も乗り忍びておはしけり、女御の御乳母、さても母上おはしまさば、いかでか、る伏屋には入らせ給はん、いつくしの御容貌や、さも時めき給ふ人々の御女の、九重の内にもおはしまさず類なき御有様かなとて、御髪撫で奉る、かくて乳母に申さる、やう、珍しき御ありさまと、見なし参らせて侍るは、ひがめにやと言ひければ、本よりこの事言ひ合せん爲に來たる事なれば、つ、まじながら初よりの事しかゝ語りければ、力なき御契りにてこそ侍る

女御の乳母の家にうつる

乳母のまさ夢

らめ、いたく歎きそ、佛の御計ひなれば、たのもしく思し召せ、これにては知る人も侍るまじなど、かひあるさまに言ひ慰め申しければ、嬉しくたのもしくぞ思しける、姫君はこれを聞き給ふも、いと、耻しく悲しく、せん方なきまゝ、に所狭くまで御涙にむせば、せ給ふ御有様、實に道理といたはしくて、どかく慰め参らせけり、乳母はたひらかにおはしまさば、いかゞしくさはくり奉らんなど、終夜思ひつ、曉ほどに少しまごろみたる夢に、姫君の御懐より、月鮮明に出て、光隈なくさしたるに、初瀬の別當と思しき人の袖に受け取りて、うちへ参り給ふと見て、うち驚きぬ、尋常ならぬ夢かなと思ひて、夢解のもとにて語りければ、實にめでたき御夢なり、國ぬしの生れ給ふべきにこそと、おはせ申しければ、よき事こそめでたけれ、さあらん時よろこび申し侍らん、なご言ひて歸りぬ、さて姫君に夢のやう、又博士の申しつる事なご申しけれども、御耳に入れず、思ひ埋れておはしますをりふし、雪いたく降りて、程なく後より消ゆるを、美しく思しめして、  
ふる雪に我身をなさば世の中の

夢解の占

うきたびごとに思ひきえまし  
軒端の梅の風に散るを見て、今までつれなくながらへて、物思ふ身にな  
るよとかなしくて、

さそはる、花もろともとに散りもせで

世になからふる身こそつらけれ

どうち詠め給ひける、御心例よりもいと苦しげにおはしませば、御乳  
母あはて騒ぎて、いかかご申せども、答をも去給はず、うちそばみて御  
涙せきあへ給はず、つゝ、むにあまる氣色、實に御いたはしく思ひて、共  
に涙の流るゝを、さらぬやうにもてなして居たりけるに、あるじの女  
房も、女御この程御誕生あるべしとて、世の中の御祈なにかとひしめ  
きけれども、この姫君渡らせ給へば、心苦しさに、御くしい御あそび  
など申す程に、たひらかに男にてうまれ給ひぬ、姫君は、唯かゝる序に  
消ゆるわざもがなど、おほせけれども、心に任せぬ御祈なれば、悲しく  
おぼしめす、御子を見奉れば、いつくしきなんども、申すもなかく、愚  
なり、これをいかにして、育て奉るべき、人知れぬ御事なれば、御乳の人

男君生る

女御の御産

も尋ねがたし、我が内にはさりぬべき人もなしとて、佗びければ、女御  
の御乳母、何さまにもまづとりあけ給へ、いかなるやうもあるぞかし、  
なごあはする程、内裏よりなごや遅く参り給ふ、疾くく参らせ給へ  
と、御使ことくしく申しければ、取る物もとりあへず、車に乗り急ぎ  
参る、母上も父大臣も驚き給ふ事限なし、御祈禱一方ならず、山々寺々  
へ仰せて、大法秘法を誦せられけり、いまだ春宮もおはしまさねば、あ  
はれ皇子にて渡らせ給は、いかにめでたからましと、上下申しあへ  
り、女御后數多の御中に、優れ給へるおぼえなれば、御祈りども、大臣以  
下の人々うけ給はり、至らぬ限なく仕う奉り給ふ、御おと、は春宮に  
奉らせ給へども、程なく失せ給ひしかば、今皇子御誕生とぞ祈らせ給  
ひける、かたへの女御たちは、妬くそねましく思ひ給ひけり、一日惱み  
暮し給ひて、暮程に生れ給ふ、皇子にてはおはすれども、更に人の容貌  
にてまします、鬼子といふものにやと見るに、肝も心も消えていか  
ゝすべきと口惜しくぞおぼしける、内に思しめさんも面目なく、殘の  
女御たちの聞き給はんも心苦しうて、いかせん、人の容貌ならばこ

鬼子うまる

そ産み給へるとて、人にも見せ奉るべき、大事に惱み給ふ程になんともてなして、疎き人は近くも参らず、内裏よりの御使隙もなく参りけるにも、いまだそのみ申せば、いと御祈りは雨の脚よりも隙なく、世間のひゞきことごとくしくぞ侍ける、そねましく思したる人々の、かやうに聞き給はゞ、いかに嬉しく思ひ給はんと、一しほ口惜しく侍る、母北の御方は、我身にもかはるものならば、命も惜しからず、もだへこがれ給ひけり、御乳母近く寄りて申すやう、この事内裏へ申し上げんも面目なし、忍びやかにて、よき兒に取りかへ奉らんと申せば、北の御方實にもと思しめして、何ほどの人、何處にか侍らん、さやの事あらまほしく侍る、さりながらあまりに無下ならん人の子は、いかゞあるべきなご、の給へば、御乳母賤しくは候はず、わらはが妹の君、按察の大納言なる人の御女、親にまられ給はぬ男をまふけ給ひて、いかゞはせんと佗び給ひておはしつるを見棄てがたく候ひて、昨日も遅く参りたり、父も尋常ならぬ人、とこそ申しつれ、兒は實にらうたく見え給ひしと申しければ、北の御方少し胸あきたる心地して、いつくしきといふこ

姫君の生める男子  
女御の鬼子と取  
つへつ

も、たゞ人なれば、王位を保つまでこそなくとも、あまりにあへなければ、呼び給へ、見て計らはんどの給ふ、御乳母文かきて、心苦しく佗び給ひし兒、急ぎこれへ参らせ給へ、覺束なく思しめすべからず、委しき事はみづから参り申さんと書きて遣はす、姫君の御乳母、何事ならんと思ひながら、抱き参りて、むかひの車に乗りて参りけり、姫君はさすがに覺束なく、心細くぞ思しける、御壺へ車やり入れたれば、女御の御乳母、急ぎ出で、このよししかく語りて、君の御爲かたぐめ、でたき事に語りければ、實にありがたく侍りて、さて御乳母抱き奉りて参りければ、北の御方御覽じて、皇子と申さんもめやすく、いつくしくこそ喜び給ふ事かぎりなし、まづ祝なればとて、かさねの衣に紅の袴、白さうちきぬ一襲綾一襲、その外色々の物ども、乳母にとてたびにけり、さて歸りてこのよし姫君に申しければ、御心安くぞ思しける、さてもまさしく合せつる夢解かなと思ひて、いろくの衣ども取らせてけり、さる程に、兒は女御の御方に入れまらせければ、花やかに泣き出で給ふ、父大臣を始めとして、いかにやくと問ひ給へば、皇子にて

皇子のていはいご  
は假親として御養  
育の爲

皇子御誕生の御祝

女御中宮にのぼる

渡らせ給ふよし、御乳母申しければ、喜び給ふ事なかく、斜ならず、や  
がて内へ奏間申しければ、喜び思しめす御事限なし、さてかのかたは  
なる皇子は、ひきつゝ、みて深くひそめ給ひぬ、やがて内裏より、御はか  
せなど参らせらる、産湯には、典侍参り給ふ、儀式おびたし、大臣公卿  
殿上人残る人なく参り給ふ、北の御方御乳母これを見るにも、かゝる  
御事なからましかば、いかに口惜しくおもはまし、なごぞ語らひ給  
うける、皇子の御父には、帥の大納言、御母には、その北の御方定まり給  
ひぬ、一の皇子にておはしければ、内にも、めでたき例にぞ申しあひけ  
る、御産養我もくゝと仕う奉り、御ひき物白銀黄金、いろくゝさまくゝ  
の寶物、數をつくして参らせらる、七日も過ぎぬれば、行幸ならせ給ふ、  
御供には、右大臣、大納言、中納言、殿上人、その以下は、數を知らず、かくて  
皇子入れ参らすべきよし、宣旨ありければ、御父御母とひつき奉りて  
御儀式常ならず、見奉りておのくゝ譽め、仰ぎ奉る事申すばかりなし、  
大臣はうれしさなかくゝなり、さて御幸のしるしとて、おとゞ大將大  
臣にあがり給ふ、女御は中宮にぞなり給ふ、大納言は大臣になり給ふ、

母君は上の姫君の  
事なり

姫君家に歸る

北の御方は三位、中宮の御兄三位の中將は大納言、四位の少將は右近  
衛の中將になされ参らせて、いつしかめんくゝによるこびの眉を開  
きけり、かたへの女御だちは、羨しくぞ思しける、今七日過ぎなば、皇子  
は内裏へ入らせ給ふべし、三月過ぎなば、春宮に立ち給ふべきに定ま  
り給ふ、實に日に添へて引き延ぶるやうに、いつくしくねびまさり給  
へば、あまりの嬉しさに、母君の御方へも、常はいろくゝの物ども参ら  
せ給ひければ、さびしきも引きかへて、猶行末たのもしくぞ思しける、  
あさましかりし事どものかゝるべき契にや、いつしかこの君の御徳  
を見申すよと、日ごろの悲しさも晴る、心地してぞおはしける、御乳  
母さのみかやうにおはしければ、人もあやしめ参らせん、今は殿へ歸  
らせ給へとて、花やかに出でた、せ給ひて、入れ参らせければ、繼母見  
給ひて怪しき事かな、この程物忌とて籠り居て、いかなる事かして、親  
のため口惜しく、耻ぢがましくなんど、の給へば、乳母あさましく思  
ひかけぬ事を仰せあるものかな、妾が姉にて侍る人内裏に候ひける  
が見参らせて、あまりにくゝ見苦しくおはしますとて、この衣裳はし

繼母の讒言

たゞめ參らせ侍るなりと申せば、さもあらじ、この夏の頃より怪しき法師のかたらひ給ふと聞きしが、實なりけるぞや、殿聞き給ひて、かにいみじと思しめさんと、實にくげに言ひすて、内へ入り給ふ、乳母は口惜しき事を聞きつるものかな、實の親にておはしまさば、ある事なりともかくし給ふべきに、つゆもなきに、さりげなくも仰せありつるものかなと、うらめしくぞ思ひける、姫君はどかく物をも仰せられず、泣くより外の事まします、乳母はさりともなき事なれば、申しはれなん、いたく歎き給ひそと、いろ／＼に諫め申しけり、さて大納言殿内裏より歸り給へば、繼母の給ふやう、申すにつけて心憂けれど、御爲聞きにくき事は、あまりにあさましくて申し侍る、我身も姫あまた持て侍れば、いづれも疎ならず思ひ奉るに、對の君この夏の頃より、いやしき法師と語らひ給ひけるが、親の聞き給ふ事も、とて表着などいろ／＼の物ども贈りけるよし、聞く事の心うさよ、まことしからねども、たしかなるやうに語り侍りしぞ、との給へば、大納言聞き給ひて、さすがに母のいとほしがかりて、臨終の時心にかけて言ひつるに、果報

對の君はこの姫君のこゝろ

皇子内に參るや、て春宮になる

なかりけるよ、なか／＼おひ出してうしなひ給へと、の給ふぞうたてしき、繼母は言ひすましつるものかなと、嬉しくて、これは乳母がわざにてぞ侍らん、乳母をこそ追ひ出さめとの給へば、ともかくも御計ひとぞ仰せける。

さるほどに皇子は、日に添ひていくしく成人させおはしませば、大將大臣世になく、いつきかしづき給ふ事限なし、中宮この母君をむつまじく思しめして、常に御音信ありけり、二七夜過ぎければ、皇子内裏へ入らせ給ふ、中宮も添ひまゐらせて參り給ふ、もとは麗景殿なるを、今少しも近き所と思し召して、承香殿しつらはせて、うつし給ふ、その日にもなりぬれば、公卿殿上人親しきも疎きも御供に參り給ふ、めでたしなんども、恐なり帝は皇子のいつくしくおはするを、御覽あるにも、いと中宮の御事御志の數添ふ心地してぞ思しめしける、二位殿中宮に申させ給ひけるは、春宮の御介錯には、按察大納言の女こそ心安く侍れ、親のおぼえもなくおはすらんも、いとほしく候ふと申し給へば、實にもよき事にこそ計ひ給へと仰せける、をりふし大臣參内

姫君を春宮の介錯に召さる



申されたるに、中宮よりかくと仰せければ、大臣もつとも然るべき御事に申し給ふ、やがて按察大納言の方へ御使あり、春宮の御かいしやくに、さりぬべき人を尋ねれども候らはねば、御女むすめ數多おはしますなれば、一人參らせ給へと仰せありければ、大納言さやうの御宮仕に、かひくしき事いか候らはん、さりながら一人參らすべきよし申し給ふ、さらばたいの君を參らせ給へと仰せければ、母も候らはねば、さやうの御宮仕には思はしくこそ侍らめ、そのうへ幼きより棄て置きて候ふ程に、いかやうにか生なまひたち侍らんと申し給へば、御使申されるは、中宮も二位殿も、この君をとの御志にて侍れば、とかく辭ことみ申させ給は、悪しかりなんと申しけり、大納言御はからひのうへはともかくもと領承申して出で給ひぬ、ふしぎなる事かないか、聞しめて、あながちにの給ふらん、久しく見ねば、いかは覺おぼ束つかなくて、すぐに對の屋へ入り給ふ、乳母を呼び出し給へば、繼母の仰せられし事を聞き給ひて、おはしたると、胸うち騒ぎて出でにけり、大納言姫君はと尋ね給ふ、これにと申せば、仰あるべき事あり、見參に入るべしと仰せ

ければ、物覺えては見奉らぬ親なれば、耻しくて頓とんにも出で給はず、疾くくと申し給へば、うちまろいたるさま、あてやかに愛敬あいきやう満ちて、いづれもおろかど見ゆる所なく、髪のか、りらうたく、目を驚かすばかりなり、我子ながらも類たぐひなくまもりいりてぞおはしける、内裏うちの御宮仕も、かたはらいたくもあらじと思ふにも、この日ころうち捨て、過しつる事を、いかに恨うらみと思ひつらん、耻しさよと思しめす、さての給ふやう、中宮の御方より春宮の御かいしやくにと仰あり、いか思すとの給へば、姫君は耻しくて答こたをもま給はず、乳母うのはいかなる事をか仰せられんと、心苦しく思ひつるに、思はずかくの給へば、嬉しさ限なくて、いつとなくかやうにかすかなる御有様にておはしませば、朝夕悲しく侍るに、御はからひにてこそと申しけり、大納言げにさぞ思ふらん、親の身なれば、心のおろかは候らはねども、現心うつこころにかなはぬ事ども候ひてありつるに、めやすきさまにておはせけるこそ嬉しけれ、疾くく用意して、召あらば參るべしとの給ひて、歸り給ひぬ、人のおとま給ひつるに、かゝる事のあれば、心嬉しくぞ思しける、さるほどに大納

おまごひは姉妹

言殿は、北の方にかくなんと語り給へば、そねましよう腹立ちて、たいの君はさやうの宮仕をまごげ給はんや、我身こそむすめとてかしづきたまへ、いやしきふるまひしたまふをば知り給はずや、耻をもかへりみずなんごとのたまへば、度々かなはじと申しつれども、ごかく言ひよらせ給ふを、いかゞ辭みは申すべき身なれば、それ程にかたはら痛くも侍らすなんごの給へば、いとやすからず思ひて、さらば多きおと、ひなれば、三人ながら参らせ給へとの給へば、残をばめしもなきに、いかでか参らすべきとぞの給ひける、さてその後日を定めて、二位殿よりいろ／＼の御装束ども参らせ給ふ、中宮よりも御衣ども遣はされければ、いつしかかすかなりし住居をひきかへて、女房うへ童はしたものに至るまで、参り集ひ、いろ／＼御出立目を驚かす御事どもなり、繼母を始めてそのかたさまの人々は、いかなるとの出て來ぬらんと、そねましくも、美しくも思はれけり、その日にもなりぬれば、内裏へ参り給ふ、めでたかりし御事なり、さるほどに姫君は、内裏へ参り給ひて、御匣殿とぞ申しける、皇子を見たてまつり給へば、我御子とも覺え

姫君参内

御匣殿といふ

中納言のおもひ

ぬに、らうたくいつくしく思しける、御匣殿は抱きまゐらせ、玉の御輿に乗り給へば、手かけぬ公卿はなかりけり、めでたかりし事どもなり、父大納言も、これ程いみじかりける人を棄て置きけん、あさましきよとて思しける、春宮は、弘徽殿におはしければ、匣殿の御中めでたくおはしましたけるとかや、春宮の日々にいつくしく成人せさせおはしませば、帝いつきかしづき給ふ事限なし、さながら鞍馬初瀬の御利生と思しめして、みづから忍びつゝ、常に詣で給ひけり、乳母に仰せつけて、月参りもありける、春宮いみじくおよすがまさり給へるを、みたてまつる人々は、さこそは王威とまをしながら、父の帝にも猶優り給へるなごご、ごり／＼に譽め申しければ、中宮も匣殿も嬉しき中にも、そら恐しくぞ思しける、さても匣殿一夜見し中納言を、御簾の内より見いだして、一夜の夢に、かゝるめでたき人の出で來給ふとは、いかでか知り給ふべきと、人知れず哀にぞおぼしける、中納言は見し面影の忘る、時もなくして、宮仕も物愛き心地を給へども、ごにかくに過し給ふ月日の立ち行くにつけても、ありし人の行末を知らせたび給へと萬

ちかの鹽かまほち  
かさいはん枕詞

乳母の心

の神佛に祈り給ふぞ哀なる、さるほごに中納言匣殿の御局を何とな  
くゆかしく見遣り給ふに、ある時物の隙より覗き給へば、實に目を驚  
かして、いつくしく、一目見るよりも夢現とも覺えず、あきれ給へば、御  
年二十ばかりにもやとおぼえて、髪のか、りたをやかに、褂の裾垂り  
ゆたかに、餘りにほやかなりし、黛は霞にもる、遠山を見るかと疑は  
れ、すさまじく、いにしへの漢の李夫人、唐の楊貴妃、日本の衣通姫など  
といふとも、いかでかこれには優るべき、一夜の夢人をこそなべてな  
らぬ事に思ひしに、それもほのかなりしよはなれば、詳にも覺え候は  
ず、いかにしてこの御面影を忘るべきと、思ひて見し人とは夢にも知  
り給はず、故なき人の戀しさを、匣殿の面影に思ひうつして、今又始め  
たる戀路に迷ふ我心、明けぬ暮れぬとこがれ給ふ、匣殿の御乳母、中納  
言はいまだ知り給はじものを、あはれかくと申して、一所に同じくは  
住ませ參らせばや、かやうにめでたき御事も、誰ゆるぞやなど、申し  
ければ、匣殿思ひもよらぬ事との給へば、心強くぞすぐしける、さて中  
納言殿は、いつか匣殿の面影に心をそめて、明暮内裏に候ひ給へども、

兵部は侍女の名

千賀の鹽菴近きかひなくして、いと、物うき數添ひて、せん方なくぞ  
思はれける、匣殿の兵部を語ひて、みそめしよりの心のうちをかきく  
ぎきて、の給へば、方々より數多申し給へども、なか／＼御返事さへな  
きよし申しければ、いと、思ひぞ増りける、兵部も中納言も、まめやか  
に覺えて、理なく思ひ入り給ふ心の中、さすがにいたはしく辭みがた  
くて、いかさまさりぬべき、序侍らば、申してこそ見めと申す、中納言斜  
ならず、喜び給ふ、その後兵部、匣殿の手すさびに、扇に歌を一首書  
きて、うち置き給ふを取りて、つかひ居たり、中納言一日の事は、いかに  
やとの給へば、忍びやかなる、序侍らで、いまだ申しいでずと申しけれ  
ば、心に入らぬ程も、顯はれてなど、恨み戯れ給ひて、その扇の歌は、い  
かなる人の筆の跡なるらん、よしありて見ゆるとの給へば、これこそ  
匣殿の書きすて給ふと申しければ、懐しくて取りて見給へば、  
人しれず見しおもかげは、かはらねど

思ひもよらぬ雲井なりけり

と香染の薄地の扇に書きすて給へるうつくしさ、目を驚かすばかり

扇のえにし

なり、つく／＼と見給へば、ありし人の筆の跡に似たるかなと胸うち  
さわぎ、もしそれならば、いまだ忘れざりけりと嬉しく、ふしぎに覚え  
て、この扇暫し貸せよとの給へば、人に見するなど仰せ侍りし程に、か  
なふまじと申しければ、誰にか見せんとして、取りて我方へ歸り給ひて、  
ありにし扇に見合せ給へば、疑ふ所なく、かゝる事を知らずして、し  
ぶもぢずりみだれ心の中、せん方なくて明し暮しけんことよと、過ぎ  
にし方もはかなくぞ思しける、さてもこれ程ねびまさり給ひつると、  
いとゞしづ心なくて、扇の歌をば、書き留め給ひて、しろき色紙しきしのなつ  
かしさに、

はじめより渡りはてにし山水の、

音絶えにける君がつらさよ

思ふよりはかなかりける年を経て

君に知られぬこひをするかな

一夜の夢の後は、忘る、間もなくなん、どこま／＼と書きてはしに、  
もろともに忘れず思ふ中ならば

なにか今までふかくしのばん

夢ばかりむすびおきけんしたひもを

我よりほかに誰かときけん

と書きて、一夜の扇にありし扇をとりそへて、御消息珍しくし給ひて、  
匣殿の御局をた、き給へば、あやしや誰なるらんとて童わらわを出して見  
せ給へば、大納言の御局はと問はせ給へば、これにと申す、嬉しくおほ  
えて、申すべき事侍ればと、童して言ひいれらるれば、只今人々多く参  
り給ひて侍る、誰にてもつきて申し入れさせ給へ、いたはる事ありて  
めしありつれども参らずと、返事し給へば、うらめしながら、さらばこ  
れを参らせ給へとて、御懷ごまごより文取り出し、童にたびて歸り給ふ、持ち  
て参りて奉るを、何ぞやとて御覽すれば、ありし扇をとりそへて、  
かたみとて書きとゞめける水莖の

あと見るたびに袖ぞぬれける

と書かれたり、見給ふに胸うちさわぎ、哀にもふしぎにも思しけれど  
も、知れる人として、御乳母ばかりなり、のこりの女房たちは夢にも知

り給はず、待ち顔ならんもつ、ましくてもし人たがへやと、扇ばかりを留めて、文をば返したまふ、童たち歸りて、中納言殿をたづねけれども見え給はず、この由童は申して御文を參らせければ、わすれとは誰が方へや、など、の給ひ、人々參りければ、さらぬやうにてひき裂き給ひぬ、御乳母かやうの事を聞きて、いとほしくも情にもおはさず、はや知り給ふにこそ、神佛の御はからひとたのもしくぞ覺えける、斯て御文日々、に間なく參らせ給へども、御返事もなかりしかば、あこがれた、すみ歩き給ふ、或時乳母を呼び出し、一夜の夢の後は、御行方をだにも知らずして思ひ歎きし心のうち、かこつ方なきまゝ、に朝夕神佛に祈り申しつるしるしにや、思ひかけす承りぬれば、嬉しくてなど、恨みつ侘びつ、語り給へば、乳母は道理と思ひ、そゝろに袖をぞしぼりける、一夜のつてならで、年月の心のうち申したくてなど、の給へば、參りてこのよし申せば、匣殿は御顔うち赤め給ひて、今や昔の事だにも悔しく悲しく侍るに、心弱くて梓弓末もとほらぬ御事は、人ぎ、も心憂かるべしなど、仰せければ、乳母中納言にこのよしかくと申せば、

再中納言さたら

なか／＼とかく申しても、かひあるまじ、おはする所へ我を導きてたび給へ、どの給へば、乳母實にはじめたる人にもおはすと思ひ、静なる夜御物語申して、里へ出でさまに、中納言の小袖をひきて押し入れ參らせいでぬ、中納言年月の事ども、淺きより深きたとへまで語り給ふ、匣殿はいかにして入り給ふ、まへかど夢の心地して、うちそばみて、とかくの御返事をし給はねども、さすが哀にて小袖を涙の薄氷、うち解けて、その後は互に年月の心のうち語り明し給ひけり、さるほどに鐘の音鳥の聲も明けゆく空をつげ渡る、人目もつ、ましくて、中納言はかへり給ふ、今さらなる心ちして、やがて文を書きてまゐらせ給ふ、むすぶての雫やいかにそみつらん

けさの袂をほしぞわづらふ

とかきて、玉章結びて參らせらる、乳母とりつき參らせて、御返事させ給へと申しければ、しのび／＼の御こゝろに、

山水のすまで久しくなりぬれば

汲むともなくて袖はぬれにき

中納言に嫁す

その後は夜なく、ことに通ひ給へば、おのづからつゝむとすれど、皆人漏れ聞きて、いとよき御事なりとぞ申しあへる。中納言通ふも物憂きに、里へはいで給へなご、いつしかの給へごも、末とほらざらん事はなか／＼物うかるべし、そのうへ中宮の御心のうちもいかならんと、ためらひ給ふ、中宮このよし聞しめし、素よりしろしめされたる御事なれば、よき事と思しめし、幸ひの事かな、匣殿をば中納言にたぶよし、仰せけるぞかたじけなき、匣殿は里へ出で給へば、中納言もおはしけり、大納言は、わがもてなさぬ果報幸のこれ程におはしけるよと、嬉しくてかしづき給ふ事限なし、繼母暫しこそ心よからずおはしけれども、大納言かくばかりかき給へば、諸共にもてなし給ふぞ本意なき、中納言の方はいと狭しとて、雨宿の所をしつらひ、諸共に思ふ事なく、明し暮し給ひけり、匣殿はいと、初瀬の観音へ御代官どもをまゐらせ給ふ、我身も御詣ありけり、かくて年月を経る程に、匣殿若君三人、姫君二人いできさせ給ひて、とり／＼にいつきかき給ひけり、さる程に春宮は、十三の御年御元服あり、やがて御位を譲り給へり、十一

春宮の受禪

此邊は朝廷の故實知らぬもの、筆さ見えたり

月に河原の御萩とて、ゆきのうへより始めて、九重の内ひたすらこのいとなみとして、田舎よりも武士ども、檢非違使など参りけり、ことし五節もいみしく行はれ、公卿殿上人われも／＼と心を盡し、百敷の内物の見にてこそ侍りける、春宮の御姿いといつくしくおはしければ、院も斜ならずぞ思しめす、やがて除目を行はれ、中宮は女御になり給ふ、父は大臣になり給ひ、左大臣は准后になり給ふ、中納言の父は右大臣、中納言は大納言にあかり給ふ、又君達御兄は左近衛權中將、その次は右近衛少將、その次は侍従になり給ふ、その外の人々も、とり／＼に官あがり、喜び給ふ事限なし、かくて月日の重なれば、大納言の大姫君は、殊に優れたる美人にておはしけり、父はなみ／＼のうへにはあたらしく、内裏へ参らせまほしく思しめし、殊にいつきかき給ひけり、御匣殿はせめて腹々にてもおはしまさねば、ゆゑしき事になご、侘び給ふ、帝この姫君の事を聞しめして、ちやうへのしんと、いふ人に、御匣殿のむすめ参らせよと思へども、大納言につゝ、ましく耻しくて、なんとて仰言なりければ、大納言は嬉しき事に思ひて、いつきかき給

帝中納言の姫君に  
文通はし給ふ

き給へども、匣殿はうけひき給はず、ある時權中將内裏へ参り給へば、  
文あそばして、これはいもうとの方へとて賜び給ふ、中將給はりてか  
へり、君よりの御文とて取りいたし給へば、大納言は嬉しく思ひ開き  
て見給へば、いといつくしく遊ばして、ちひさくむすびて、

とこなつと思ひうきねのなでしこを

我れならざらん人に折らすな

匣殿は佗しくおぼしけるを、大納言は嬉しく思ひ給ひて、御返事疾く  
く責め給へども、姫君は耻しくやるかたなきに、うちそばみてお  
はすれば、當時の人の心はさなきものを、疾くくとして硯紙を取りい  
たし、教へか、せ参らせ給ふ、

よそにのみ詠めこそすれとこなつ

まだ二葉なる花のけしきを

中將御返事を持ちて参りたり、帝みかどひらいて御覽あれば、筆よわに美し  
く書き給へり、殊に御心まさりしてぞ思しける程に、女院は左大臣の  
姫君をと思しめして、御使などあるよし聞き候ひしものを、知らぬ人

御匣殿女院と密事を  
語る

にても渡らせ給はず、争ふやうあらんも、つ、ましくなどの給へば、大  
納言は我かたより参らせばこそ、聞き召してめさる、うへは、いか  
申すべきとて、八月には参らせんと、御心にはいとなみ給ふ、北の方は  
などやらん御心に入り給はぬふしきに思しけり、さる程に御匣殿内  
裏へ参り給へば、女院珍しく思しめして、物語もありなんと仰せけれ  
ば、御前近う候ひ給ふ、折ふし人もなくて、御匣殿ははばかり候ひて、御  
物語申させ給はず、女院その姫君を内裏より召さる、よし、聞きま  
ゐらせ侍り、をかしくてなんと、仰せければ、御匣殿實にその事にて  
候ふ、みづから心やましくて、心にも入れ侍らず、ほし心にもなきとて、  
朝夕大納言心によからぬ事に聞ゆるを、乳母大納言は、かりにはか  
くと申せ、かばかりしり給は、思ひ留まり給ひなんと、あなかりに申  
せども、さすがつ、ましく、いまだ申しも出さずとの給へば、女院は、  
御匣殿も今まで大納言に語り給はぬ事、心の深きよとありかたく思  
しめして、大納言殿ばかり聞き給はんは、何か苦しかるべき、この君お  
はせずは、誰々もかくめでたき事のあるまじとの給へば、おぼろげな

乳母御事を語る

らぬ事にてこそ、かやうの御はからひおぼしより侍りつらん神佛の御はからひにてこそよ、かやうの事とも内裏へ密に申しなば實に思し召してんやとて笑はせ給ふ、御匣殿御乳母は女院の幼く渡らせ給ひし時より見奉りしかば、素より疎くも思し召さぬうへ、今は殊に御匣殿むつましく思し召すま、我御乳母にも劣らず思しければ、御前などへも憚らず参りける程に、今宵も候ひてつきせぬ御物語申しけり、女院いかなる契にて、大納言見そめ給ひしぞやと仰せければ、乳母申すやう、母上には、幼き時後れ給ひぬ、妾ばかりを頼み給ひて、すくし、かば、いたはしく心苦しくて、慰め奉らんと鞍馬へつれたち参りて、御夢想に初瀬へ参りて、下向せし道にて、雨宿りに一夜の夢の枕を並べ給ひし事ども、しかく御物語申しければ、女院實にあやなかりけるかな、その時かやうにめでたかりつる君にて、あるべしとは思し召さじ、などと仰せければ、匣殿千年のめでたさは知り侍らす、あさましくつ、ましかりし事ども、何時の世にか忘れ候はん、うるさのふる物語や、人の聞く事もやと笑はせ給ふ、帝は忍びやかに、御物語のゆか

帝の立ち聞き

しさに、忍びて夜御殿より出でさせ給ひ、立ち聞き給ふ程に、ふしぎの事に思し召し、この程君参らせん事を、匣殿の心にも入らぬやうにありつるは、さてはこの故にてや、大納言は知らぬにこそと哀にや思しける、さる程に、夜もやうく明け、れば、匣殿御里へ歸り給ふが、帝の御前に参り給ふ、いつよりも細やかに、御懐しげにおはします、夕の事をや聞し召しけん、と辱くもそ、ろに恐しき心地して、匣殿は出でさせ給ふ、帝はこの事、女院の御乳母とは知りたるらんと思し召して、御けつりの料とて召しければ、急ぎ参り給ふ、帝まろが問はん事、ありのま、に申してんやと仰せられれば、何事をか隠し参らせ候ふべきと申しければ、夕匣殿の女院の御前にての物語の末聞かまほしくて、など仰せけり、御乳母いざや夕は用の事候ひて、里へ出で候て承らずと申す、さては約束を違へたり、まろがうへをばいかで漏すべき、委しく申せと仰せければ、さてはこの事聞し召しけるよと思ひて、御匣殿初瀬よりの下向に、雨宿りせさせ給ひて、唯一夜の契に君をまふけ給ひし事、偏に初瀬の観音の御はからひにておはしませば、御位に即かせ給

御削りの料は理髮の爲といふ



道理なりは以て  
外の言なりは佛  
人の心を惑は  
せり

帝に遜位の御心を  
おこし給ふやうに  
あらまほしき所な  
り

ひし。御道理にて。など初より今に至るまでの事しかく申しける  
につくくと聞し召し。實に哀に思し召し。御涙ぐみてゆめく女院  
に申すべからず返す。披露ならじと仰ければ。申すに及ばず侍る  
とて御前を立ちぬ。帝はこの事聞し召すよりも。いかにして。たゞ人な  
りけるが。位に即き御代をば保ちけん。我が身乍らかたじけなく思し  
召しければ。いよく御政事を怠らす偏に延喜の聖代の御跡を繼が  
せ給ひけると。人皆申しあへりける。さる程に。大納言はゆめくか、  
る事をば知り給はで。姫君の内裏へ参り給はん事をのみ朝夕急ぎ給  
ひけり。又左大臣の姫君唯一人おはしますが。尋常ならず實に類なく  
いつくしくおはしければ。なべての人ならず思し召して。内裏へ参ら  
せんとかしづき給ふが。御匣殿の姫君参り給ふと聞き給ひて。思ひと  
ままりけり。君の事など思し召し。まらせ給ひ。四位の少將の参り  
給ふを。御前近く召して。左大臣の女を。めしのなからんには。世にあり  
ても。何かせんなど申すなる。この文もちて行けと。仰ありて。御文賜は  
りけり。少將賜はりて。左大臣の宿所へおはしつ。御文取り出で。参

らせらる。左大臣開き見給ひて。喜び給ふこと斜ならず。やがて御返事  
ありけり。少將にはいろくの引出物ども出し給ふ。やがて御返事持  
て参り給ふ。さる程に大臣よき日を定めて。出立をぞ急かれける。少將  
かへりて。父大納言にの給ひけるは。内裏より参り候へば。いろくの  
かけ物などたびつると申し給へば。大納言本意なく思ひ給ひて。御匣  
殿にの給ふは。御本意かなひて。いかに嬉しく思すらん。大臣の姫君こ  
そ女御に定まりて。少將御文持て参りて。只今かへりぬ。人は皆ほごな  
き身にて。女などをばおほまじらひを思ひ立つ事もあるぞかし。  
なかく人に笑れなん事こそ安からね。どの給へば。御匣殿は左の大  
臣の事は。はるか先より聞きし事なれば。争ふやうならんもさすがな  
るべし。なごの給ひけり。さても帝は何故に思し召し留まり給ふらん  
と。人しれず思ひ給ふ。さて大臣の姫君は。八月三日に入内し給ふ親し  
き公卿殿上人は。残なく御供申されけり。姫君なべてならずおはしけ  
れば。帝も御志ならひなくぞ聞えける。大納言の姫君も。日に添ひてい  
ごいつくしく。あたりも照り耀くばかりに。ねびまさり給ふにつけて。

ひねはひるれか

大納言始めて秘事を聞く

大納言殿は内参うちまゐりの事安からず思ひ給ひけり、或時大納言ひねしておはしけるを知らずして、乳母御匣殿に申しけるは、内参りの事をこゝまり給ふとて、明暮御心よからず思し召しけるに、殿ばかりには忍びやかに申させ給へかし、あまりに御心深くてもよしなし、そのうへ一日女院にての御物語をも、帝たち聞かせ給ひ、女院御乳母に問はせ給ひける程に、あまりに辱くて、ありのまゝに申されければ、御涙ぐみおはしましけるよし語り侍りしと、申しければ、大納言聞き給ひて、さては北の方は、やうありてこの事を物憂く思しけるやと思ひて、起き出で給ひ、御物語のする、姫君が事いかにやと問ひ給へば、乳母このうへは申し侍るべしとて、初よりの事どもをありのまゝに申しければ、大納言つくくと聞き給ひて、あな心しづかの御事や、かくばかりの事を、今までつゝみ給ひてうたてさよ、さては帝はわがこにておはしけるよ、あな心づよの御事やと、恨み給ふも道理なり、大納言は嬉しくも又そら恐しき心地してぞまします、北の方はうるさのふる物語や、人も聞くらん、ありし夜もよしなき事を申すを、いかでこそうちに

も聞し召しつらん、君の御ため、女院の御ため、我身のため、然るべからずとの給へば、御乳母何かは苦しく侍るべき、疎き人も侍らず、帝も知らざりけん、そのいにしへさへ悔しくこそと、仰言ありけると承はると申せば、大納言の、乳母さへ心つよくおはしける事の本意なさよ、身のうへの事をば漏し候ふべきかと、恨み給へば、童は初より申したく侍りしかども、實まことに思はずながら、後にはなご、仰ありしほどに、今まではかくも申し侍らず、實まことの御子さへ、位をたもち給ふ事はありがたき事にてこそおはしますに、あまつさへ當今あたぎの御事、我は父の帝にも優り給ふよし、人々申し侍れば、唯觀音の御はからひにてこそと、いよ／＼御たのもしく侍れとぞ申しける、大納言あまりの嬉しさに、急ぎ内裏へぞ参られける、何となく参内まゐりし給へば、帝うるはしく引きつろひ給ひて、御對面ある、我御子かと思奉るに、そゝろに涙おさへ難くぞ思はれけるや、久しく御物語申し給ひて、退出だしゅつし給ふ、帝御懷なつかしげに、大納言の後姿うしろすがたを御覽じ送りければ、君も知らせ給ひけるやと、そら恐しくて歸り給ふ、北の方にかくと語り給へば、尋くも御なさけにも

思して、涙を流し給ふぞ道理なる、さる程に女院の御父、大將大臣うせたまひければ、大納言にながく代の政事を行はせ給ふべきよしを宣旨あり、御子左近中將は、二位の大將にあり給ふ、少將は左近衛中將、侍従は左近少將になり給ふ、さて姫君をば、女院の御甥の宮の中納言に、女院の御はからひと婚せらる、事は、少しも違へさせ給はねば、公卿殿上人重き人にぞせられける、世のおぼえめでたく、天下もしづかにて侍りける、かくて月日も重なれば、女御はいつしかたゞならずおはしまして、惱み給ひしかば、父の大將北の方喜び給ふ事限なし、御祝の所は、やがて大將殿の御里なり、その月にもなりぬれば、御祈禱山々寺々にてぞありける、そのしるしにや、無事に皇子誕生ありけり、帝を始めまゐらせて、父大將母上の喜び給ふ事、おろかならず、やがて内裏より御はかせ参りけり、その外御寶物ども數を盡して参らせ給ふ、公卿殿上人に至るまでも、御産養われも、いとみな奉る、先の如く三月過ぎければ、春宮に立ち給ふ儀めでたくぞ聞えし、又宮の中納言の北の方も、たゞならずなり給ひて、若君をまふけ給へり、やがてうち

つゞき姫君出で來たり給へば、祖父の大將中宮に参らせんと、いつしかかしづき給けり、月日重なりて、春宮十三になり給へば、父の帝の如く御元服あり、やがて御位を継がせ給ひぬ、さる程に宮の中納言の姫君、生ひたつま、にならびなき美人たるうへ、かけよりも仰ありければ、やがて内へぞ参らせ給ふ、これはた從弟にてくしからぬ、御あはひにて、うちの大將は、大將大臣にあり給ふ、左大臣は右大將、宮の中納言は左大將、少將は左近衛の中將になり給ふ、女御の御乳母は伊豫の内侍になり、匣殿は播磨の内侍になる、御姫君は、今のうちへ参り給ひて、母君のやうに匣殿とぞ申しける、この御世に、世の中安穩にめでたく、すゑくまでもおはしけるとなん、今も昔も佛に仕うまつり、心に情おはします人は、行末めでたくたのしみ、心に任せて願ひに隨ひて、いづれの生にも生るべし、ゆめく、いつはりなくして、神佛の御利生あらたにかふふり給はん事疑はず御信じあるべしとなり、

田比沙門の本地

○新編御伽草子

四十四

## 題開の地本の門沙毘

およその頃の草子に、本地の名をつけしもの數々あり。本地は法華經の科法に、生本地深信の語より出でたるが、本地垂迹とつけたるも例の事にて、本地は本門の證果を得たる地位をいひ、垂迹は即化身に對する報身をいふさいへり。何々の本地といへるは、其の神佛の緣起由來を説けるものなり。この本地及び次なる貴船の本地など皆然り。畢竟僧徒が、神佛の感德を述べて、教法流通の方便とする一助たりしより起れる也。さて毘沙門は多聞と譯し、福徳の名四方に開ゆ、須彌の半第四層に居る。北方の天王にして、無量の花文を統領し、北洲を守護す、又恒に佛の道場を護り、說法を聞くを以て多聞といふさいへり。この草子の趣は佛經を種として、小説に作れるものなるべけれど、其出典は知らず。祖庭事苑に、贊寧が僧史を引きて、唐の天寶元年西蕃の五國安西に來寇せし時、玄宗不空三藏に詔して、仁王護國陀羅尼を持咒せしめしに、毘沙門天王第二の子獨健、形を現じ、神人五百員ばかり、金甲を被て安西を救ひ、蕃寇を討ち退けし事を記せり。これなどやこの本據ならんか。なほ佛者に問ふべし。さて白拍子の佛神の本據をうたふ由は、既に徒然草にもいひつれば、これ又白拍子の遺風ともすべし。徳川氏の時貞享前後に、淨瑠璃に語りしものにも、二王の本地、天神御本地、邊摩本地、紅葉狩劍の本地(愛宕本地)とも題し、寛延二年春竹葉後少輔が、十帖源氏物語大郎の外題にて語りしよし、年鑑に見えたるにても、騷物の古風の尙存せしことを知るべし。

### びしやもんの本地

せんさい王の宮

むかし天竺に國あり、名を瞿婁國とぞ申しける、其國に王一人おはします、御名をばせんさいわうとぞ申しける、萬めでたき事人に勝れておはします、時に従ひ寶の降る事雨の如くなり、何れも一天下におろかなる事おはせども、是を例し渺なき事にぞ申ける、天か下なひかぬ草木もなし、寶日に従ひて降り下り、白銀黄金の築地に黄金の扉をたて、庭には金銀瑠璃を敷き、黄金の砂ごを鏝ばめ、泉水の木立は光りを交へたる心地して、おもしろき事申すばかりもなし、内裡には鷲の羽鷹の羽にて、宴室造りにぞ葺れたり、金の瓦に銀かねの床を並べ、錦の几帳を立られたり、百八十間の御簾に金の鈿を百廿丈に組まれたり、其うちに壹萬人の公卿大臣、三千人の女房達は圍繞せられておはします、有様例すくなくぞ見えさせ給ふ、されども行末千秋萬歳を有たせ給ふべきと思召すとも、老の身は人も嫌はぬ事なれば、大王も后も齡傾ふきましますことぞ哀れなる、既に大王は御歳九十にぞなら

王に子なし

せ給ふ、后は六十にならせ給へども、末の世を繼せ給ふべき皇子一人もなし、せめて姫宮にてもおはしまさねば、めでたき御中にも、事の外なる騒ぎにてぞおはします、公卿會議有るやうは、昔しよりこのかた人は、申子まことをする事ぞと傳へたり、末の世を繼かせ給ふべき皇子一人もましまさねば、國の煩ひなるべしと申させ給へば、御帝實みかどまことにもと思召、利生あらたにまします、梵王へぞ參らせ給ひける、されども効しも無し、其時寶を傾け參らせんとて、白銀千兩、黄金千兩、絹綾千匹參らせ、其うへに一萬五千兩を寄せ給ふ、又善を爲れば、協ふとて、千僧供養をして、九重の塔を建て、忌々しき願に申させ給ふ、三七日と申す夜半計りなるに、御戸を押し開き給ひて、御とし八十ばかりなる翁、殿杖にすがり給ひて、少し繕ひて申させ給ふやう、御身の子種を天に昇り地に入り、六天を初めて三千大千世界を尋ねれども、さらになし、取らんとすれば水となり、火となり候、いはれば君はむかし小鷹こたかにて、よろづ鳥類翼の命を取り給ひしが、或僧のあらたに經讀み給ひしを、聽聞したまひし故に、南洲の國にきんわうといふ民に生まれて、誓ひをたて

梵王に祈る

梵王の告げ

し事、我世にあらん間、僧を空しく通さじといふ願を立て、常に竈かまど、施行引きつるにより、この國の大王とうまれ給ひけり、心ざし深きは富貴の家にうまる、然りといへども、過去に物の命を殺しつるにより、今子の種有らず、后は前の世は日本美濃の國の二尋ふたひろの蛇へびにてありしが、物の命を殺しつるが、法花經の御聲を耳に觸れしにより、かたじけなくも、後の位に生まれ給へども、子種能はず、汝が思ふより、手か尋ねるは苦しきなりと仰せければ、大王畏まつて申給ふ、假令佛の御子なりとも賜はり候つるものならば、七寶の堂を黄金白銀にて、組て參らせんとて、肝膽を碎き祈り申させ給へば、十方淨土へ參り、佛に申、得がたき子種を申請て、如寶珠の玉を一つ申下しけると、御覽して、殊に光りめでたきを、後の左の御袖に賜はり候と、思召して、やがて其よりして、いつしか后御懷妊ありて、悦こばせ給ふ事限りなし、さまざまの御祈とも日に増し、漸々月滿ち、其の氣色付かせ給ひて、安々と御有様光程の姫宮にてぞわたらせ給ふ、大王悦び給ふ事かぎりなし、御名をば天帝玉姫と申、關白の北の政所を乳母に定め、さまざまの御事申もおろ

女子生まる

王女を見る人皆若くなる

かならず、さてなほ不思議の事有り、大王の御年九十にてまします、この姫君出来給へば廿ばかりに若く成り給ふ、后は六十にておはします、が、十七八にぞ見え見ふ、關白殿の北の御方は、乳母にて五十ばかりなるが、其も十七八にぞ見え給ふ、それならず此の姫宮拜み申人、若きは愛嬌付き、老たるは若くなる、人々申給ふやうは、御帝此の姫宮出来させ給ひてより、后も皆々若くならせ給ふ事、有難き御事と申もおろかなり、されば高も賤きも参りて拜み申しけり、悦ふ事限りなし、偏に地獄の衆生を、佛の救はせ給ふにも劣らず、みかど衆生を哀れみ給ふ事はさる事なれども、さのみはいかで人には見すべきと宣旨ありければ、公卿大臣申されけるは、釋迦如來は中天竺の主し、淨飯大王の御子悉達太子とて、辱しけなき御事なれども、世を厭ひ王城を出で、御姿をやつし、檀特山に籠り、難行苦行したまひてこそ、正覺を遂げさせ給ひしも、しかしながら衆生の爲なり、されば善を爲る者は、三世の諸佛歡びおはしますなり、民百姓なりとも夢々へだてあるまじと申されければ、さらば参り拜み参らせけると限り無し、年寄たるは若くな

まや國の王の王女を見て若くならんと志す

る、若きは愛付きて歸りければ、例少なくぞ申なる、さるほどにならびの國に摩耶國とて國あり、それも王まします、が、この姫宮の御事聞し召し及ばせ給ひて、我此の國の主なれども、年の行くを駐めぬ事こそ口惜しけれ、それに付ても、末の世を繼べき皇子一人も無し、如何かすべき、瞿婁國の姫宮むかへたてまつり、年若くなりてこの國をも譲り参らせんと、の宣旨也、それは然るべしとて、懸て瞿婁國へ勅使を立てけり、その道三年にゆくなり、瞿婁國の大王この文を御覽して仰せけるは、我れ姫宮に片時も離れ難し、其うへ片道三年に行くなれば、立ち離れんも悲しきなり、逢ひ見ん事も難かるべしとて、御涙を流かさせ給ひけり、御返事には遙の雲井を隔て、承はり候事、御勞はしくは候へども、姫君は未だ幼けなく候、其うへたゞ一人にましますは、協ふまじきよし御返事ありけり、摩耶國の大王此よし聞し召し、大に怒り仰せありけるは、瞿婁國は小國なり、摩耶國は十八萬騎の所なり、瞿婁國を討取りて、姫宮取らんと宣旨あり、瞿婁國の大王きこしめし、姫宮設けて昨日まではよろこび、今日は歎けく事ありとて、御涙を流し給ふ、

まや國くる國を討たんぞす

姫宮まや國に赴く

姫宮御年十三にならせ給へば、光り差添ふ心ちして、美しくさ限りなし、御心ばへもおとなしくて、顔打赤め給ふやう、妾故にて候へば、何をか惜しませ給ふぞ、摩耶國は十八萬騎の大國なり、瞿婁國は小國なれば、討取られんは、一定なり、身つから故に候へば、國の亂れあらん事あさましく候へば、摩耶國へ行き、大王の御心を止め侍るべしと申給へば、大王實にもとやおほしめしけん、その出立をぞいとなみ給ふ、姫宮かくなん、

なからへぬ契りぞ今はあだになる

こゝろつゝきて逢ふよしもなし

たらちをにけふはわかるゝ道なりと

あすをゆきあふはしとなりなん

ささきかくなん

たまたはこふた見のうらのおきながら

なかのかけこのはなるべきかな

姫宮

なにとてかふたりのおやをすゑながら

中のかけこのはなれはつべき

かやうに詠したまひて、姫宮は白き生絹十五ばかりに、紫の三ばかりに、薄色の御装束に、白き袴のなまめかしきに、扇さし翳しておはしませば、ひとへに天人かと思えさせ給ひける、御顔は生れ落ちさせ給ひしよりも、薫り、花の匂ひ薫じて、ありがたき御事なり、さても大王をはじめ奉り、留まらせ給ふ人々、御名残りを惜しみ、引き被き悲しみ給ひし事限りなし、御どもの人々は、勇みをなされけり、公卿殿上人五位の侍と申まで、二千人まで参らせ給ふ、日敷七日と申時忍所に御泊にて、をりふし初秋の月隈なくて、清なりければ、琴を掻き鳴らして、故郷戀しくおぼしめして、かくぞ詠め給ふ、

たひのそら月をたよりにいでぬれば

いとこゝろはすみわたるなり

と詠め給ひて、萬壽樂といふ樂を弾き給へば、面白しども中々おろかなり、聞く人涙をながしける、さるほどに月隈なく澄み上ほるに、摩耶

其の途中



國の方より村雲一村引き獲ひけり、姫宮御らんじて、憐れ摩耶國より寄する勢やらんと思し召して、かくぞのたまふ、

天津そら雲のかよひちふみわけて

月ならずしてたれかゆくらん

と詠め給ひて、いかなる人の何方へおはしますぞと、いと優しく侍るやうかなどのたまへば、村雲の中より人おり下りかく

棚機のくも井のそらにすむみつの

きみゆゑいまはおちまさるかな

とて、落くる人を見給へば、年十七、八計りなる人なり、御直衣の美しくきに、紅の生絹の指貫に白き下襲忌々しく、鬚吹流し給ひたるやう、たゞ人とも覺えず見えさせ給ふが、のたまふは君はいかなる人にてましませは、御聲空の雲まで愛たく聞えさせ給へば、思ひの外に天下るなりと仰せありければ、姫宮のたまふやう、吾れは瞿婁國の大王の女子大玉姫といふなり、われいかなることにか、見る人年若くなり、若き人は愛敬付くにより、摩耶國の大王聞し召して、我を迎へとり、御とし

天人下るその名は  
金色太子といふ

姫宮太子と契る

若くなり、給はんとて、御使ありち、の大王へ度々遣はされけり、父の大王も母后もたゞ一人ある子を、いかゞ遣はさるべきとて、惜ませ給ふ事かぎりなし、さて摩耶國の大王は怒をなして、其の義ならば瞿婁國をうちとらん、摩耶國は十八萬騎の所なり、くる國は拾萬騎の所なり、いかでか立て合べきとて、大王も后も歎けき給ふ、十八萬騎の勢には責めらるゝとも、自らをは遣すまじきと侍れども、親の孝養に進み出でたり、されども心苦しき旅の空、月の入るさの山もゆかし、眺めつるなりと答へさせ給へば、其時天下り給ふ御方仰せけるは、予はこれ維曼國の國の主金色太子と申ものなり、瞿婁國の大王姫宮御を、しみのよし承はり及びまいらせ候、予に契りをなし給はば、姫宮を是れより瞿婁國へかへし、摩耶國を我一人行きて退治し奉らんと、のたまへば、姫宮御親の名残り惜み給ひし事を悲しみ、故郷へ歸りたらば、さぞ大王も后もよろこび給ふべしと思召し、大王に御契をむすびさて太子は摩耶國の王を退治し、瞿婁國の軍を止めん事一定なり、それを如何にと申に、我劍を持たり一寸抜けは一千人か首おちけり、二寸抜

太子はまや國を征し姫は國に歸る

き給へば、二千人が首落つる劍あると仰せらるゝ、さる程に姫宮は太子と御契ある、いつしか御名残り惜しみ給ふ、太子摩耶國へそ趣き給ふ、太子かくなん、

いつかまたかさねても見むたひ衣

あかてわかるゝ、きぬのつまかな

姫宮

かさねてもいつかきて見むたひ衣

けふをかきりのみちとおもへは

太子仰せけるは、忌々しくも侍るものかなとて

もろともにすかたはよにもかはるゝとも

むすふちきりのくちぬへさかな

又姫宮かくなん

くちもせぬちぎりときけはたのまるゝ、

まよはむのちはいとゝ、わすれじ

かやうにの給ひてたちわかれんとし給ふ時、太子仰けるは、今よりし

て三年待せ給ふべし、それ過ぎなば空しくなりぬると思しめし、後生

吊ひてたび給へと仰せければ、姫宮はかなき後の契やとて、御袖を絞

り給ふ、いみしく哀れなり、この有様を見る人悲しみますといふ事なし、

わかれちをおもへばもろき涙かな

また行あはむ袖やくちなむ

ひめ宮もかくなん

たのめおくちきりのすゑのふかければ

枕にきえむ露のいのちに

かやうに詠し給ひて、別れ給ふ御心の中おし量り、歸り給ふ人々騒き

あへり、

大王急ぎ問ひ給へば、御供の人々此由ありの儘に申、大王きこしめし

て、さては太子眞の道に入り給ふやと、姫宮に契りを結すび給ふ故に

やとて、御涙を流かさせおはします、姫宮歸らせおはします事、御喜び

限りなし、御喜びの中にも、姫宮は太子に契り給ふ年月も重なりぬる

に、日に添へて戀しく、遙かなる道の程と痛はしく思し召し、袖の干る

さても以下は太子の事を記せるなり

太子まや國に入る

まもおはしませず、  
 さても悲しかるべきとて、多くの御供の人々をば皆返したまひ、金麗駒に打騎りて摩耶國へぞおもむき給ふ。太子御覽するに、水の流れも潔よく、木立も面白く生えかゝり、雲も霞も籠めたる内裏あり、幡鉾を立て、雙べ人の數多かりけり。太子たゞ一人おはしまして、内裡の御際にて申さんとの給へば、公卿殿上人おほく並み居て、此由を聞き、北面の侍を出して、何事ぞと申せば、太子仰けるやうは、汝に言べき事に非ず。然るべき大臣を出し候へど、仰ければ、大臣出で聞き給ふに、太子仰らるゝやう、是れは瞿婁國の大王よりの使なり。瞿婁國へ御勢を立てらるべきと承り候、これにて我一人して防ぎ申べき爲に参り候なり。急ぎ御勢を出させおはしませと申させ給へば、公卿大臣是を聞き、此國の勢を一人して留め申さん事の可笑さよとて、人々笑ひける。太子大に御腹を立ち、たゞ申入させ給へどありければ、馳て大王に申あげければ、何瞿婁國の勢を一人して留めんとや、いかに此國の勢を亡ばさん、恐なりとて、笑はせ給へば、太子御腹を立て、いかにや大王聞き給

まや國王金色太子に國を譲る

へ、摩耶國は大國なりと申せども、其には依るべからず、細き流れを人見参らせてさこそをかしく哀れに見えさせ給ふ。太子は些もさわぎたまはず、勇み給ひて名乗らせ給ふ。遠くは音にも聞け、近かくは目にも見よ、予れは是維曼國の主のひとり子に、金色太子といふ者なり。瞿婁國の大王の宣旨を蒙りて向へり、生年十九になる。戸は摩耶國に曝らし、名を後代に揚ぐべしとて、大刀といふ劔を抜きて振り給へば、一千人が首悉く落ちけり。大王も大臣も惘れ騒ぎ、又重ねて三千人が首前の如く落けり。是れを見て、續くものども肝を消し、震ひ戦き悲しむ事限り無し。大王も斯ては如何せんと思召、大臣に向ひの給ふ様は、我凡夫の身とてかやうの事をば知らずして、多くの人を亡ひつるこそ無念なれ。瞿婁國の姫宮迎へて、我が世を譲らんが爲めなり。今は姫宮も何にか爲ん、太子にこそ譲り参らすべければ、何事も赦し給へ。今よりして太子に世を譲りたてまつらんとて、大王は太子の召したる金麗駒の口をひかへ、内へ入れ奉り、儲の君に備へんとて、奥殿と申す内裡をこしらへたてまつり、人々参りよろこぶ事限りなし。されども

太子は姫宮の御事のみ思召して、御暇を申させ給けり、大王仰に然らば留妻國の姫宮これへ迎へとり給へと申させ給へども、如何がすべきと、今日明日と思ひ暮し給ふ程には、や三年なりけり、姫宮思しける様は、太子は三年待て、其を過ぎばこの世に亡きと、おほしめせと承たまはり候つるには、や三とせあまれども見えたまはず、いかなる太子なれば、たゞ假初の契りゆゑは、かなく成らせ給ふらん、みづから仇なる命の消えやらで、物のみおもふこそ悲しけれとて、袖を絞らせ給ふこそ痛はしけれ、せめての事にや、花園に立ちいで給ひて、花の散るを御覽じて、我が身のうへと思し召して、かくぞ詠む、

あさましや世をうき風にさそはれて

はなよりさきにわれそちるへき

かやうに詠め給ひて、如何に成らせ給ふべき御身ぞと歎かれけり、止まらぬ月日なれば、三年も過ぎ行く、姫宮十六にならせ給ふ、あてになほ美しく見えさせたまふ、光り差し添ふ心ちして見えさせ給へば、いど、太子の御事思し召しけり、姫宮山の端の月を御覽じて、かくぞ詠

め給ふ、

山のはのかたふく月にもとはん

わかれし人はありやなしやと

太子の後世を吊はんとこそ仰せられしにとて、忌々しき御吊ひどもせさせ給ふ、姫宮自から御經遊ばして詠め給ふ、

かきりあるわかれなりともこのよにて

いまひとたびのあふよしもかな

かやうに朝夕詠め給ふ、又かくなん

あさがほをなにはかなしと思ふらん

はなよりさきにわれぞちるへき

と遊ばして、朝夕御心に隙もなく歎き給ふ程に、御こゝろも煩ひながらへ給ふべきやうもなく見えさせ給ふ、御前の人々皆々これを歎き申事限り無し、或時姫宮西に向ひ給ひ、念佛高聲に申し、冥き道に入りぬとも、心は月に曇り有すな、元より極樂を願ふ身なればとて、御念佛を申給ひ、眠る様にて、遂にはか無く成らせ給ふ、其の時乳母御手を取

姫宮太子を慕ひて  
遂に死す